川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十三年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻一〇一五号

日川協加盟

特集 こんにちは新同人です

No. 1015

十二月号

第一回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

このたび川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

課題と選者（各題二句　共選）

課題吟
「ひらく」［雫石隆子（川柳宮城野社）
「　旅　」［川上大輪（川柳塔社）
［西出楓楽（川柳塔社）
［新家完司（川柳塔社）
雑詠　［田中新一（番傘本社）
［小島蘭幸（川柳塔社）

投句要領　規定の用紙（コピー可）または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

投句料　一〇〇〇円（切手は不可）

投句締切　平成二十四年二月二十日（月）消印有効

送付先　〒543―0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七―二〇一
川柳塔社　誌上大会係　宛
TEL／FAX（〇六）六七七九―三四九〇

賞及び発表　各題秀句に賞呈　発表は川柳塔誌五月号誌上
川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

寒中見舞募集

○本誌平成24年2月号掲載
○締切　12月23日

川柳塔社事務所　宛

平成24年　本社句会　開催日程表

会場：ホテルアウィーナ大阪

開催日	時間	会場
1月6日(金)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
2月7日(火)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
3月7日(水)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
4月6日(金)	13:00～17:00	葛城の間(全)　3F
5月7日(月)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
6月7日(木)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
7月6日(金)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
8月7日(火)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
9月7日(金)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
10月8日(月・祝) 第18回 川柳塔まつり	同人総会 10:00～11:00 生駒　3F 句　会 11:00～17:00 金剛(中西) 懇親宴 17:00～20:00 葛城(全) 3F	
11月7日(水)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
12月7日(金)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F

西日本川柳大会

小島蘭幸

橘高薫風先生は、少し高い所にある板の間の上で、立膝をして瞑想をしておられるようでした。私は遠くからそのお姿をずっと見つづけておりました。毎年、弓削で開催される西日本川柳大会に出席すると私はいつも薫風先生と初めてお会いしたシーンを鮮やかに思い出すのです。

第19回西日本川柳大会は久米南町の誕生寺で開催されました。参加者は二六七名で、川柳塔本社から選者の岩本多久志氏をはじめ、清水白柳、橘高薫風、川村好郎氏が出席されています。

団地を降りたら蟻がいた蟻がいた　薫風
団地淋しや雨垂れがなし　薫風

席題「団地」河村日満選の薫風先生の入選句です。当時、「川柳の基本は五七五」と山内静水師から厳しく言われていた私にとって、この2句は正に衝撃的でした。四十四年経った今も新鮮で忘れられない作品です。竹原から午前2時発の夜行列車で出席したことも懐かしい思い出です。

本年10月16日、第63回西日本川柳大会が、久米南町文化センターで開催され、参加者三〇〇名を超える盛会でした。「秋んど祭りくめなん」とコラボした大会は初めてとのことでしたが、会場の回りをぐるっと屋台が並んでいる姿は美しいものでした。

日本一の川柳の町、弓削には駅頭の麻生路郎先生の句碑をはじめ、川柳の小径・公園には大小合わせて二八八基の句碑があります。ひだまり広場には、歴代の川柳塔社主幹、中島生々庵、西尾栞、橘高薫風先生の句碑も建立されています。

うき草は浮きくさなりに花が咲き　生々庵
旅まくら雨にしあれば雨の詩　栞
うろこ雲一枚こぼれ亡母の窓　薫風

日本一の川柳の町、弓削と川柳塔社は、今でも大きな大きな絆で結ばれていると信じている私です。

川柳塔　十二月号目次

座右の句
飲んでほしやめてもほしい酒を酌ぎ　（葭　乃）
私の句
木の葉雨阿吽で歩く老夫婦　金川宣子

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「小松市木場潟」

■巻頭言　西日本川柳大会……小島蘭幸…（1）
川柳と俳句……瀬戸まさよ…（2）
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…（4）
自選集……（46）
温故知新……（49）
川柳塔の川柳讃歌(84)……木津川　計…（50）
麻生路郎句抄……（51）
水煙抄……川上大輪選…（52）
■句集紹介『紙つぶて』川端一歩著……中原比呂志…（73）
特集　こんにちは　新同人です……（74）
■エッセー　私の二刀流……仁部四郎…（83）
誹風柳多留一一篇研究 76……（84）
愛染帖……新家完司選…（86）

川柳と俳句

瀬戸まさよ

川柳と俳句の違いは何か。

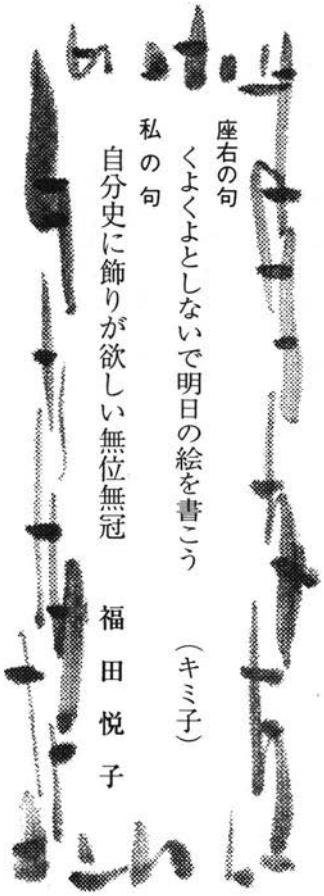
織田正吉氏は「川柳の現在」というテーマのなかで次のように述べている。

- 万緑の中や吾子の歯生えそむる（俳句）
- みどりごのあくびの口の美しさ（古川柳）

俳句は句の重心がより多く「万緑」にあり、川柳は「みどりご」にある。さらに言えば赤ちゃんの口元について俳句は歯に、川柳はもっと人間くさいあくびに重点をしぼっている。俳句・川柳ともに、俳諧連歌からのれんを分けた十七字、高低の差があるはずもないが、この国の人は自然より人間を低く見ると。しかし、俳諧研究者の鈴木勝忠氏によると「俳聖」と仰がれた芭蕉ではあるが江戸時代、芭蕉の俳諧は少数で傍流であったという説が有力である。元禄時代の投句料は一句あたり四一八文、川柳は十六文、つまりソバ一杯分の料金を取っていたと解説されている。

薫風師も冊子「川柳春秋」で俳句を川柳

檸檬抄「ピリオド」……福士慕情・池　森子共選…(90)
『麻生路郎読本』余滴 (6)……桒原道夫…(93)
一路集「畳　む」……太田　昭選…(98)
「けじめ」……齋藤さくら選…(98)
「いろいろ」……飛永ふりこ選…(99)
初歩教室「マーク」……鈴木公弘…(100)
秀句鑑賞「同人吟」……藤村亜成…(102)
「水煙抄」……伊達郁夫…(104)
せんりゅう飛行船⑫……新家完司…(105)
十一月本社句会……(106)
各地柳壇（佳句地十選／西口いわを）……(110)
十二月各地句会案内……(124)
柳界展望……(126)
■編集後記（ひとこと／井上桂作）……朱夏・いさお…(128)



座右の句

くよくよとしないで明日の絵を書こう　（キミ子）

私の句

自分史に飾りが欲しい無位無冠　福田悦子

的に表現した例として、大岡信の「折々のうた」から次のような事例を示されている。

●髪洗う女百態その一つ（俳句）
高浜虚子

●洗髪腋の下から用をいひ（川柳）
長崎柳秀

●葉がくれをこけ出て瓜の暑さかな（俳句）
向井去来

●体操の好きなキウリの逆あがり（川柳）
遠山可住

薫風師曰く「以上思いついた句、目についた句を川柳と俳句に関連づけてみた。虚子の句は長い黒髪を洗う女性のしなやかな色気が格調高く把握され、去来の句はまくわ瓜の畑の瓜の姿から炎暑の厳しさをユーモラスな目で描写されている。同じ内容でも川柳とは画然とした違いのあることがうなずける。その上で川柳は本来、批判詩といえるし、俳句は「わび、さび」を生かす抒情詩と定義される」と述べておられる。

俳人桂信子は「命のこもった句を詠む」ことを求め続けた。麻生路郎は「命ある句を創れ」を生涯、主張された。それぞれの道を極めた人は期せずして、軸を一にしていることに私は感銘を覚える。

津軽万歳　終の棲家と決めている
ねぷた馬鹿夜空へ夢を突き上げる
モノクロの四季を奏でる津軽三味
人情に裏打ちされている津軽
背なの子へ津軽訛の子守唄
津軽から復興願う祭り笛

弘前市　福士慕情

ひと芝居打つにはきれいすぎる空
アドリブの要る日常という舞台
その場しのぎの芝居上手なおじぎ草
優先席で良心に蓋をする
憐憫の目がちくちくと顔を刺す
病名は夫在宅症候群

京都市　高島啓子

千年を見据えて描こう復興図
鰯釣れば鰯料理がちゃんと出る
妻宛に母から秋の茄子が来る

堺市　加島由一

小島蘭幸選

なでしこもカーネーションも好きになる
水をやるハイビスカスは妻である
もう我慢することはない泣きなさい

川西市　西内朋月

大皿に天こ盛りするこころざし
食うために命を賭けたことがある
ポケットに小さい祈りを飼っている
血圧が上がらぬほどの嘘を言い
飽食のゴミ箱で泣くパンの耳
おだてると天まで上がる奴凧

西宮市　秋元てる

ロスタイムこの上望むものは無い
テレビからラジオへそしていい眠り
ある予感　飯だけちゃんと食べておく
未だいけるらし卒寿の血に藪蚊
手ぶらでと言われて余計迷う宴
猫の目の支持率国も揺れている

和歌山市　木本朱夏

いもうとの吹くハモニカも秋のいろ
一本の葦を見ている立っている
千羽鶴が翔び立ってゆく北へ北へ
戦いの前にきれいに歯を磨く
ああ神さまとつぶやくことが多くなる
すこし疲れて水のことばを聴きにゆく

堺市　棄原道夫

頬杖やまるをいくつもかいている
妄想の話が好きな糸電話
カスタネットで舌を挟んでいる遊び
海の祭と山の祭はまじわらず
こころから許していますそぼろ飯
団欒や窓に守宮の足の裏

鳥取市　両川無限

校則を破り仲間にしてもらう
人形の首がゴミ捨て場に転ぶ
ふる里を捨てても針は北をさす
指鉄砲の的は外れたことがない
気付かれぬように回っている地球
大器晩成最後に笑うのは私

松江市　松本文子

寝る羅漢　私もポーズとってみる
力負けするけど男怖くない
貴族の血は流れていない畑を打つ
中位の花で争うこともない
歴史辿って黄泉の国まで行って来た
真ん中で生きることにもくたびれた

松山市　古手川光

原発推進そうだったのか　そうなんだ
商魂が脱原発を許すまい
ボクサーにならねば総理務まらぬ
ＡＴＭが捌く冷たく丁寧に
歩歩歩歩同行二人歩歩歩歩
みんな喜ぶのは懐の温暖化

倉吉市　牧野芳光

警官より尋問うまい占い師
ゆで卵修業のように剥いている
傷口を温め合ってうまい酒
折れた傘私のようで捨てられぬ
老人と海とオンボロ船がある
どうしても妻には言えぬ理想郷

富田林市　中井アキ

お隣も休みは妻と遊んでる
泣き虫のわたしを知っている紅葉
ご先祖が徳積んで来たお陰さま
はよ来なされと天から届く縄梯子
恋愛運上昇中と言われても
洗うても蹴ってもあの日流れない

西宮市　吉井菜々子

忙しなくコーヒー二杯飲んで発つ
口角を上げて只今起動中
スマートにワインのコルク抜くなんて
大皿へお芋とタコと南瓜と
日常をロングブーツではみ出して
秋だから銀杏並木が好きだから

尼崎市　長浜美籠

ワンマンカーで市内一巡秋日和
ああ一年振り子の幅がずれてくる
風評が浚っていった僕の運
爽快なり記念切手で来た手紙
ギブアップしそうプールの一時間
笑うにも泣くにも優し秋桜

芦屋市　黒田能子

履き慣れた靴に誘われ秋の旅
繊細な人かもしれぬ細い首
書いてまた消す鉛筆のひとり言
一瞬に砕いた夢よもう一度
まだ開けられぬ約束の遺言書
何もかも瞬時に消えた天よ地よ

寝屋川市　冨山ルイ子

何時逝くも悔いない命陽を拝む
吃度約束果たすと決めて指を繰る
ハイタッチ元気あげます貴方にも
厳冬が目の前寒かろう仮設
皿洗いつつ避難所の人思う
改めてアア八十と考える

出雲市　竹治ちかし

五人居て正義五つの論交す
黙祷の姿儀悔の形見る
仮の世の中で浮いたり沈んだり
嘘少しまぜると興味湧く歴史
幸せに慣れて領土を見失う
酒過ぎた老父から古い話聞く

青森県　松山芳生

どれほどの淋しさなのか茶毘の風
書を抱いて書に守られて逝きし人
輝いて炎えつきて書の星となる
旅立った師へ万感の掌を合わす
合掌する催事すなおな仏の子
末っ子が墓守してる　現住所

枚方市　伊達郁夫

水澄んで私の影がうろたえる
ねじ巻けば同じ仕草を始め出す
終着駅せめてトイレを拭いている
がらくたの荷車ばかり引いている
蛇行した川だやさしい味がする
あなたにも笑みを送った罪がある

東かがわ市　川崎ひかり

何もかもさらけ出しては生きられぬ
三面鏡誰にも見せぬ顔を知る
明日への扉を開ける米を研ぐ
聖書繰るこんな処に諭吉さま
政治家に民のカマドが見えてない
輪の中に消息通が居て便利

大阪市　岩崎公誠

鈍感の男つくづく頼りない
言い訳を百ほど抱いてまだ不安
呟きが聞えるように言う遺恨
信号が青になっても確かめる
憧れの芦屋夫人のつぶらな目
ジーンズの破れひろげて履く若さ

奈良市　加門萌子

不景気といえども大阪が元気
リニューアルデパート北に揃いぶみ
適齢期もう失くなるか婚事情
イクメンイケダン軽い造語がそぐわない
シベリアと言えば必ず亡父憶う
丁寧に生きねば勿体ない命

大洲市　中居善信

地下足袋の形に足が馴染みだす
血糖値ふと躊躇ったつまみ食い
故郷にふるさとの味茗荷の子
片ちびた鍬にも父の握り癖
すり鉢の底にも人が住んでいる
丸坊主くらいのけじめなら軽い

和歌山市　坂部紀久子

ちぎり絵の額から我が家秋が来る
苦労積んだ秋のみのりへ放射能
手で割れば熟れたいちぢく笑い出す
釜揚げの白すは真白な懺悔
紫色の恋をしてます今八十路
百歳でまだ現役の聴診器

竹原市　石原淑子

節電に負けぬ身体に鍛えねば
週間予報見ながら柿を干してます
コスモスの毎年生えて風と咲き
日本に厳しい年の幕おりる
にい年の願い平和を復興を
ありがとうインコ家族の愛と逝く

神戸市　山口光久

夢を追う靴だ毎日磨かねば
見映えより機能で勝負する裏地
加齢かな右脳がメルトダウンする
四捨五入されてむくむく湧く闘志
言い切った裏に努力の汗がある
張り切っている時妻に艶がある

訥弁の男が話す真実味
物忘れ昭和も遠くなりました
木犀はどこだろ香り追っている
雨だから辛目のカレーに決めました
ケイタイの会話がずーっとついて来る

神戸市　山口美穂

世渡りの上手な風に乗る綿毛
晩年はボトムアップで好きな道
ついて来る影が時どき飛びたがる
鈍行で自分らしさを取り戻す
三角四角個性が活きる塔の石

神戸市　山崎武彦

筋書の通りにゆかぬ定年後
生きている事が不思議と占い者
明日の事分らないから欲が出る
丹波栗さすがおいしい味と艶
虫の声子守唄です里の秋

神戸市　山田婦美子

若い日に今の私が見えてたら
卓上に木犀一枝秋と居る
今ならばまだ夢を見る力ある
子と結ぶケータイそこにあるだけで
陽を浴びて歩ける朝にありがとう

神戸市　木村貴代子

上座から気くばりの猪口辿り着く
だんじりの勢い街が炎えている
先行きが不安で今日も夢を積む
貸衣装保護者が競う七五三
ベテランの脇で主役が気をつかい

神戸市　伊勢田毅

路地の空狭いながらも星二つ
世話好きが過ぎて話の種になり
約束を守る小指を寝てなでる
路地裏の内緒話はかしまし
八十路坂今日もこつこつ汗が出ず

相生市　中塚礎石

タイマーに罪を被せて朝寝坊
閻魔へは嘘の数だけ詫びを積む
勢いの無い日は明日のために寝る
ギブアップせずに次来る波を待つ
人を抱く両手は丸く暖かい

明石市　糀谷和郎

なぐり書きこの子ピカソになれるかも
年の暮友の名を消す重いペン
贋作の仏像なのに手を合わす
突っ支い棒時にははずし気付かせる
まだ飛べる気を入れ直すコンパクト

芦屋市　竹山千賀子

杖車玄関にあり母と住む
断りなくアップにされている遺影
杖車ウィンカーなど見ていない
診察券五枚平均的老後
確認をせよと機械に念押され

尼崎市　山田耕治

かつて住んだ熊野の出水思い遣る
氏神御香宮の由緒今に聞く
四条大橋観光客として渡る
早い目に雨戸を手繰る夕時雨
おとぼけのできぬ私のお馬鹿さん

尼崎市　春城年代

秋祭り備蓄の元気使い果て
草刈りも彼岸花だけ刈り残す
郵便の受取りだけの留守番で
呉服物矢張り最初の店で買い
また逢おう生きていたなら握手して

尼崎市　林昭三

節電で噴水消えて人も消え
節電も本気値上げに負けられぬ
新大関九州場所に菊薫る
手を出せば火傷しそうな曼珠沙華
来年のノート書店の一等地

尼崎市　軸丸勝已

透明はどんな色にも染まらない
角とれて漬物石に丁度いい
笑顔からとても真相聞き出せぬ
美人すぎとても隣に座れない
家猫になっても消せぬノラの性

尼崎市　加川靖鬼

大臣の言覆水盆に返らない
盆の挨拶品物だけが行き来する
扇風機エコの優等生の顔
ひまわりの絵ハガキにある青い空
言いたいことハガキに書けるだけにする

尼崎市　藤岡りこ

彼岸花秋風吹いて庭飾る
初出勤彼女の顔も輝いて
夕涼み親子四人で浴衣着て
我が家の湯今宵有馬か白浜か
地獄蒸し見ているだけで可哀想

伊丹市　山崎君子

熱冷めた彼の仕草が気に入らぬ
緩んでる夫婦の絆締め直す
茶柱が立った程度の期待感
弾んでるポニーテールが右左
よく見れば良句も少し出来始め

加西市　金川宣子

三連休あって曜日がややこしい
秋終盤テレビ観戦忙しい
孫からは打てば響くで返信が
娘の心手編みにふわり届けられ
秋の色着ているような山歩き

川西市　米原雪子

アラフォーが男児を産んだ大手柄
子が二人孫が四人もいて鑑
不器用な生き方でした頑固者
私をごまかす酒を呑んでいる
ご苦労さん囮の鮎を解き放つ

三田市　堀正和

古里の稜線の月古いまま
電話より父の意見はＦＡＸで
カウベルのようにケータイ提げている
冷蔵庫覗く回数減って秋
観覧車少し余韻を抱いて降り

三田市　北野哲男

八合目結び直した靴の紐
寄りかかる机があって頑張れる
これも運自分で蒔いた種を悔い
今度逢う時を正念場と決める
わたくしのためだけ落ちる砂時計

三田市　久保田千代

ひとことが無口から出て的を射る
来ないでと孫が念押す運動会
舞台から降りる姿に歳がでる
若者に申し訳ない映画代
曼珠沙華はなやかなのにさびしいね

三田市　田中章子

何度でも握りしめてる夫の手を
蜘蛛の巣も野花も揺れる秋深し
故郷へ行けば自然にリラックス
取り戻したい若さを趣味に賭けてみる
ゆっくりのリズムで夫の介護する

三田市　石原歳子

窓開けてだんじりの音仏にも
赫灼と人徳積んだ柳友が逝く
鍋や皿磨いて鎮火する怒り
美味い秋体重計に叱られる
ほとぼりが冷めて切ない秋夜長

三田市　上垣キヨミ

りんどうがそろりと秋をつれてくる
人間の喜怒哀楽にお月様
人を恋う形に萩の佇まい
むらさきの袱紗は無理をにが笑い
一線を越えて気楽な風でいる

西宮市　西口いわゑ

痛い言葉するりと抜ける年の功
手のひらに過ぎし日をのせまんまるく
仁王さまに愚痴を申して山の寺
痛いです似んでええとこ母に似て
曼珠沙華あんたはほんま律儀だね

西宮市　山本義子

時計の針がゆっくり進む待ち合わせ
見え見えのタネで拍手をとる手品
ゴミの日にカラスのボスが場を仕切る
呑んべえの飼い犬珍味ばかり食べ
マドンナには定年なんかありません

西宮市　足立茂

転がった鞠追いかけて萩ほろろ
現地集合年に四度の墓参り
やっとこさ見合いする娘に菊薫る
疲れはてしみじみ今日は敬老日
駐輪場が地下へもぐってから平和

西宮市　亀岡哲子

曼珠沙華衛士の焚く火のように燃え
入院して待つことばかり強いられる
六十六年りんと立っている過去
鮎だ鮒だと平和です寿司談議
武器が鍬ならばエールをおくりたい

西宮市　緒方美津子

卒業をさせてくれない遊び癖
水商売女で持っているクラブ
子育てをしながらナンバーワンになる
うたかたのように無くなる店と客
品性に欠けてはいるが情がある

西宮市　片山忠

仕事した顔で見上げるオリオン座
灯火を少しください老いの闇
夢託す若木が校門をくぐる
薄紅をつけて宅配便受ける
味付けは天然水という不思議

西宮市　藤本直

飛行機だ歩幅合わせて散歩する
子どもの頃鼻をつまんだ金木犀
ニュータウン金木犀に誘われる
パスポート切れて旅友夢に見る
ふるさとの訛聞いてる薩摩焼き

西脇市　七反田順子

おふくろを労う夕餉栗ご飯
歩数計気にせず歩く露の朝
十六夜を優雅に見せる里の山
無人駅着いてすすきに迎えられ
カラオケは中締めとする祝賀会

姫路市　古川奮水

奈良市　米田恭昌

忍び寄る老齢秋風に知らされる
開運のきざしか朝の茶が旨い
口実は法事ホントは金が無い
眉に皺インテリらしいデスマスク
認知症ちびった老父の悲しい目

奈良市　阿部紀子

身の丈をようやく解る歳となり
インテリもジムで筋肉鍛えてる
霊柩車離さぬ母の慟哭よ
座るのを見とどけバスが発車する
近江路は国盗りの城そこかしこ

奈良市　辻内　げんえい

しつこいほど言ってくるのは裏がある
惜しいとも言ってもらえず辞める羽目
自らを労うために独り旅
菅辞めろ耐えた三月を自画自賛
地球人しっぺ返しを自然から

奈良市　岩本浩二

突然に不幸背負わす神も居る
故郷は瓦礫積まれたままに秋
道草を楽しみながら行く余生
煩悩を捨てられぬまま八十路入り
なんやかや理屈つけては祝い酒

奈良市　天正千梢

今日こそは作句のいのち取りもどし
みれんなど気にせずさっさと進まんか
リハビリに日をついやして昨日今日
秋深し物の哀れが身にしみる
夕やけをゆっくり拝むゆとり出来

生駒市　飛永ふりこ

明日香路の棚田に秋が躍ってる
金木犀憂さの一つを抱え込み
大いばり出し巻卵君の味
コスモスの中で気付いた恋ほのか
忍と根浚い白寿のえびす顔

香芝市　大内朝子

父母偲ぶ心はいつも子に返る
初恋の頃など思う秋桜
車座で一緒に笑うみんな友
あとわずか真っ赤に燃えているわたし
生きいきと介護を受けぬよう生きる

橿原市　居谷真理子

男と女解けぬクイズを解きながら
無為の日のせめて言葉を一つ研ぐ
お行儀の悪いケータイ飼っている
月にまで尻尾振る身になりはてる
鳥は鳥に私は君に歌ってる

橿原市　安土理恵

惜別へ萩のこぼれる声をきく
いろはにほいろいろためしているところ
とび込んでみよう追い風あるうちに
反対向いて揺れるススキはわたしです
妥協点つなぎ夫婦というかたち

大和郡山市　坊農柳弘

姿見の中でわたしが透き通る
大掃除へソクリひょいと十二月
追い越した位置で振り向く君の笑み
戯れの真ん中辺にある穿ち
血走った顔がせかせか師走の灯

奈良県　渡辺富子

揺れながら自分見つめるひとり旅
おおらかに母の笑いを盛った皿
ロボットに温みを求めひとり住む
これからの話へちょっと紅を足す
今朝もまた真面目が背広着て出かけ

和歌山市　牛尾緑良

甘言を信じてみよう試供品
孵卵器にそっと戻ってひと休み
誕生日崩れゆくもの認めざる
バイロンもハイネも秋を詠み砕く
鳩尾へもしもし母の声がする

和歌山市　松原寿子

挑戦はしないのんびり歩を進め
軽いジョークはらはら抱いて秋が散る
呼び水へ記憶を辿る深い秋
編目順調針いっぽんに愛を込め
刻まれた歴史ふるさと語り継ぐ

和歌山市　上田紀子

どうせなら愛嬌のあるまだら惚け
ケセラセラ今日の力は今日使う
音階をはずして秋が足早に
強烈なパンチ貰って良い仲間
関空へ世界の空気嗅ぎに行く

和歌山市　柏原夕胡

ひとりきり独りが好きなわけじゃない
最悪の今日へ赤飯でも炊こう
今日がもったいなくてなかなか眠れない
一生懸命に揉めている喜劇
思いきり泣いてどうでも良くなった

和歌山市　堀冨美子

晴天に土砂降りと言う電話口
カタカナの店の名前が出て来ない
ドライブへ子等の誘いの恢復期
ヘルスメーター今日のグルメを指針する
持て余す今日を自分に問うている

和歌山市　福本英子

新月に傷の瘡蓋まだとれず
三日月の優しさ若い日に戻る
気の進まぬ日もあるだろう砂時計
雑草は他所に負けない程生える
地獄耳持ってにこにこ彼岸まで

和歌山市　古久保和子

二十五時間あればと思う時もあり
野に咲いて見知らぬ人も喜ばす
カタカナの街で底冷えしてならぬ
バラバラにされてマネキン衣替え
角一つ曲がり満月見失う

和歌山市　田中みね

カラフルに決めて熟女の旅鞄
呼名には自信あるけど句が抜けぬ
影法師あなたへ本音さらけ出す
幸せの固まりに会う二重アゴ
午前二時お隣さまへ救急車

和歌山市　喜田准一

末席の鋭い野次が的を射る
旅仕度先ずは身仕度顔仕度
明るさと軽さソツない生きる術
付け足しが過ぎて本質から逸れる
過去形に出来ぬ想い出あり過ぎて

和歌山市　武本碧

ハッピーな影に押されて湧く勇気
栄えてた街にシャッター駄目を出す
艶っぽい話を包むオブラート
方便の尻尾切ったり繋いだり
灰汁抜いて染めても素朴にはなれぬ

和歌山市　松尾和香

川柳の熱い勢い酒の席
脳回路黄から赤へと流れゆく
お浄土へこの世の笑顔持って逝く
亡き夫に気心積んだ般若経
身の丈の装い笑顔だけ取得

和歌山市　玉置当代

だんじりが走る熱気がほとばしる
新米の味にひかれて里帰り
赤とんぼようやく秋を連れてくる
秋風に慌てて紡ぐ毛糸玉
言いすぎたこころ和ます月冴える

海南市　堂上泰女

台風一過哀しみ知らぬよう晴れる
一人居へ旅情を誘うニニ・ロッソ
アレルギーへ挑戦してる無農薬
バージョンアップしたくて聞いているラテン
マスコミの網すり抜けていく泥鰌

さば読んだ歳で今でも通してる
マンションの辞書から消えた相互扶助
ミステリー家族写真に僕居ない
英会話はじめた妻に距離をおく
両陛下にお目見得できた植樹祭

田辺市　岡本　昇

出無精は金のせいだと決めている
決心は赤信号のうちにする
ここだけの話一本クギを刺す
しあわせな余生とんでもないうつつ
沈黙をときどき武器にしたくなる

鳥取市　奥谷彩子

笑いと毒たっぷり盛ったジョークの矢
挫折人生少しわたしも丸くなる
千の風の亡夫に今日も愚痴こぼす
生きいそぐ野山は紅く衣替え
今年も無事蟹をほおばる冬の宿

鳥取市　春木圭一郎

かしわ手の音で一日左右され
ネエネエと返事するまで追ってくる
大鍋を囲むいろりはエコの炭
バス旅行ガイドの歌が子守唄
還暦へこれからですよボランティア

鳥取市　倉益一瑤

わたくしを過剰包装して孤独
木も草もわたしも土にへばりつき
その傷に触れてはならぬ地雷源
小さい声で怖い話をささやかれ
蟻んこの力あなどってはならぬ

鳥取市　岸本孝子

水割りを湯割りにさせた虫の声
何もなかった今日に感謝の仏の灯
金はそこそこ心豊かに生きている
幸せな花はブーケで抱かれてる
人並だと思えば気楽脳の老い

鳥取市　岸本宏章

声かけて育てた花に笑みがある
煽てられ会社背負ったことがある
草の根も地下で縄張り主張する
耳元で聞いた言葉は忘れない
かなり前のことは脳裏を離れない

鳥取市　中村金祥

鳥取市　加藤茶人

女子会に負けぬ屋台の男子会
フェロモンの代わりに出せる加齢臭
幸せと言う愚痴もある嫁姑
検診で酒を控える三日前
腹八分いつも空腹感感じ

鳥取市　横田春名

友訃報私の遺影決めておく
和服褒め迷惑そうな目に出合う
葬のこととても気になるお年頃
よそ見して見つからないと嘆くまい
歌舞伎観て夢のようだと姑の顔

鳥取市　福西茶子

大まかで怒りっぽいがA型だ
財を呼ぶ黄色い財布買って貧
露を抱く芋茎に母を重ね見る
流麗な文字で読めない文もらう
丸腰の背を子等には見せておく

鳥取市　池澤大鯰

創作は仕事にならず孫を追う
術後なり追跡調査念のため
ストーカーになりたくなるほど好きになり
ミカン箱わが人生は古くさく
空き箱を後生大事に貯めている

鳥取市　吉田孔美子

昨日今日老々介護じみて来る
瓜実顔に今年はメガネ掛けている
しっかりと夕餉のおかず赤い瓜
連用日記今年も風邪をひいた
アンバランスよれよれの妻のTシャツ

鳥取市　池原天馬

ひたむきに打つ太鼓の音おのれ恥ず
身内絶え俺のとむらい誰頼む
パソコンで古文書打つと苦情出る
不惑の年倍になったがまだ惑う
柿実る豊作の年小粒とか

鳥取市　森山盛桜

夜行性なので昼間は大人しい
無残なり野心が崩れ去った跡
友人にいる正札のような人
肩書きが増え失言も多くなる
バラの棘男を刺した事がある

鳥取市　永原昌鼓

太陽がお風呂湧かしてくれるエコ
目指すなら負けてニュースになる選手
トラブルを避けて裏道ばかり行く
夏と冬どちらも辛い侘び住まい
邦人の大関こんなにも待たれ

鳥取市　吉田弘子

行く末より来し方想う秋夜長
二人三脚にわかコンビで意気投合
健康法まだ生きたくて鵜呑みする
意地悪へ負けて勝つ極意学ぶ
休憩と水分補給懐かしい

鳥取市　田村邦昭

呼ぶ声が遠くになって雨の音
ナース達天使の心忘れない
いつまでも忘れたくない亡母の声
逆らった口も今では丸くなり
ベトベトの付き合いだけは遠慮する

鳥取市　土橋はるお

スカイツリーでビールだなんて夢のゆめ
安定剤飲んで一本橋渡る
震えが来そうな別嬪さんとすれ違う
台風のコンビのろのろやって来る
風変りな家を建てたら笑うかい

鳥取市　福永ひかり

コンバイン雀に残す米がない
口数に比例をしない重い腰
片付けのコツがときめきへと変わり
足腰へ楽なベッドにするかなあ
自己主張渡る世間が狭くなる

鳥取市　近藤佳子

ラジオ体操もう朝顔が咲いている
お昼間もすすきお化けのポーズする
思い出がうつらうつらと淡くなり
女郎花盆には逢いに来てくれる
夏を乗りきった米寿へ女郎花

鳥取市　土橋睦子

食べ尽きた森の烏が振り返る
自転車で通う元気もあとわずか
ダイエットそんな言葉に飽きている
宅配便老婆の腰がよく動く
頑固さもほどほどで良い芋を掘る

鳥取市　有沢せつ子

満足はしない思考が鈍るから
三日間続けてあきぬ栗ごはん
バイキング一切れずつを食べてみる
朝ドラマ和服の似合う亡母おもう
おしゃべりも役立つだろう呆け防止

鳥取市　前田孝子

二つ三つあの世に持って逝く秘密
子供らに何を残すか決めてない
一人寝を願った夜は寂しすぎ
人生に迷い孤独な貝になる
現実と夢の狭間の蜃気楼

鳥取市　竹口清信

何時どこへ行こうが何も問わぬ妻
信じても信じなくても五十年
ややこしい事は一切喋らない
半世紀続けば言葉などいらぬ
妻に借り数え切れないまだ借りる

鳥取市　中宇地秀四

コーヒーが喋る熟女の喫茶店
一度目は聞こえぬふりの褒め言葉
幸運の後は不運が顔を出す
それならば何で私をさそったの
命まだ残っていると戻される

鳥取市　鈴木一弘

盂蘭盆会世界を癒す盆おどり
抜け穴もあって不落の城そびえ
読み書きは妻の老眼メガネ借り
新しい命輝く糸蜥蜴
人恋し赤い絨緞彼岸花

鳥取市　西川和子

プライドが何さ世間を狭くする
逆鱗を宥め一献傾ける
腹割ればすっかり意気が合って来る
プライドを捨てれば角も取れて来る
角取れて優しい言葉掛けている

鳥取市　武田帆雀

峰打ちで転ぶ値段を知っている
人間が固い酢の物菜っ葉漬け
間引かれて本望生きて何もない
この家に必要とする嫁が来る
かあちゃんと合作菊が咲きにけり

鳥取市　高浜勇

被災地に届けと入れる募金箱
メタボばかりもう居ないのか太っ腹
デリカシー無縁の人とやりにくい
悪口を言うたび後光消えていく
おひさまが最後には勝つ北風に

鳥取市　深澤千恵子

知らぬ間に矢面に立つお人好し
にせ物が本物よりも売れる国
いつまでもあると錯覚する余生
理屈より笑顔が溶かすわだかまり
色めがねかけて強気の自分出す

鳥取市　平尾菜美

撫でられてやる気ますます伸びざかり
はらはらと腕くむ今日は父になる
足腰を撫でて鎌鍬といでいる
豆腐にも自浄装置はついている
孤独死を見てる路地裏草一本

鳥取市　宮脇道子

我が顔は塗っても撫でても八十歳
ヒタヒタと秋音立てて老いの身に
色冴えて果無い命彼岸花
白萩に幼き遊び夢にみる
天の神原発事故は俺知らぬ

倉吉市　山本玲子

水炊きに虎河豚二匹奮発す
愛犬も杖つく主に歩を合わす
麗人と知って藪蚊がつきまとう
目的のためには回り道もする
食欲の秋間に合いました病み上がり

倉吉市　山中康子

万遍な嫁の情けに感謝する
ひとり旅勇気と不安抱いたまま
浮かばないアイデア追って一眠り
子や孫へこころを馳せる誕生日
傍目には楽に見えてる代替わり

倉吉市　猪川由美子

過去の諸事直す消しゴム欲しいです
新政権一番仕事増税だ
年経ると守りの姿勢強くなり
時の人テレビ出まくり見飽きちゃう
カタカナ語どんどん増えて忙しい

米子市　竹村紀の治

主夫業のコツは手抜きと見つけたり
言い訳はあとから酒が致します
書道展記帳の文字が震え出す
風呂メシ寝るみんなひとりで決められる
中締めのあと帰宅派と二次会派

米子市　吉田陽子

古稀近し熟すほどではない実り
台風一過天にも地にもあばら骨
青森から来たと言われてリンゴ買う
みかん置くだけで楽しくなるこたつ
日記帳書いてない日が謎になる

米子市　成田公一

跡継がずわが家の歴史塗り替える
歴史なぞ年表見ればわかるだろ
親の血でごめんなさいと言い続け
恨めしい名前に付いた美の一字
大正の母もカタカナ文字を食う

鳥取県　岩崎和子

あの暑さ越えた草だよ抜かなくちゃ
降る雨に天気女のお通りよ
雨の中久保田サウンド聞く車内
足長蜂悪さしないのそっとして
日本力士大関になりおめでとう

鳥取県　山本正光

素うどんのようなハートになった老い
丁重な言葉に水も澄んでくる
平凡に生かされ未だ悔いはない
好きですと言われたことの無い自慢
休日がなんだ働かねば食えぬ

鳥取県　石谷美恵子

ジグザグで焦点ぼかすテクニック
夢が叶って夢のようなひととき
お互いに受け皿役で愚痴こぼす
正直に生きるけじめをつけながら
花に埋まって諦めきれぬひとの葬

鳥取県　山下節子

ジグザグに進まぬ蟻の一本気
昭和史に軍艦島と言う廃墟
妻の敬語何か波瀾の前ぶれだ
堪忍袋そろそろ破裂するころだ
百歳の笑顔そろそろなど見えず

鳥取県　深田倶久

かり込んだ木犀花をいただかず
開け放す窓へもみじの舞い降りる
芸の無い政治家年金いじりだし
愛に満ち師走の風が温かい
菜園にいろどりそえたミニトマト

鳥取県　竹信照彦

わが町へ天皇陛下御成です
行幸の道の掃除は国がする
お召し列車毎日一回訓練す
落ち穂拾いなどはしませんコンバイン
晩秋に菊の香そえる山陰路

鳥取県　斉尾くにこ

転がっていますお陽さま温むまで
ごめんねと言ったら溶けてゆく気力
ふかふかな私になれる君の湯気
夕焼けがこぼれる君の名を呼んだ
明日が見えいっせいに飛ぶ千羽鶴

鳥取県　西谷悦子

真っ直に人間触れる前を向く
揺れるだけ揺れてブランコ決断す
熟れ方はそれぞれ違う個性なり
お互いのめがね違いを乗り越える
人形になっても爪は伸びてくる

鳥取県　鳥越鬼一

早早とこたつを囲む老い二人
みこし出ず今年もさびしい秋祭り
これというサプリメントが見つからぬ
神無月日を違えずに白鳥来る
タイガース負けると夜が長くなる

鳥取県　細田裕花

先手なく奥の手もないゆるいキャラ
情報が途切れてハートぺっしゃんこ
カギ穴を覗き連想ゲームする
晴れ晴れとウィニングラン定年日
手拍子と知恵を拝借して生きる

鳥取県　佐伯やえ

あさっての方から冬の声がする
私小説金もくせいの章に入る
腹くくる覚悟ひと言いっておく
忘れたことにして生きるのも美学だな
亡父でんとすわる日めくりはずせない

鳥取県　松川行男

衣替え虫の鳴き声弱くなる
上品に客の会話は床の間で
元気です一輪差しの四季語る
お出かけたびに服を買うのは女達
僕だって秋に染みたい赤い柄

松江市　石橋芳山

充血の目玉に白く映る街
もう行く気ないのに捏ねている返事
雨上がり冷めた男になっている
コンチクショウ増えて列島濡れている
眠たさを残して音もせずに雨

松江市　三島淞丘

着メロを変えて老春謳歌する
そのままの自分を月にお見せする
仏像にじっと見られている邪心
役ひいて心の箍が弛み出す
少しずつずれる歩幅の二人旅

松江市　錦織禮子

太陽が朝の畑へがぶり寄り
熱心なセールス袖にしてしまう
断捨離に待ったをかける古眼鏡
ヘア講習会みんなサクラでうまってる
おでんサミット地元参加も負けてない

松江市　松本知恵子

趣味多忙文字が頭をかけめぐる
輪の中にどうぞ誰もが秋寂し
神在月古代出雲の風を追う
あの人の姿追ってる彼岸花
うつかりと転んで知った愛もある

松江市　津川紫晃

横糸は家族の支え縦は夢
行間に愛のしずくが見えかくれ
負けるなと折れた心に遠花火
この命泣いて笑っていつも旬
赤黄緑みんな好きです食べてます

松江市　小川注湖

カーテンは中の秘密は漏らさない
左利き嫁にあちこち替えられる
柱の傷父の丈越え母が笑み
憲法二つ時代を分けて生かされる
新卒の背広の傷み年の暮れ

出雲市　岸桂子

無人駅優しい秋の陽と出会う
適当が好き適当がむずかしい
緩めてはならぬ再起のネジを巻く
母逝って母の好みにつき当る
雲一つない日を選ぶ白い靴

出雲市　伊藤玲子

約束を果し腹底から笑う
細い肩抱いて涙を止めてやる
黄昏れて白紙に返す夢一つ
気配りも白足袋も脱ぎ空になる
ライトアップ太閤さんの夢を追う

出雲市　小白金房子

転ぶなと心労わる合言葉
童顔の心を開く祝い酒（八十三歳の声）
ふところの白紙めでたい杯受ける
田舎道愛すわたしの押し車
長靴で通す我が家は牛の声

出雲市　富田蘭水

挨拶が朝の出立を温くする
願望が次つぎ楽し長い夜
負けまいぞまだまだ余命生かすまで
心には見えない妻がついている
観光をうたう市制が前に出る

出雲市　多久和敬子

嬉しくて大きな文字でありがとう
力こぶ消えて優しさ戻って来
中流を生きてる老母も孫も居て
気配りの一言老いの目に涙
勢いが弱り涙腺もろくなる

島根県　伊藤寿美

横向きに坐り聞き耳立てている
「だんだん」と言う老母さんを裏返す
風立ちぬ秋の書棚の堀辰雄
ざわざわのまん真ん中に居る孤独
おだやかな顔で梃子でも動かない

美作市　山本玉恵

スランプも切り抜けて来た向う脛
鬼門ひとつ抜けたあしたの詩に賭ける
うしろ手で締めれば燃ゆるふたごころ
平凡なくらしの好きな土ふまず
変身は出来たが背骨物申す

美作市　大石　あすなろ

かけ抜けた昭和セピアに黄昏れる
スパイスを効かせた苦言いい仲間
転んでもどっこい列について行く
乱気流抜けてわたしの指定席
迷いなど少しも見せぬ母の櫂

竹原市　岩本　笑子

どっきりかもしれん席を譲られて
日付変更線の向こう娘からメール
二度三度あまえ上手な猫である
手のひらの薬ころころ転がして
旅に出たいね広告欄を読む

府中市　馬場　利子

ジョークを飛ばし励ます子のメール
惚けたかな投句のなさにある空虚
モノクロの絵に好みの彩をぬる余生
今朝の夢続き見たさに蒲団干す
傷癒えて鍬持つ楽し空の青

府中市　藤岡　ヒデコ

オーロラが見たいと孫は事もなく
天体へ夢を馳せれば限りなく
身についたリズム長生きするつもり
抵抗のひとつ聞こえぬふりをする
実る秋来る者拒む事もなく

府中市　岩本　雅代

コスモスのきれいな花に夏忘れ
天高くゴルフの球も青空へ
つまずいてひらめいて来た五七五
贅沢が身につき飯が遠くなり
秋なすも売れなく畑でぶーらぶら

宇部市　平田　実男

サンキューで片付けられて腹が立つ
公僕という役人の頭が高い
詫びるたび白髪が増える社の幹部
プラスではないこともある血の絆
監督の首へ冷たい秋の風

東かがわ市　清川　玲子

それぞれの思い出抱いて枯葉散る
消化せぬ言葉一つに夜が長い
アラフォーの女生き抜く術を持つ
お互いの耳の遠さを助け合い
受験した頃の辞典は離せない

松山市　宮尾　みのり

B型は嫌いと言ったのは誰だ
家計簿も日記もつけず生きてきた
四十代の苦労その後を太くする
川柳ノートあの日のことが甦る
ゆっくりと諭す父には逆えず

松山市　髙橋宏臣

無理やりに曲がった角にある吐息
寝返りを打って寝息を整える
遠花火知恵の輪ひとつ解けぬまま
塩辛い話が海の向うから
嘘も方便信念持って押し通す

西予市　黒田茂代

風の無い襟裳岬の拍子抜け
納沙布の夕日ほろびの彩見せて
トドワラも芒も夕日影の中
自然の摂理トドワラやがて消えてゆく
最東端の駅標カメラに納めとく

高知市　小川てるみ

秋ですねほっこり炊けた栗ご飯
まず一歩後はなんとかなるだろう
寄り添って歩こう心癒えるまで
三女史を称えノーベル平和賞
満月が笑ったようで笑み返す

高知県　小澤幸泉

毒舌にユーモアという味をつけ
だんだんと料理を選ぶ齢になり
坐したまま短い秋がすぎてゆく
放浪の果てに家族の味を知る
学期末忙中閑という限り

唐津市　樋口輝夫

竹槍を信じて哀し国破れ
信じ合う金婚夫婦の晴れの宴
転校が決まって泣いたいじめっ子
止まり木に遊び疲れた箸枕
見え透いた嘘でも嬉しい歳になり

唐津市　井上勝視

吊し柿だけに当って陽がおちる
粗食でも頂ける幸戦中派
どこか変宗派問わないクリスマス
染め直しきかぬ歯痒ゆさ黄昏の彩
遺影老いず老いてゆく子の般若経

唐津市　山口高明

門前に永代供養募集札
自問自答すれば良心ちと疼く
痛いとこ突かれ言葉が裏返る
お刺身で売れば奇形魚判らない
仲の良い御夫婦だよと世間さま

唐津市　坂本蜂朗

カラオケは好きに任せて酒を酌む
見合いなどする気が起きぬ星ひとつ
ライバルがまた手を挙げているあせり
間違ってみせて生徒に慕われる
夕食が美味しい明日も晴れだろう

熊本市　永田俊子

栄転左遷新しいドラマが始まるよ
折り取れば光はらりと芒の絶唱
だんだん軽くなる私の信玄袋
満ちて欠ける月のロマンの人生譜
自分史をふくらます嘘のかくし味

熊本県　髙野宵草

聞き飽いた愚痴も祖母との根くらべ
郷愁の街がまたまた若くなる
歯をみがくことも忘れて寝る疲れ
辣腕と呼ばれ笑顔の目が光る
お互いに老いた話でウマが合い

熊本県　岩切康子

誰にでも効く健康法無く自己流
茗荷遺る茗荷のレシピ返って来
母のことふと思い出す茄子料理
勘違い待って待ってふと気付く
伊勢海老の抵抗鍋に入らない

札幌市　小沢淳

絆逝く大きな傘が畳まれる
目立たぬがじっと支える土踏まず
負けて勝つ返す言葉は腹に溜め
喜寿の坂いざ足腰を鍛えんか
この僕も人間だからこの程度

札幌市　三浦強一

この夏の敢闘賞は扇風機
クールビズからネクタイへ季の移り
休んだら重病人にされていた
あたふたといつもの顔が来て揃い
居酒屋で明日へスタミナ蓄える

砂川市　大橋政良

その未練牛のよだれのようである
青空へ雲の墨絵が生きている
道草をする恰好な道の駅
夢一つ僕を昔へ引き戻す
誘われて誘って酒が強くなる

黒石市　佐藤古拙

さいごの輪大きく吐いて禁煙す
きっぱりと断るときは妻が出る
風評は七十五日でおわらない
痴話げんか疲れたころに割って入る
セシウムのシナリオ神も書きあぐむ

平川市　小寺花峯

腑におちぬ疑問符カラス掻き回す
雑用があるから今日を生きている
結論を急ぎすぎたかバラは散る
古里の小包み受ける母の愛
木枯らしが泣いて熱燗身に染みる

弘前市　髙瀬霜石

心配事が消えても抜け毛止まらない
一合半炊いていちにち生き延びる
いつだって満タン心配症だから
終点間近痩せる準備をしておかん
振り出しに戻しておくれ除夜の鐘

弘前市　今愁女

紀伊の国想い出のまま残したし
神秘さを欠いたらならぬ那智の滝
午前三時ぱっちり目覚め柳誌読む
家のまわり蜘蛛巣づくりの時季となる
飼主にはぐれた犬の目は虚ろ

弘前市　岡本花匠

新米のしあわせ味を噛む夫婦
派手を着て鏡は笑顔ゴーサイン
あるがまま生きてむだない良い夫婦
境遇に負けぬ笑顔のみち歩く
夢追いの人生でした木偶なわれ

弘前市　須郷井蛙

残高がゼロのカードを持ち歩く
文化財管理が重い地方自治
愛犬もつれて行きたい通夜の席
エラーした分はヒットで埋め合わせ
ハローワークいつも同じな箱ばかり

さいたま市　星野育子

前か隣りかと迷うボックス席
列島は活断層を除けきれぬ
山好きで街の中でもリュック背負う
いい人といい歳になりいい関係
順序良く記憶の箱を並べ替え

東京都　岸野あやめ

原発を止めりゃ日本成り立たず
能面のような顔してするお辞儀
声の出ぬ母の眼が言う有難う
いつだってギリギリに来て遅刻せず
無器用で嘘をつけずに生きて来て

横浜市　菊地政勝

延命へ蜥蜴が尻尾プレゼント
遺言は恥しいから残さない
線香と暫し思い出話する
私の賞味期間は呆けるまで
自然治癒期待をされる発電所

横浜市　小野句多留

十月の声に急かれる諸事雑多
ケータイをこする隣りをうざく見る
貶しようない大臣のアクセント
成長期孫と会話がずれてくる
負けたのか唯それだけの母校愛

諦めず始める時が適齢期
死の刹那私は何を思うだろう
生命線決して長いわけでない
中流にしがみついたは夢だった
大粒の涙の中は亡夫の部屋

川崎市　三浦きぬ

真夜中の作句日の目を見ないまま
古稀すぎて誘われライブコンサート
百歳へ元気に生きるスクワット
立山ケーブル周りはみんなハングル語
山々の思い出巡る方位盤

富山市　島ひかる

弁当もお茶もコンビニピクニック
ダイエット今日はお休み栗ご飯
孫にまで背丈抜かれてまた縮む
ふる里の東京もはや住めぬ街
遠慮ない仲にも秘密隠し持ち

可児市　板山まみ子

彼岸会の僧の衣に向い風
鳴き止んだ虫も都合があるそうな
名月にむかしを語る老い二人
子供等は牛に渾名をつけて呼び
再開の漁場大漁旗が靡く

静岡県　薗田獏沓

募金箱一番先のような音
アンパンが好きな料理の研究家
飼い主が痛そう犬の注射針
新築のお向いさんはマタニティー
友の死に雲の形を追っている

犬山市　関本かつ子

リハビリは膝に優しい田んぼ道
無理ちょっとせねば筋肉衰える
本舞台足の痛さがかくれんぼ
断捨離は動ける内と気合入れ
むき出しのバトルに一歩引く余裕

犬山市　吉田幸子

いただいた金額にするのし袋
お別れをしに踏ん張ってくる見舞
用心棒の靴が埃を被ってる
この日のためにあったと思うあの日
不届きな空想でやっつける鬱

犬山市　金子美千代

鶏の飛べない羽根の毛繕い
一万歩口でいうほど楽じゃない
人並の暮しサンマが食べられる
食べ残し持ち帰ってもいいですか
被災者の餓えても列を乱さない

愛知県　早川遡行

京都市　坪井孝一

失敗は役立つものと定めている
五線譜には愛の調べを冒頭に
常識を無視して通る世代の差
B面には歓喜の歌を入れておく
全員をロボットにして社が伸びる

京都市　桝本宏子

ああしんどけど楽しみも古稀の坂
便利さを追った手足が戻らない
無理難題言われて拗ねている五体
元気印もカルテの裏に不整脈
いそいそとして来た事は内緒です

京都市　藤井文代

溜息より深呼吸にて今日終える
造るより廃炉にあがく原子力
体力なく前向きなのは喋ること
口説かれてハイの返事で半世紀
ファッションは鏡に問うて自画自賛

京都市　三宅満子

積み上げた稲に罪ない放射能
この道で良いかまだまだ迷う古希
中流のレベル下げると生きやすい
若いもんに負けてられへんおばちゃんは
老いたなあ鏡に嘘は映らない

京都市　西村益子

ホールインワン並の夫がやりました
ファッションも家も昭和の老夫婦
ジェットコースター見ているだけでしんどいね
分相応と言える生き方うらやまし
並々と暮らす毎日良しとする

亀岡市　井上森生

幽霊の謎も解けるかニュートリノ（超光速新次元世界）
一寸だけ無理が良いとは乙な医師
やる気なら魂込めて歩くこと
災害が国家を呑んだ恐い年
パンドラの箱を信じて生きてみる

長岡京市　山田葉子

五目ならべ孫に手加減されている
子育てがすんだら猫が膝の上
星月夜寄り添っている道祖神
漬物に母の重しもきいている
エピソード秘めて水路は古都めぐる

大阪市　大川桃花

手土産に賛成してと書いてある
カラフルなチマチョゴリにも辛い過去
同じ言葉トーン違えば反対語
根を取ればごっそり量の減るもやし
食扶持を親に頼っている起業

大阪市　佐藤忠昭

放射能色が付いたら目立つのに
焼き芋も美人が食うとスイーツに
絶版の書籍をさがす古本市
カラオケが嫌い一人でクラシック
にわか雨ちょっと酒屋で雨宿り

大阪市　榎本舞夢

塔まつり華やか出会い飛び交って
虫の声恋の予感を唄ってる
秋風に和服が似合う出かけてる
コスモスの秋ナデシコも咲きほこり
秋夜長朝の目覚めも爽快に

大阪市　津村志華子

右脳も左脳も底をついている
肩肘を張っているのは女偏
インテリと散歩しているブルドッグ
葬式の下見のバスに乗っている
来年の予定は未定大根焚き

大阪市　谷口義

十二月男を鞘に入れました
にんげんを続けているとお正月
なかった事にしようと私だけ思い
助太刀に行く前にスーパーに寄る
その意見寒い処に立っていた

大阪市　澤田定子

ガヤガヤと避難訓練なごやかに
携帯も車もなくてわたし流
品のいい老女に遠い日々暮らし
駅前に泥遊び記す文学碑
ゆったりめ今のファッション試着する

大阪市　小糸昭子

猫集会何を話しているのだろ
肉球をムギュムギュしたら噛みつかれ
せっかくの眠り妨たぐ猫の恋
居座った家に先輩猫二匹
傷ついた野菜にもある命です

大阪市　笠嶋恵美

どんな日も楽しむ事にして生きる
まっすぐに生きて句材が揃わない
ゆっくりと暮して見るとこれも良い
スランプを甘くしっとり煮ています
後期高齢まだまだ育つ余地はある

大阪市　吉内タカ子

百医師のおしゃれエステの元気真似
紙つぶて命元気に医者通い
気持ちだけ苦労が滲みる切手買う
もったいない世界に広め政治にも
実る秋鳩も番で食べて鳴く

大阪市　小泉ひさ乃

子の取得笑いの種を撒いていく
明日は晴れ生きる力を取り戻す
マンネリに一色赤を足す構図
忘れたいまさかを妻はよく覚え
傷つけるのも癒やすのも人の口

大阪市　田浦實

ブルマーが生れ変ってファッションへ
アダージョを奏でる波に癒される
龍安寺十五の石があたたかい
老舗の家訓固く商売守ってる
立候補者を決める選挙が要る日本

大阪市　板東倫子

敬老の日だけ優しい嫁が来る
涙さえ出ない悲しみ見てしまう
梨三つ貰って帰る秋日和
お月見も花火も無縁だった空
震度3と聞いても耳が馴れて来る

大阪市　坂裕之

組み体操成長した子秋の空
まあまあが嫌いな人で疲れます
八合目ちょっと休んで歩き出す
現役で通じる内は店に出る
聞き上手あの人きっと苦労人

大阪市　小谷集一

慰めの言葉に闘志燃えてくる
切り札をたがいに持っている夫婦
懐古談古典落語のように聞く
カラオケの軍歌で鬱を吐いてくる
虚も実もみんなまぎれもない私

大阪市　榎本日の出

神様は一言もまだ喋らない
錆びた脳五七五で溶かしてる
万病の薬は恋と笑う医者
これほどの贅があろうか好きに寝る
健康でお金ちっとも残らない

大阪市　岩﨑玲子

海の水コップの水も生きている
直せない切手斜めに貼れちゃった
日本には感性磨く四季がある
断捨離で軽くなりすぎ落着かず
五感にも何か響けと芒原

大阪市　津守なぎさ

果物を重さで選ぶくせがある
検査値は変りませんが弱い足
久し振り身内の手術足すくむ
外れても神棚にある宝くじ
成りゆきでフカヒレコースバースデー

大阪市　吉村一風

愛情に花は答えてうれしそう
遺言は書くが夫婦に子がいない
もみじする庭で秋風さわやかに
星の降る里へ夢連れ帰りたい
気を抜くとやっぱり石に蹴つまずく

大阪市　伏見雅明

口げんか余震しばらく止まらない
挨拶をメールで済ます新家庭
故郷で土の匂いをかいでくる
すれ違いざまブランドに火花散る
垣根ごし隣はいつも花盛り

大阪市　奥村五月

諍いはせぬが話も弾まない
避難所で家出した娘に会いました
お医者にはサバはよまずに歳は言う
ココ掘れと宝さがしの考古学
舞妓さんカメラが囲む石畳

大阪市　熊代菜月

夢の中夫に愚痴をまたこぼし
喜んで落ちてやりたい罠もある
意味も無く歩いてみたい今宵です
ホスピスの母にニッコリ手を振られ
何もない私の自慢友の数

大阪市　井丸昌紀

カーナビは曲がれと言っているのだが
夏ヤセもせず食欲の秋
鼻薬効いたと顔に書いてある
父さんと同じ形にちびる靴
冗談と言いつつ拳握りしめ

大阪市　原田すみ子

かごめかごめわたしの後誰も居ず
児を叱る子の親振りに安堵する
誰も来ず電話も鳴らず家事もせず
飲み込んだ言葉ちくちく胸を刺す
昼寝する夫と犬を見て昼寝

大阪市　神夏磯典子

思い出がいっぱいだけど捨てなくちゃ
月の無い夜は自分が見えてくる
子も孫も川柳せよと応援歌
決心をつけて女の傘たたむ
沈む陽にありがとうそしてありがとう

大阪市　川端一歩

古書市で介山に会ういい秋だ
日本語がだんだん好きになって喜寿
生きるとは持ちつ持たれつ世の習い
漱石の句を書き写す十二月
充電中妻から見ると冬眠中

大阪市　古今堂　蕉子

やっぱりとやはりに薄い溝がある
根掘り葉掘り放送局の人が居る
臨機応変神も仏もみな味方
又聞きは信用しない事にする
衣食足り心蝕まれる時代

大阪市　鶴田　遠野

禁酒禁煙心身共に太くなり
また妻に下方修正する誓詞
ぎりぎりを値切り出すからほっておく
美食家のわりには下手な箸使い
熟睡の老母の心音確かめる

大阪市　升成　好

晩学の原点にある広辞苑
うまかった自分に言うて鍋洗う
草の名を聞けば抜けない仏の座
踏んばってみたが老化を防げない
辻褄がどこかで合ってまだ夫婦

大阪市　近藤　正

フクシマの惨事を悼む除夜の鐘
大掃除捨てて片付く妻の技
三・一一政治の基本問う年に
春近し雪をかぶった彬の碑
憲法が深呼吸して出番待つ

大阪市　平嶋　美智子

この一年食べて寝ていただけやった
一年の計置き去りに師走来る
一年がかり竹馬の友に書く手紙
紅葉から心に恵みいただいて
散ってなお地面を飾る紅葉の気

大阪市　松尾　柳右子

留守待ちの手持ちぶさたにテープ聞く
生たまご今日も元気で頑張るぞ
退屈になると耳穴痒くなる
朝焼けに胸さわぎする友の顔
僅かだが町内会への赤い羽根

大阪市　江島谷　勝弘

おおきにおおきに娘もろてくれて
偉いなあ信念まげず逝った友
どっぷりと泳がされてる妻の手に
与えられた命いとおしみ生きる
自社でやるストレステスト甘くなる

大阪市　池上　清治

なでしこジャパンその勢いで突っ走れ
しがらみの中積み上げた母の味
レッスンを積んだ華麗なトウシューズ
平均寿命など気にかけず元気です
どん尻でついて行けたらよしとする

堺市　西村　りつえ

コーヒーでただ酔っていた淡い恋
芋蔓で生きた身体にがたがくる
鳩尾に父母に返せぬ悔いの山
辛口の言葉の奥にある温み
貰うならお金がいいな十二月

堺市　志田　千代

いい素材手抜き料理に限ります
テストないカルチャーだから続いてる
お隣に引越してきたらしい人
スキップは出来ず地団駄なら踏める
うまく死ぬ夢をみている日向ぼこ

堺市　宮本　かりん

食べ慣れた料理へ二人手がのびる
どっこいしょこんなところで息が合い
怒らんと褒めたが効きめありません
一徹で妻の涙も効きめなし
物事はけじめ大事と冴えた月

堺市　齋藤　さくら

ふる里の星空恋し神無月
失敗のおかずひとりで平らげる
おトイレのきれいな店を覚えてる
葉つき土つき山積みの大根買う
平均と本人だけが思ってる

堺市　源田　八千代

祝メール孫より貰う誕生日
プレゼントにオータムジャンボ当たらぬか
アルカイックスマイル説いた若き師よ
モッタイナイ人を失い哭く地球
草抜きも何をするにも皆一人

堺市　荻野　像山

子と喧嘩親の立場を忘れてた
みな揃うまでに出来てた飲み仲間
補助金につられ安全見失う
年忘れはしゃいで通う鍼やいと
窓際の机が知った乙な味

堺市　村上　玄也

復讐が復讐を呼ぶ負の連鎖
ストレスの波に溺れて堕ちる鬱
閃くのはいつでも事が済んでから
お喋りの相手がインコとは侘し
誰もかも呟きたがる日本国

堺市　遠山　唯教

心地よい風がわたしを押している
名刹の憂いを帯びた像に会う
ひと呼吸いれる隙間をあけておく
肥満体で媚をうらない猫を飼う
欲に目がくらみ迷路を出られない

ぎゅうぎゅうの車内から見る回送車
通勤車おんなじ箱に同じ顔
つぎ　こんど　どちらが先か解らない
同じ箱同じところへ座る癖
何言うているか解らぬ車内アナ

堺市　大隅克博

石段に遠慮している僕の靴
現地視察もう結論は出てるのに
成田屋が芸の肥やしにしたやんちゃ
踏ん張ってる振りは見せない弥次郎兵衛
場馴れした幹事しらふで酔うてはる

堺市　柿花和夫

ベイスターズファンを応援したくなり
中日は勝たずに客を呼べという
ガス抜きに監督替えるタイガース
広島は高値の鯉を良く育て
おとなしくテレビ見れない虎ファン

堺市　奥時雄

秋空よいのちの今をありがとう
一人住む淋しさを知る風の音
呆けるのは厭右脳に活を入れ
活断層の上でうごめく蟻の列
思い出し笑いで今日をしめくくる

堺市　大久保のん子

節電を貫く覚悟できている
マスコミに煽られ予約したお節
先がありちまちま年金の暮らし
良いことは言ってくれぬが良い人だ
ポインセチアも第九を聴いていて元気

池田市　栗田久子

メール来てわざわざ電話で確かめる
バイブルの通りに生きれるワケがない
お隣と比べる妻のネタが切れ
無為無策食べてごろ寝のうちわ風
田畑を処分坪庭種を蒔く

和泉市　横山捷也

健康誌去年のテーマ今年また
ゲラ刷りに校正さんの苦労読む
あの頃は田河水泡佐々木邦
知らぬ間に下水も詰まるものと知る
もう書架で眠りこけてる歩数計

泉佐野市　山本蛙城

出来るまで手は貸さぬ知恵母なれば
何があれ金木犀は秋を告げ
この味で継いだ暖簾にぶら下がる
品格を上げると下がる視聴率
値切り癖ついて要らん物が増え

茨木市　島田誠一

茨木市　藤井正雄

正座してもう一度言うから本気
留守電に愛の言葉は照れ臭い
泳ぎ方上手同期ではや課長
やはり畳帰国した夜の浴衣掛け
見比べて高いのを買う風邪薬

大阪狭山市　矢野梓

野の花が元気を出せと咲いている
故郷のニュース土産に友が来る
クラス会逢える喜び語り合う
クラス会昔の話して笑い
青春がゆっくり戻るクラス会

交野市　森本弘風

冷蔵庫開け閉めさえも監視付き
疎ましい妻の小言が鳴り止まず
自分史に勇気無かった俺が居る
たばこ税たんと払ろうて四面楚歌
つぶやきが怒涛になった民の声

河内長野市　坂上淳司

アッパーを食ってからの猛ダッシュ
原発を本気で考えさせた夏
叩かれて本気を出した古ラジオ
元本を割る塩漬けの株ばかり
二ツ目を泣かすかぶりつきの欠伸

河内長野市　井上喜酔

鈍行で走り続けて行く八十路
擦り減った命で無茶はしたくない
薬局にくすりの出前してもらい
仁義なき戦が続くドルと円
年金で師走の風向き読んでいる

河内長野市　植村喜代

台風が来るたび日本海にする
無言電話分からないと思ってはる
岩湧山毎日見てて花知らず
嫌な世にいい夢あげたい孫達に
陽君（はるくん）は都合悪いとすぐバイバイ（三歳）

河内長野市　水谷正子

讃美歌の流れる窓へ不況風
残高に主婦の才覚光ってる
シーベルト新語覚えて年を越す
達筆のハガキに電話役に立つ
童謡を一緒に歌う友がいる

河内長野市　村上直樹

節制を本気にさせた健診書
びくついて飲めば酒まで毒になる
優越感国ほどカネは借りてない
形状記憶辻を曲って縄のれん
まだ燃える土性骨には芯がある

河内長野市　山室光弘

責任も取らずうるさい外野席
帰郷して老父とかわす国訛り
席順にこだわるケチな人の群れ
生き延びて見るは地獄か極楽か
隠れてた本音を酔いがつれてくる

河内長野市　黒岩靖博

禁断のロマンに燃えた黒衣
紅に燃えた恋路に秋の風
税金を上げるつもりか新総理
霧もやにロッジがまるで宇宙船
早とちりしては無駄骨多すぎる

河内長野市　山岡冨美子

てにをはに温もりがある母の文
履歴書になんども濡れた跡がある
介護日誌のところどころにある雪崩
申告書を四角四面に書いて冬
締め切りに胴体着地して懲りず

岸和田市　雪本珠子

常夜灯に守られ今日も帰途につく
迸り受けて猫まで怒られる
愛猫が夢の中まで付いて来る
酒の肴腹の立つ日は作らない
変わりゆく時代の波に乗り切れず

岸和田市　井伊東吉

だんじりのお通りが先バスは待つ
カーネーション見てると友の元気声
食欲の秋に我慢のメタボ腹
山野草展示に心癒される
住宅のカラオケ喫茶話題呼ぶ

岸和田市　堤楢代

秋だ秋美味しい季節やって来た
よくもまあ疲れを知らぬ立話
あくびして今日一日を考える
うれしいな手編みの感触大好きだ
雲一つない空みつめ感謝する

岸和田市　森元ふみよ

秋の宵ヒッチコックを完読す
独り旅今日はどこまで切符買う
亭主殿たまには反旗ひるがえせ
老いなんか一寸とも怖くない八十路
単身の夫が妙に身綺麗に

岸和田市　岩佐ダン吉

多数派に口をつぐんでいませんか
棘のある言葉まあるく返したい
ごめんなさい嘘しか言えなかったんや
鶴彬にはまり青春だと思う
特大の見出し核ゼロやっとなる

宇宙から地球の良さを知るヒト科
外食で家庭の味覚失われ
飽食にあきて粗食をなつかしむ
世間体馬鹿げていても気に掛かる
サービスの良さについつい長居する

岸和田市　土橋房枝

面影が残るゆかたの藍の色
静けさが戻って里は秋の色
高くない鼻の先から日焼けする
老いさみし記憶もうすれ重い辞書
何気なく洩らした愚痴が歩き出す

岸和田市　原さよ子

鍵拾うなにかぞくぞくする予感
縒り戻すチャンスなくしたのは欠伸
少年の渇いた顔が銃を持つ
支援うけ持ち直すとこあかんとこ
一〇〇歳に挑む味方もきっといる

四條畷市　吉岡修

自己流で秋の一日書き上げる
仏様と一所に食べるあんこ餅
カルシウム不足と膝の音を聞く
三食をきちんと食べて歯が揃い
見て聞いて触って見たい癖が出る

吹田市　木下敏子

深みにはまり愚かさに気づかされ
人並の暮し不足は言うまいぞ
ライバルは私の中の私です
烏うり熟れてゆっくり山眠る
百均で買ったおろし器優れもの

吹田市　須磨活恵

雨の神手加減するを知りません
知覧から再生日本願うてる
朝飯が終わらないのに昼を聞く
予報より予報士の顔よく見てる
オウムから教えてもらう「コンニチハ」

吹田市　野下之男

とりあえずばかりを積んで十二月
不器用に生きて家族の米洗う
攻めるより辛い守りの冬景色
花占いやっと迷路を抜けました
木枯しが吹いて強気がくずれ出す

吹田市　山本希久子

ヒガンバナ整列のなか墓参り
タクシーに不景気世相教えられ
大掃除して待つ明日の訪問者
ジーパンの膝の破れをお洒落とは
分を知り自給自足に近付ける

吹田市　瀬戸まさよ

吹田市　太田　昭

カタカナにひらがなのルビ打って読み
苦い言葉にがい薬のように効き
つかまりなさい私の腕でよかったら
騒音に慣れて濁音気にならず
一度でいい生前葬のリハーサル

吹田市　大谷篤子

ＩＣＵピアノの音は母の声
バイブルに古い赤線気が静む
再スタート手術の前と違います
退院に軽く笑顔で風の中
草取りがこんなに楽しいことと知る

高石市　浅野房子

天災がつづき逃げ場のない日本
台風は去ったあわてて冬仕度
駄菓子だが両手で受けていただいた
ひとりぐらし案じて夢に母がくる
今月も句が出ていない友案じ

高槻市　指宿千枝子

草茂る汚染地を牛群れ走り
じいさんの気くばり声が大き過ぎ
度忘れも仕方ないかの歳になり
秋刀魚焼く匂い嗅いでる万歩計
五七五と米寿目指して頑張るぞ

高槻市　峯村勳弘

余生とは言うまい日日に新しく
治政への怒りか地震津波に台風も
3・11以来「つらい」は禁句とす
ポイ捨てに忠告できず悔い残る
最後尾走った孫に金メダル

高槻市　富田美義

郷関の下手な台本いまも生き
野辺送り在りし面影整えて
日向ぼこ過去の修羅場が夢のよう
無人駅ふるさと語る顔をして
良い人で居るのも辛い思惟の日々

高槻市　左右田泰雄

飾り気の無い物腰の淑やかさ
きっちりと目星をつける抜け目無さ
年の功バランス保つのが上手い
打ち水の路地に思い出そっと置く
点と線結べば明日が見えて来る

高槻市　安田忠子

若者のファッション真似て悦に入る
ファッションショーモデルの細さ気に掛かる
放射能いやな時代がまたも来た
これ以上便利も核も要りません
野田首相にすぐ辞めるなと鳩山氏

高槻市　佐甲昭二

紙コップ軽い約束なら出来る
仲間なら手ぶらで見舞飛んでくる
二番手で走る男にある打算
言葉尻少し濁して慰める
定年の机に余熱置いていく

高槻市　杉本義昭

原発も遣らせの上にあった城
秘め事がスイスイ消えるシュレッダー
フラダンス妻きらきらと今日も留守
下積みをした経験にある自信
大根をザクリザクリと嫁の腕

高槻市　島田千鶴子

イヤホンで静かに聞いている落語
感情の縺れそのまま声になる
本閉じる明日またねと言うように
ひと呼吸おけば解けだすねじれ糸
野仏にとんぼ挨拶してまわる

高槻市　片山かずお

温いのが好きやと腕を組みにくる
何事も老眼鏡をかけてから
適量は薬になると二合飲む
窓際に坐りやさしい顔になる
話すことなくて静かな夫婦旅

高槻市　乙倉武史

ふる里の追憶うまし祭り寿し
思い出を咀嚼で暮らす老いの日々
身の程を知って無謀な夢は捨て
歩け歩け良い習慣だ良薬だ
うごかねば錆が出ますよご老体

高槻市　井上照子

被災地を思い感謝の湯につかる
修羅の兄妻の看護に身を尽くし
放射線嘘もかくしも許されぬ
六時半体操らしく腕回す
教育の向きを見守り子と学ぶ

豊中市　水野黒兎

ストライクゾーンは自在母の味噌
秋の旅高い空から湧く音符
牛乳がほのかに甘い里の秋
哀楽は生きる証のかくし味
遠い日の将棋で父に勝った秋

豊中市　藤井則彦

駆けくらべした人生のあっけなさ
ゴルフより熱を入れてるボランティア
誰も居ないと喜怒哀楽は出しづらい
反省会しても後悔だけはせぬ
人間も朝三暮四を嗤えない

豊中市　松尾美智代

いつもの道まだ咲いている月見草
楽しみが苦しくなってきて本気
信号を守っていても事故に遭う
青春の私に出合う曲り角
濃い気持だんだん淡くなる夫婦

豊中市　松村里江

良心にフタして盗み聞きしてる
肉筆のデッサン私若いまま
ほないこかすぐひびき合う君と僕
アベマリアのソロがハートにひびくなり
看取り終え延命拒否書サインする

豊中市　江見見清

染め替えの効かぬ気骨をうとまれる
ダイエットに飯がふわりと盛ってある
夕暮の路地に転がる子等の声
思い出の花瓶に花は絶やさない
ときどきは波も立ちますいい家族

富田林市　片岡智恵子

手を抜けばそれなりに咲く小さい花
亡母の味探し続けてはや八十路
マータイさんのもったいないが懐かしい
健康へ舵切り替えたタバコ税
今日の無事明日の安全保証せず

寝屋川市　森茜

曇ったり晴れたりずうっともの思い
民衆のつぶやきいつか絶叫に
あしもとのどくだみの白静かなり
糠床がぶつぶつ手抜き攻めている
ときめきを貰いに街角のカフェ

寝屋川市　平松かすみ

試食して申し訳なく買っている
何歳になっても好きな五重丸
返信は二ヶ月先のことだけど
セールスに一服タイム盗まれる
町内は後からでもこんにちは

寝屋川市　太田とし子

気持ちよく素直に受ける誤字略字
マンネリの年賀ハガキを待つポスト
神仏格差をつけた鏡餅
使えない孫に貰うたお年玉
兄弟も親も揃って杖をつき

寝屋川市　森田麗

懐に燃えた残り火持つ私
錯覚じゃないわウインクしてくれた
孫の手はちちんぷいぷい医者いらず
住職に聞く仏壇の簡素化を
出し巻き玉子レパートリにした夫

羽曳野市　吉村久仁雄

お辞儀の深さだけで世の中渡り切る
背比べはしないどんぐりたちの意地
背水の陣でも止まぬおやじギャグ
申し訳ないが幸せ顔に出る
だまされてばかりの酒を今日も飲む

羽曳野市　三好専平

怖がってただ怖がっているばかり
先のばし先のばしてなにもせず
自然には勝てぬ人間まだもがく
国策に合わぬと獄へ放りこみ
放射能帯びたカラスが浜を舞い

羽曳野市　福田悦子

一言の気くばり心が軽くなり
極楽へ行きたい徳を今日も積む
自分史にアップダウンの日が残り
平均点取って人生誤まれず
この辺で終りにしたいタイアップ

羽曳野市　永田章司

絶景も狙う角度で違う貌
上場の初値見つめる創業者
お節介止めてくれよと腹の中
紛争は人科地球にある限り
うちの子に根性買って与えたい

羽曳野市　安芸田泰子

合掌の指のすき間で覗く欲
やっとこさ立てば電話が切れている
部外者のふりできき耳立てている
うろたえた心に染みる熱いお茶
柿熟れて父の命日教えられ

羽曳野市　徳山みつこ

フラガールの笑みが希望を呼び寄せる
ふと触れた手のぬくもりに繋がれる
休肝日守る夫にふと不安
物不足になっても老いに知恵がある
補助輪はまだ外せない民主主義

阪南市　森村美花

腕組んでやっと通じ合いました
日本の米熱い思いで立つ案山子
庭の隅夕べの決意植えました
追うものがあって元気に生きている
よく動く夫でいつも救われる

東大阪市　佐々木満作

人さまを羨む前に自覚する
一流は常に努力を惜しまない
お日様のパワー貰って農作業
不揃いのリンゴ育むエコの技
ベースアップ今や望めぬ死語なのか

東大阪市　北村賢子

慟哭の中で知り得た温い情
ジャンプして触れたチャンスは掴みとる
コツコツを積み上げ豊かなるこころ
神輿かつぐ男の命ほとばしる
泣いた笑った歴史つむいで来た命

東大阪市　米田水昇

世の不況不満どろどろあふれ出す
足萎えて健脚願うひたすらに
ハンガーにバナナ吊して糖度待つ
マッサージしてくれる孫いとおしい
友は逝き絆は夢で追いかける

東大阪市　笠井欣子

線香の煙と今日の話する
悪妻で後からすぐに逝きません
孫曾孫じいちゃんみんな抱きました
骨壺に相談してる納め場所
ガヤガヤと夫亡くした友五人

枚方市　海老池洋

スランプを初心にチェックしてもらう
狡いとは誰も言わないカメの勝ち
人間を信じていない改札機
しつこい程本人チェックして手術
後出しをしたい私も風見鶏

枚方市　二宮紫鳳

テープ切る孫の笑顔にVサイン
点滴のように朝風深呼吸
脇役に徹してからのおもしろ味
どの旅も女性パワーの花盛り
カサブランカ香りが揺れてティータイム

枚方市　二宮山久

まだ元気多忙な余生趣味に生き
生きてきたあかし余生に満たされる
人生をゆっくり歩み共白髪
ふる里の味覚届いた朝の膳
にぎり飯一つ増やして秋の山

枚方市　安達忠央

厳として育った割にやさしい目
あきらめず妻介護して喜寿を越え
駄菓子コーナー子供文化がなつかしい
三十五年のローン忘れて山車を曳き
長老がいちばん先に酔うてくれ

枚方市　小林わこ

身の内に熱い想いの花の種
日溜りに植えた石蕗父想う
おかあちゃん後ろにいるよがんばりや
楽しくてだんだん熱く鳴る太鼓
ジーパンの穴は青春熱くして

枚方市　寺川弘一

毎朝の日課青汁生卵
六甲おろしがなり自分に活入れる
両手で握手絆にロックかけるよう
淋しくて抱く人形にある微熱
防音完備した部屋で聞くシンフォニー

枚方市　丹後屋肇

平均寿命ミドルエイジが青褪める
擦れちがうシャネルを追いかけている目
要人の警固に目玉だけ動く
力瘤応えてくれる四股鉄砲
積立金壊して笑うフルムーン

藤井寺市　髙田美代子

使い捨て懐炉も少し買うておく
ごぶさたをしてます歳暮ふいに来る
新米を炊きましたのよお仏飯
中ジョッキ位はたまにお付き合い
今更に売ろうと思わない気楽

藤井寺市　太田扶美代

褒め言葉聞こえたらしい柿の色
断捨離は多分わたしに無理だろう
待ってますホントに待っていてくれた
ハッピーバースディーカーテンが揺れました
鉛筆を握ってスランプの森に

藤井寺市　若松雅枝

外壁の工事終って菊見頃
上天気歯科も眼科も済ませとこ
遠く住む孫も揃って花手桶
恐しい熊出る里へ仮設とは
ポイントを溜めて行ったら店が消え

藤井寺市　俣野登志子

あれもこれも加齢のせいにして平左
好物をしばらく出さぬ妻の乱
お互いに時々留守にして平和
おでこ強打また縮まったかな寿命
あまえながら後期高齢威張ってる

藤井寺市　伊藤アヤ子

頑張れば歳相応の骨密度
気くばりも当たり障わらずして平和
経験は自分のためと言い聞かす
愛と憎を繰り返し来た五十年
仕舞風呂コオロギの声聞きながら

藤井寺市　吉田喜代子

家庭菜園で治っている便秘症
秋を食む秋刀魚塩焼むかご飯
住む街も知らぬ所あり秋散歩
入院で解ったらしい有り難み
うた百人大きな声で鬱も吐く

藤井寺市　増井ヨシ枝

先に逝く夫羨み経を読む
散歩道落ちていたのは五七五
来世もと言われちょっぴり考える
落葉カラカラセカセカと来る師走
毛玉とり電池を変えて冬を待つ

藤井寺市　津田シルク

もったいないね娘の古着まだきれい
追風の今走るだけ走ろう
我武者羅な人生道草もたんと
積ん読が増えて考えない余命
のれん掲げたあの勢いがなつかしい

藤井寺市　鈴木いさお

遺すモノ無いが生き様よく見とけ
五十年添うて半分知るアナタ
前のめりに斃れるまでは突き進む
五穀豊穣お天道様に手を合わす
いつか句碑建てる夢持つ古希の坂

箕面市　広島巴子

迎賓館ちょっと気取って見学を
滝の虹ゆらり浄土へ来たような
見えぬ糸たぐり寄せられ寺社巡り
ストレスは味覚の秋で発散を
コスモスとおじぎを交わす風の道

箕面市　出口セツ子

風のよう来て風のよう去る息子
幸福な時間止めたい子と融和
だましつつまだまだ使う気の五体
報われぬ汗へ自分を誉めてやる
幸福の積み木幸福気づかない

守口市　井上桂作

大阪は維新の会でよみがえれ
俳諧は脳の活性豊かにし
空は夢花は心に潤いを
人間に優しさ教え震災は
優しさが栄養となり元気です

八尾市　村上ミツ子

どじょう内閣ぬらりくらりと泥の中
ごはんがうまいメタボの付けは怖いけど
敵の敵味方だというほんとかな
暑さにも負けずなんとか生きてきた
支え合う一つのパンを分け合って

八尾市　髙杉千歩

大正の気魄加齢に勝てず
失敗をコントのネタにメモをとる
大正の大和撫子ここにあり
お宝もないが金庫借りてある
訃報きくブログ散歩は哀しすぎ

八尾市　寺川はじむ

仏にも鬼にも変わる海の神
少しだけ曲げて妥協の輪が円い
百円で癒しを買いに行くショップ
ほどほどに惚けを演じて丸く生き
不況でも花は豊かな色で咲く

八尾市　宮崎シマ子

祭りの母は楽しく寿司を作ってる
夫の背を押せば何処かへ行っちゃった
子供並に拗ねて夫は酒飲まず
小賢しいと思うが妻をたてておく
被害妄想と誇大妄想の友がいる

大阪府　米澤俶子

秋冷になまった体シャンとさす
曼珠沙華あれは魂燃えるいろ
普段着で生きて命を光らせる
ゴールド免許返すのはも少し待とう
母に見せたい秋茄子の艶といろ

大阪府　桑田ゆきの

なでしこをつくづく眺める河川敷
万里一空流行語になるかもね
籾を焼く匂い持ち込むバスの客
零余子飯分ち合ってる法話寺
車椅子押して譲らる大花野

大阪府　籾山隆盛

塔仰ぎ自問自答のくり返し
老醜の嫌なしこりは残さない
億ションのチラシ拡げて爪を切る
ポケットでにぎる拳がたぎりだす
終演のベルよ元気に高らかに

第32回 ときせん賞作品募集

作　品　雑詠　2句（未発表作品）
選　者　大野　風柳・森中惠美子・河内　天笑
　　赤井　花城・平山　繁夫
締　切　**平成24年1月20日（金）当日締切有効**
応募料　1000円（定額小為替）切手はご遠慮ください
応募先　〒675-0019　加古川市野口町水足1160
　　岡田　篤宛

時の川柳社

第10回 「川柳展望」現代川柳大賞

対　象：新作10句（一人一口）
　　表題をつける、つけないは自由です
応募料：1000円
締切日：**2012年2月末日**
宛　先：〒567-0009　茨木市山手台4-6-3-101
　　川柳展望社
表　彰：現代川柳大賞　1名　記念楯と副賞3万円
　　同　準賞　若干名　記念楯と副賞1万円
　　同　佳作　若干名　記念楯
審査員：新家　完司・髙瀬　霜石・天根　夢草

自選集

小島蘭幸

あれから一年鈍感力を磨かねば
大盛会の裏の努力は言わずおく
二次会の笑顔の中にいたわたし
まつりよし彬の句碑に逢うて来た
塔のかたちだ大阪城だ蒼天だ

河井庸佑

心込め祖母は欠かさぬ月詣
明日の為今日を大事に生きている
今度こそ本気禁煙すると父
どちらとも取れる返事に悩まされ
喉元で言えぬ本音を飲み下す

川上大輪

ペン先の乾き　堂堂巡りする
土砂ダムがあるわたくしの心にも
宝刀は竹光らしいあのねのね
お声がけ辻の地蔵は顔なじみ
うっかりを眠らせている冷蔵庫

木村あきら

小豆島見渡す丘に川柳碑（薫風碑）
バアちゃんの巾着珠数が入れてあり
落葉掻きお隣り同士仲がよい
壁越しの話は聞かぬ楽隠居
独り棲む故郷に斃は帰り来ず

小西雄々

握りかえした温い手蝶の羽は白い
出勤のかばん北風硬くする
休みすぎ私の海が消えていた
弾まないボールでつつが無く暮す
平行線声をかけてもなおらない

新家完司

コンニチハ誰にも同じ声で言う
友だちも私も頼りない小舟
敵味方分け隔てなく酒を注ぐ
酒飲んで渡るとゆらり揺れる橋
夕映えに向かって心細く立つ

斉藤劦

流されて木の葉は祈り深くなる
黙るのはよそうよ月は曼陀羅だ
ぼろぼろの軍手を干しておく夕陽
少年を好きで離れぬ蜻蛉たち
寝たきりへコスモスの風送ろうよ

年末だぼつぼつ年賀状書こう
パソコンと遊びていよくあしらわれ
妻の庭来年めがけて肥料積む
来年は新幹線で墓参り
何の因果か足が痛みだし

塩満敏

老いの指誰も手伝ってはくれぬ
上半身が頼りやる気になっている
口喧嘩してもつまらぬ老い二人
模擬刀を床に飾って老いの趣味
風もない空を眺めて独り言

恒松叮紅

苦労性みかんの皮が干してある
松茸が届いて秋の香に噎せる
身にあまるフカヒレコースのバースデー
刻みネギキツネタヌキの湯気恋し
お守りのつもり喜寿のガン保険

津守柳伸

ひま人がたくさん旅行案内書
老 若 病 三人三様炊飯器
よく笑う女だまあるい顔をして
遠慮なく休みに帰る母の膝
秋の風そろり食欲うれしくて

遠山可住

尺貫法に直せぬシーベルトが怖い
秋空へすっくと立った曼珠沙華
折からの時雨が心鈍らせる
変り身ははやいが視線ずれている
大したことは言ってないひとり言

都倉求芽

安穏の世に魂を置き忘れ
荒城の月尺八を吹き鳴らす
信念を貫く桔梗むらさきに
美しい心もうつる影法師
松たけを採った食ったと嘘ばかり

土橋螢

おめでたい日へ足腰のリハビリも
古稀という旅のまどろみ車椅子
古稀祝う神無の月のバースデー
百歳の媼がきらう隠れん坊
豊かさが届けた柿の実をかじる

中原諷人

断捨離はさらさらする気ない蔵書
尊敬をしますスマホを使う人
雑用というが大事な用ばかり
凪の海何か企みありそうな
かき混ぜたら消えて無くなるほどの鬱

西出楓楽

人格の独立を聞く保護者会
独立のあかし御歳暮次男から
魂の独立めざす八十路坂
民族の独立なぜか血が流れ
或る風に司法の独立揺れるとか

仁部四郎

童心に帰り校歌をクラス会
眼の敵追うライオンの恋を観た
胸襟をひらいて優し樹になろう
大正ロマン鬼も見ている夢二の絵
繚乱の灯影に眩し美女の脚

林瑞枝

大阪城の銀杏実り衣更え
短足のファッションいつも裾を上げ
年金が下がるらしいと秋の風
つぎの世も夫婦で居よとまだ言えず
教室で神の話も聞いてくれ

前たもつ

平均値から私だけこぼれそう
勢いのある人の側離れない
ステップアップ尻尾ひっぱる誰かいる
むらさきの気くばり哀をつつみ込む
三つほど積む合掌の石になる

政岡未延子

震災禍心の揺れが止まらない
赤丸ばかり忙しいカレンダー
カネオクレと電報打ってみたくなる
ノンアルコールいささか酔った振りをする
メール交換隔靴掻痒過ぎないか

三宅保州

自然体にゆるり流れる秋の底
写経する筆の運びへ秋最中
ふるさとの川に流した日の涙
しあわせを掴み損ねた手で生きる
これからも明日が続く米を研ぐ

宮西弥生

密航は生死を越えてきた悲劇
限界を知る街道はあせらない
盛装を脱げば乳房もホッとする
舞台裏ごめんと言いたい悪女ぶり
苦も楽もあったが余生天寿待つ

八十田洞庵

削除キー押して不倫の影を消す
なぐさめの嘘は要らない癌を病む
メガネ替えても総理の本音見えて来ぬ
その先は言うな金なら俺も無い
天辺のポスト敵また敵ばかり

両川洋々

ねずみ取り綺麗に洗い旅に出る
恋をするにも万年筆が何処へやら
ゴキブリよ師走だおとなしくしろよ
さあ恋が始まりそうな十二月
油断すな蚊が人間を呑み込むぞ

板尾岳人

樹と遊び風と遊んだ夏の日々
萩揺れて今日も決心つかぬまま
インテリの弱みストレスばかり溜め
百の正直一つの嘘が命取り
無造作にすっくと立った美しさ

奥田みつ子

川柳・明日香
創刊17周年記念全国誌上大会

課題と選者（五人共選・読み込み可）
佐藤　岳俊　　柴崎　昭雄
「車」　中沢久仁男　　三宅　保州
古谷龍太郎

投　句　2句詠
用　紙　自由（清記します）
参加費　1,000円
締　切　平成24年1月31日（消印有効）
賞　合点10位まで呈賞
発　表　川柳・明日香　平成24年4月号
投句先　〒369-1102 埼玉県深谷市瀬山21の9　てじま 方
明日香川柳社
℡.048（583）3093

温故知新

『菊澤小松園遺句集』より

西鶴の頃から女拗ねる癖
連れまいて女特価へ引き返えし
泣いてても女勘定間違えず
浮世絵の美人は靴の履けぬ足
絵にしたい恋は明治もなかばまで
長男は血の気の多い頃生れ
二日酔長女に水を頼むなり
あゝしてもやれたと思う子を死なし
一子相伝コツは何にも書いてなし
一本の道にもあった突き当り
働けば食えた時代の座りだこ
寝るだけのことに夫婦の身づくろい
一すじの道はるけくも二人して
挫折した日から本当の夫婦なり
妻にもう一つの顔があって午後
下手な考え休むに似たり寝てしまい
笑わない夫婦にいつかなっている
ぼやくだけぼやいて先に寝てしまい
片意地を通して微熱まだ続き
玄関に椿一輪客もなし

川柳塔の川柳讃歌 ㉞

木津川　計

立ち枯れの向日葵ご苦労であった

谷口　義

大輪の向日葵は灼熱の太陽に立ち向かい、たじろぐことがない。回転する赫い日輪をなお追い、ひるむこともない。勇敢な向日葵は弁慶の立往生を思わせて立ち枯れるのである。枯れてなお、秋元不死男は名句「向日葵の大声で立つ枯れて尚」とその最期に感嘆したのである。義さんも同じだ。「ご苦労様でした」と優しく労るのではない、花の武士を称えるに「大儀であった」も不適切だ。「ご苦労であった」と褒めてつかわしてこそ相応しい。

脇役のままで終りの幕が開き

藤本　直

「秋刀魚の味」をテレビで見た。娘を嫁がせる初老の父に笠智衆、娘は若き岩下志麻。小津安二郎の「東京物語」と並ぶ名作だ。父の恩師に東野英次郎。それがいまははやらないラーメン屋のオヤジにおちぶれているのが悲しい。オヤジが酔うて語る人生の寂寞がいい。生涯を脇役の東野英次郎が不在だったらこの国の芝居はどれほどもつまらなかったか。

主役のついでに生き、仮縫いのままで人生を終える、そんな人間に僕は脱帽する。

苦労する度に小心者になる

片山　忠

よほど辛い目、痛い目に遭ったのだろう。もうそんな難儀を蒙りたくないと小心翼々に過ごしておいでの人がいる。習い性になって「羹（あつもの）に懲りて膾（なます）を吹く」ほど用心深い方が忠さんとは思わない。そんな方が身近におられるのだ。

「若いときの苦労は買うてでもせえ」の教えは、苦労を積むほどにその経験が将来に役立つ謂であった。少々の困難に動じない太っ腹なそんな人間になりたい、と僕も願いつつ、小心になってる自分に気付くことがある。

解凍をすると愚かな僕がいる

両川　無限

「それはまだ人々が『愚』（おろか）と云う貴い徳を持っていて、世の中が今のように激しく軋み合わない時分であった」とは谷崎潤一郎の文壇デビュー作『刺青』の書き出しである。

人間は賢くなり過ぎ、制御できない放射能の恐怖におののく。愚かこそ「貴い徳」なのに冷凍して閉じ込めたのだ。無限さん、よく解凍されました。「愚か」は閔じこめない方がいいですよ。

雑念があれば包丁など研げぬ

牧野芳光

「勧進帳」の聴かせどころ〝山伏問答〟である。富樫が「仏徒の姿にありながら頭（かしら）に戴く頭巾（ときん）な如何に」、弁慶が答える。「即ち、頭巾篠懸は武士の甲冑に等しく……」。板場の包丁もまた武士の刀に等しかったのである。真剣は本物の刀剣と同義であった。刀が神聖である。鋳り、鍛える工匠に雑念が交じって名刀は出来るか。包丁も無論、だけではない、何事も真剣にわたり合えと芳光さんは説くのである。

生きてます柳誌に名前載る限り

加川靖鬼

張りのある日常を送れてこその生き甲斐である。こころの張りは、趣味、学習、ボランティア、スポーツなどによって満たされる。靖鬼さんは川柳に出会ってよかったのだ。自分の名前が句とともに載る。その喜びの無上である。張りのある人は若い。靖鬼さんは老いない。僕も「川柳讃歌」が張りだ。だから若い、老いない、つもりで頑張ろうっ！

（『上方芸能』誌発行人）

麻生路郎句抄

（句集『旅人とその後の作品』から）

旅つれづれ

金婚に見馴れた顔もうれしけれ
振りむけばやっぱりついて来る妻よ
地球あわただしく揺れる淋しさ蒼く黄色く
敷かれてやるひまもなかりしに金婚か
地下センター幻の如く人がゆく
山と河人ひとりなき舞台なる
雑木林を通り抜け俗事へ戻って来
老いらくの恋が土筆をふみにじり

小杉放庵逝く

星が流れたあれは放庵だったのか
ガガーリンと握手した日もあったけど
鍵っ子だったからか虫けらに魅力
台風と学者相撲にならなんだ
台風も聖火も通りゃことわれず
恋という字を老人凝視する

学生長髪問題で騒ぐ

長髪もよからん神武の末裔さ
定年後遇えば酒までやめている
捨てること何んでもないと思いしに

三月三十一日　入院　二句

淋しがりやのボクを個室に放りこんだ
部分品がもうおまへんと言われそう
人生を暗いところで探りあて
しがみつくほどのこの世でなかりけり

五月十四日　一ト先ず退院

車いすあの看護婦も若かった
炎の中忘の字が灰となって残り
死はゆらぐ文楽人形の死はゆらぐ
死の影が紋十郎の背後（うしろ）から

トンボリが消えゆくか

道頓堀メロンが腐ったなげきなり

川上大輪選

飛び込んでいきたいのです いいですか
ふうっとわたしをとばせてあげましょう
やさしいひとだから行ってしまうんだ
戻れないでも忘れないあの光
温めてまだ離さないこの卵
すこしずついい色になっていく僕

三田市　上田ひとみ

これしきの事でと思う でもやはり
心にも頑固な染みが一つある
ロボットのほうがなんだか温かい
白黒はどうでもよくて仕舞風呂
勢いがあった頃には見えぬ色
善し悪しがはっきりしてた父の声

大阪府　神野千恵子

刺のある言葉淋しい人なんだ
いいんです折れた傘でも役に立つ
エプロンの似合う妻にはなれぬまま

岡山市　工藤千代子

言い訳を積み上げ妻は今日も留守
試されているのかつり銭が多い
いわし雲机上論にも飽きました

富田林市　山野寿之

幸せと思い込んでた蜃気楼
木守り柿愛のひとつは残しとく
秋だあきだと大地一気におしゃれする
過ぎ去った時が私を曝け出す
豊かさの錯覚だった砂の城
胃が重い軽い話をしに行こう

紀の川市　宇野幹子

敵か味方か影が一生つきまとう
煮崩れたカボチャと息があってくる
深い森抜けてこぎ出す一輪車
ひたすらに北へ北へと土踏まず
難破船やがて母港へ辿りつく
グーチョキパーパーが一番あたたかい

食べ頃の果実にも似て魅力的
均整を保ち個性を失った
親は子へ溢れる愛を掛け捨てる
まだ愛はあるか三面鏡開く
カルテには恋煩いとある微熱
ひとり占めしたいされたい長電話

大阪市　栃尾奏子

百態の屋根百態の夢を見る
人間が怖いと森の木が泣いた
裏通り暮らしを見せる換気扇
展示物守るコップに水を張る
茶柱が立っても変わらない暮し
定年に我が家の朝が動かない

高槻市　田中由美子

不揃いの野菜が並ぶ台所
出し切れぬ言葉を飲んだ喉仏
引き出しに仕舞ったままの青春譜
夫婦喧嘩割って入った御節介
出世欲捨てて無官のマイペース
ピリオドを打って磨いた歯が白い

河内長野市　谷久美子

あの時代茶粥卓袱台渋うちわ
気晴らしの旅は程良い田舎宿
正装は黒ネクタイの出番だけ
詳細はホームページと言われても
流れてもビデオが時を引き戻す
死亡記事ああの人もこの人も

宝塚市　丸山孔一

おもちゃ箱昔語りが顔を出す
老い二人メシフロネルで用が足り
あれこれと言われる内が華と聞く
恥かかぬ程度で一色足しておく
人の恩生きてる内に返しとく
あの人に笑顔も添えて拍手する

八幡市　今井万紗子

真夜中のこむらがえりが騒ぎ出す
用心に男の表札もかける
テレビから卒業見たいものがない
断捨離と勿体ないがせめぎ合う
気はいいが損する顔のわたしです
原子炉は悪魔の巣窟だと思う

西宮市　泉水冴子

不器用な息子が家業守ってる
雨のち晴れ嘘をつかない父が言う
夫からだまされた頃懐かしい
病んでから上手に言えるありがとう
捨てる程物があるのにチラシ見る
湯けむりの中で迷いを流してる

和歌山市　土屋起世子

川西市　日野岡　和之

ま心をそっと包んで隣組
無い足りぬ支え合うから苦にならぬ
共稼ぎ割に合わない無駄遣い
ほっとするスローライフの深い滋味
飛び去った安全神話回顧録

西宮市　株元　玲子

今日もワクワクして墨と筆握る
驚きと感動こころ若返り
手の平に希望いっぱい握りしめ
冷汗かきながら夢中で走ってる
ごめんなさい心の中で手を合わす

奈良市　大久保　真澄

パソコンに指一本で立ち向かう
愚妻ってもしや私のことですか
多過ぎるお釣りに悪魔のささやき
老人の切り札ボケてましたんや
年とって丸くなるのは背中だけ

和歌山市　磯部　義雄

磨きます家も料理の腕前も
素晴らしい絵だが予約と付けてある
母白寿長いドラマが終らない
延々と介護が続く母白寿
骨休みしたいが休めない介護

海南市　小谷　小雪

火を抱いてわずかに笑う彼岸花
悪口も排水口に流し込む
首回すだけで世間が広くなる
四捨五入すると百歳になる母
カタカナの半角文字はぎこちない

橋本市　石田　隆彦

引き算をされて通帳軽くなる
あと一つ記録の前に見えぬ壁
生真じめな風正面を突いてくる
顔見ればやたらストレス散らす妻
さびしくてただチャンネルを回すだけ

和歌山県　森下　よりこ

また一つ診察券が増えた今日
ドクターの説得力に勇気湧く
少し見栄張るのも老いの生きがいに
それと気付く匂い始めた金木犀
駆け付けてくれる子がいる手術前

鳥取市　松原　ひとみ

子の挙式主役じゃないが足が浮く
青い子を世間の風が熟れさせる
アルバムに育児疲れが写っている
マイペース守る背中を風あおる
冬支度いっそ冬眠したくなる

入場は無料の中で金遣う
安売りをたくさん買って置き忘れ
誉められてまだ出来そうで無理をする
エネルギー貰っています曾孫だき
検診がすんで今年も保証され

鳥取県　橋谷静江

あれこれと本音を飾ることはない
強烈なパスのかわりに愛贈る
魂の親に仏がなってくれ
よりもどすミシンでザッと縫うように
熱心に恋の授業をうけている

松江市　相見柳歩

この町ものんびりできぬ放射能
試着室どれ着て見ても老けて見え
泥の舟乗れと誘うて来る狸
検診で病名二三もろて来る
へそくりの置き場忘れてしまうとは

雲南市　菅田かつ子

抵抗は無駄と悟った蔦葛
ずれている話気にせぬ輪の仲間
口あけて笑いかけてる栗のいが
格好良く歩いた頃もあったのに
成り行きを見守っている街灯り

雲南市　武島ちよえ

苦労した話の方が盛り上がる
反対の声喉もとで待機する
添い遂げるつもりで建てた兎小屋
重箱の隅で芽生えてくる噂
もうすぐに乗れるピカピカ霊柩車

竹原市　國實力

ライバルの背消えては浮かぶ日の焦り
疑問符が消えず枕のむきを変え
綻びを寡黙でつくろう老夫婦
傷つけぬ言葉選べば嘘になる
横文字のメニューで右へならえする

宇部市　高山清子

身勝手な話やんわり切り捨てる
現実と夢のギャップに出る吐息
待つこともよし人生の回り道
思い出を手繰って余生ふくらます
気遣いが良すぎて長居出来ません

阿波市　三浦千津子

秋の実が熟れる食欲ばかり増す
赤と黄を足さねば寂し過ぎる山
ふるさとを思うと涙止まらない
目の疲れゴーヤの色に癒される
口にせぬけれど玉虫色が好き

大洲市　花岡順子

パン焦げる香で一日が始まった
静かに猫と生きているのに多い塵
四股名書き取って脳トレ大相撲
老人ホームがやけにこの頃気にかかる
カリカリもいいが湿り気ある煎餅

シドニー　坂上のり子

物忘れ只今脳をリセット中
ひらめきが一つ出た日の有頂天
ときめきががっくり切れた試着室
衣替え捨てる覚悟をまたしまい
大根の葉付を買った無人小屋

弘前市　高橋洋子

ケータイの吐息聞こえる十二月
仮病のようにケータイの電池切れ
予定表妻も負けずにマル印
来年もよろしく頼む十指見る
辰年にナマズの制御期待する

塩竈市　木田比呂朗

最後尾笑う時間がたんとある
樹の下に座り大きなものに触れ
詩人かも知れぬ遠くを見つめる目
沈黙のまん中へんにあるリンゴ
少年よ林檎がぶりと明日を見る

福島県　七ツ森客山

分別のゴミに教わる妻の留守
目も耳も歯も足腰も医者が好き
断捨離の思案の先にいる夫
辞めた日に家事の分担決める妻
来し方へもう入らないバックギア

昭島市　野口忠

診察券が一番威張っている財布
犬に運動させて貰って元気です
やっと来た秋だが冬がついて来る
一日は孫の話でいる笑顔
二分進んだ時計が使い良い

佐渡市　高野不二

一人芝居妻は飽きずに拍手する
夫婦老い一足す一が一となる
新聞に載らぬニュースを路地で聞く
泥濘に足をとられて職探し
風評に負けず新米風を切る

岐阜市　平野あずま

ガラス越し映る自分にぞっとする
その昔きれいだったと言われても
ケイタイでボケ先送り出来るかも
行くあても来るあてもない三連休
来年のチギリ画展に燃えて見る

静岡市　渡辺芳子

江南市　脇田雅美

オイオイと家族みたいな趣味仲間
お見舞いに元気印を置いてくる
曼珠沙華にお地蔵様が照れている
粗品にも真心ちゃんと入れておく
太公望魚屋さんに寄ることも

豊橋市　藤田千休

定型を破調に変えて進化論
ポジティブなポーズが好きな査定表
秋風に木端微塵の恋ごころ
後出しで知ったかぶりの豆知識
腑に落ちぬ話に咀嚼くりかえす

大阪市　髙杉力

優先席の近くまで来て帽子取り
ボケ防止言い訳にして卓囲む
ポイントで買おうとすれば期限切れ
思慮深い人でいまだに独り者
ボチボチと答える声にあるゆとり

堺市　澤井敏治

不意の客ビールに添える虫の声
石庭に心の垢を置きにゆく
断捨離といえど命の捨てられず
言い勝った後のしっぺの恐ろしさ
忘年会残った靴に足合わす

堺市　近藤治子

久し振り見た足の裏老いている
まずトイレマークを探す子供づれ
まだ迎え来ないで老いの華咲かす
有難う聞きたくちょっとお節介
イライラで作った料理塩辛い

堺市　羽田野洋介

使用前使用後につい誘われて
結局は自分で動かないとだめ
愚かさが自分で見えぬ愚か者
顔洗って出直せるなら簡単だ
目印が消えてしまった運不運

池田市　上山堅坊

独りもの誰も怒らぬ不幸せ
ビー玉を置けばころころ転ぶ家
土砂崩れ本気で襲うから怖い
実力へ運もホイホイ付いてくる
問診票少しは嘘を書いている

泉佐野市　稲葉洋

きみまろに大笑いしている自虐
歳末の人混み暇な奴も居て
ジングルベル歌う仏徒で平和主義
出会い一人訣れ三人年終わる
一年の悲嘆忘却出来るなら

リヤカーで昭和の夕陽遠ざかる
曼殊沙華ゆれる炎を抱き締めて
我が道を指すのが下手な道標
乗り越えてはじめて出来る道ひとつ
去る美学教えて落ちる砂時計

柏原市　森吉留里恵

山燃える私も染まりたくて行く
指の傷染みて後悔してしまう
芽を出さぬ種にも意地は残ってる
浮かぬ日は顔彩を濃く溶いて描く
高画質のアップに耐えている小じわ

河内長野市　木見谷孝代

不器用に生きて一杯傷の痕
足腰が先に弱った口達者
躓いた石は亡母の化身かも
もじもじと手を繋いでる金婚譜
出席に丸付けてから服迷う

河内長野市　針生和代

お守りをつけた車のへこみ傷
書くように話す人にはさからえず
嘆くまい猫の年だと十五歳
笛太鼓祭のあともまだ響く
どっと来てどっと帰った祭客

岸和田市　藤原昭

出来た嫁育てた親に感謝する
男性が半減古希のクラス会
家事一部老母に頼んで惚けさせぬ
敢闘賞あげたい扇風機を仕舞う
年賀状出したあとから訃の知らせ

岸和田市　増田隆昭

よそ行きの仮面脱いだら美味い酒
愛想よく断わる妻の演技力
失言に本音が透けて見えている
無理するなと折れて教える柿の枝
勢いが無くても魅せる変化球

高槻市　初代正彦

吹く風に金木犀が秋告げる
知己来たる地酒古酒手に気が踊る
長い夜文庫を顔に眠ってる
魚好き残った皿は猫跨ぎ
道の駅実りの秋に人集う

羽曳野市　磯本洋一

永田町を上野の猿が笑ってる
人間になったのにまた猿になる
満月が雲に隠れたこのチャンス
十五夜にボトル抱えてベランダへ
想定外便利で恐い言葉です

八尾市　田邊浩三

最後まで自立自活を目指してる
嫁よりも小さく住んで恙無く
美味しいと言うのが仕事レポーター
国会のどじょうヌルリと逃げ上手

奈良市　前田弘恵

御歴歴の意向気にして役選び
築五十年キュッキュキュッキュと床が鳴る
帰り道夕餉の匂い堪らない
秋風にもっともっとと万歩計

奈良市　矢野良一

携帯に留守番させて昼寝する
見渡すと余計なものは何もない
あの日から涙脆くの代表だ
耳遠く良きうわさまで聞きのがし

奈良市　尾畑なを江

口癖が勿体無いになる老母
電報で迎え頼んだ昭和の世
子供らのざわめき消えた過疎の街
散歩中句想が浮かびすぐ帰る

奈良県　谷川憲

百三歳の伯母のパワーが土産もの
釣った魚を褒めてあげ友となる
僕も行くと献立狂わせることに
石鹸は人嫌いかもよく逃げる

神戸市　木村忠義

富士山が見えたこの旅ついている
水族館孫の一声おいしそう
あやとりは手が覚えてる昭和の子
厭なことすぐに忘れて老母元気

神戸市　能勢利子

笹舟に幼き恋を積み残し
一言で積んだ苦労も水の泡
苦も楽も積んで登った八十路坂
勢いに負けて喋った過去の罪

神戸市　山根弘子

残照にいまだ泡立つものを抱く
スローライフ磨きがかかる私流
ふるさとに母という名の停留所
値切る癖生まれ育った浪花の血

神戸市　白川淑子

腹いせに蹴られた石が弾み過ぎ
休み明け軽い財布をもて遊ぶ
先生が叱られているクラス会
ふるさとの道を辿ると亡母の声

神戸市　新保登美子

良い事のあったとわかる軽い口
稲田に雀姿見かけぬ世の不安
日に一度安否気遣う娘の電話
野の花にしっかり歩けと励まされ

尼崎市　小池幸子

尼崎市　市坪武臣

洗いざらいぶちまけたのに効果なく
真っすぐに立つ青竹の頼もしさ
どっさりと食べては悔むバイキング
なでしこのあの勢いを政治にも

尼崎市　田原一兆

都合よい解釈をする如是我聞
変装のつもりが尻尾見えている
やわらかな言葉できつく芯つつく
まず褒めて少し叱って包み込む

加東市　黒崎美紗子

耕せば答すぐ出る野菜畑
実る秋うれし収穫有難い
白蟻にねらわれたらし穴見つけ
収穫の秋と烏の騒ぎよう

加東市　安達厚

今日は何しようか寝間で考える
安物の傘しか持てぬ忘れん坊
どこか変どこか不調と思う老い
夕暮れに金木犀が呼び寄せる

加東市　岩本美緒子

此処どこなの病院と言うお世話さま
絶食札下ろす四日目旨い粥
朝夕の冷え込み山を紅くする
紅葉狩りありがとゆっくり車椅子

川西市　山口不動

終点で寝ている人を起こそうか
ありがとう譲られる席座ります
表札は男名前を残してる
かば焼きの匂いは店の外に出し

篠山市　酒井真由

子の大事積んでくずしてまた積んで
悪びれず恋は思案の外という
華のある男がグラス傾ける
極上の詩集とレモンあればよい

篠山市　石田久子

遠近の眼鏡かけても見えぬ明日
月見でもしょうかごたごたした後は
忘却も暮らしの知恵と知らされる
三つ聞き一つ忘れる事にする

篠山市　谷田多美子

金木犀咲いて私の詩になる
自転車が三台曾孫の駆ける道
夢抱いて亡夫と越えた山も秋
掃除機に振り回される老いの午後

篠山市　藤井美智子

ボランティア自分に徳を積んでいる
神様のおかげ頂き今日も無事
目は肥えてふところ具合痩せている
亡き夫の日記とメモ帳我が宝

取れたはず頭木が夢で指図する
深酒が席を求める終電車
磨き過ぎ暇もて余す骨董屋
午後集合飲み屋に合わせ山歩き

篠山市　酒井健二

偉い人天下り先作ってる
たっぷりと自由の時間くれた亡夫
食事会一品作るはりが出る
古里も空屋がふえて秋侘し

篠山市　永井かほる

爽やかな目覚めと共に元気出す
口角をあげる努力で若く見え
節電の言葉が耳に付いた夏
おはようと今日も交わせたお隣と

三田市　辻開子

傷ついた絆をチョコで修理する
ガソリンの値上げ横目にウォーキング
鈴虫にせかされながら衣替え
馬肥ゆる気になる秋のダイエット

三田市　雑賀一泉

一人より二人で歩く道の幅
絶食を解かれ命をつなぐ粥
スーダラ節うちの父ちゃんピッタンコ
ほどほどに老いを忘れた好奇心

三田市　尾崎一子

杖なしで歩いて行けた墓参り
青春時動作にぶくて損ばかり
猛暑去りサンマの大軍荷揚げする
秋風とともに虫達夕日あび

三田市　山口久子

空元気出して自転車飛行中
携帯の優しい曲で呼びつける
栗ばかり貰い親指胼胝になる
一本のメール届いて元気出る

和歌山市　坂部かずみ

蛇行して川は大河の夢を見る
実直に生きた証しの靴の音
転ぶたび影も私も丸くなる
あるがまま生きよと影が囁いた

和歌山市　福井菜摘

親展の文に掟も添えてあり
不器用と言われてひとり世におくれ
仏にも仏の習い北枕
忘却や満ち足りぬ日のまわり道

田辺市　大峠可動

ご機嫌がいい時妻は若く見え
つぶやきの声が大きい遠い耳
いいわけの話だんだん化けてゆく
筆圧があると安堵の娘の電話

岩出市　村中悦男

岩出市　藤原ほのか

ひまわりを植えて亡き子と生きてゆく
水たまりようやく跳んで晴れマーク
カラフルなネクタイだけが踊りだす
一輪の花に心を救われる

紀の川市　北山絹子

新刊書積んでテレビにのめり込む
読み聞かせこどもの顔が花になる
問診へどうも微熱が邪魔をする
無農薬野菜に今日も救われる

紀の川市　辻内次根

輪の中で顔に出すから嫌われる
目標は一日生きるのが課題
自画像が平板になるぼくの顔
二三日郵便受けに無い便り

鳥取市　大前安子

父母へ新米供え秋知らす
引き出しへ預けた私そっと会う
そうなんだ希望を捨てた訳じゃない
どしゃ降りよ私の声も聞いてくれ

鳥取市　津村律子

虫達の夜空へ響く晴れ舞台
今日の雨明日の恵みの野菜伸び
お大臣避難所いつも病室ね
国民は益々疑念晴れません

鳥取市　坂本とも湖

嫁姑の酸っぱい仲を孫支え
夕月夜君が跡追う影法師
ネギの畝爺がせっせと鍬で追い
母の介護苦労重ねて老いじたく

鳥取市　山口千代子

こころには天使と悪魔同居する
関係ない人は陰からよくしゃべる
諭吉さんほれているのに何故逃げる
しゃべり過ぎ後悔してももう遅い

鳥取市　近藤秋星

コスモスがダンスしている青い空
老人ホーム賑わっている敬老日
世に背き喜怒哀楽のままに生き
寒がりへ届く初霜初氷

倉吉市　倉繁泰輔

ゴミ出し日共に捨てられそうになる
お膳立てした都合だがままならぬ
あの世への地図なく行けず生きている
豊かさか医者の薬もたんとある

倉吉市　前田喜美子

議事堂の窓に被災地見えません
呼び出しの電話も切れる老いの足
類を呼ぶ山のくぼ地はごみの山
これ式のことでくじける歳でなし

捨てられぬ母の形見の下駄一つ
倉吉市　田中紀美恵

ふる里を捨てては来たが母恋し
お膳の上コンビニの物どっかりと

味噌汁を三度飲んでる長寿者
境港市　中井虎尾

さあこいとカマキリかまえ我にらむ
改札をスイカと通る都会人

枯れてなお紫陽花(あじさい)咲いたままの秋
米子市　田村周子

点と線結んで犯人を追う刑事
追うけれど追い越されないすごい人

うぬぼれ鏡そんないいものあればいい
敬老会二人で参加乾杯だ

減塩と低カロリーを二人分
米子市　山本ふみ子

楽しみは張り合って手に入れるまで
そのことば棘があります呑み込めぬ

耳よりな話に弱い人の群れ
熟れるのを待ってる内に先越され

米子市　後藤宏之

小銭でも手元にあればホッとする
孫を餌に舅をうまくたぶらかし

目標の平均寿命また上がり
長年の罪ほろぼしの遍路道

米子市　後藤美恵子

子ども等も精進料理似合う歳
秋の陣腰とベルトのせめぎ合い

月見酒飲みすぎ月が回りだす
耳澄ます施政演説野次が消す

米子市　小塩智加恵

三十年未だ嫁とは他人です
足腰が動く間は城主です

老人も役に立ちますごみ出し日
聞こえない振りも大事よ丸く住む

米子市　見山温子

汗と労の新米まずは神棚へ
金のない素振りに孫が寄りつかぬ

方言を聞くも楽しい田舎バス
夫の留守何度も鍵をたしかめる

米子市　湯浅久司

涼しさに寂しさ乗せる虫の声
胸に住む鬼と仏が妥協する

また一つタバコを買った納税者
覚めてなお余韻が残る夢の後

米子市　中原章子

確かめるたびに生命線が伸び
久し振りこむら返りの痛さ知る

ちゃん付けで呼び合う友で安心だ
安全の過剰説明裏を読む

夢追った道がだんだん狭くなる
アップダウンギアーが軋む膝小僧
秋刀魚より高い大根見て帰る
まだ生きるつもりで鏡磨いてる

米子市　野川宣子

教科書を黒塗りにした授業受け
終了の間際に潜む天の邪鬼
スーパーに通い節電達成す
妻も子も旅に出掛けて犬と寝る

米子市　生田寒之

あれこれで通ずる仲間賑やかだ
歳重ね独り芝居もつらくなる
血圧が寒い朝から騒ぎ出す
投句日が老いの頭を追い回す

米子市　加藤正二

歳と言う武器があるから許される
死ぬまでは和解の出来ぬ畦がある
やっと夫婦になれたと思う八十路坂
信じてた友の裏腹見えた空

鳥取県　下田茂登子

人生の訂正きかぬ今日生きる
また一人風の噂に友が逝く
風向きが変わる貴方の憎らしさ
畑仕事投げて帰ったこの暑さ

鳥取県　飯野菖子

気まぐれの旅で出会った国訛り
気まぐれな雲にあわてる野良仕事
冗舌にまるめ込まれて役を受け
菊香る今日の佳き日に招かれて

鳥取県　大塚美代子

ゴーヤ二つ夏の火種を見せて朽ち
あの日には戻れないから爪立てる
秋冷を感じとってる蝶番
柿の実が赤くなったが風邪を引く

鳥取県　加賀田志延

しんみりと語れば心解けてくる
名演技ポチも口あけ見とれてる
万札を入れて難病祈願する
脱殻を終えて農夫の汗実る

鳥取県　岡村孝明

気の早い釣瓶落しでまたあした
あれこれと欲ばりすぎるこの夜長
目の保養だけど財布と相談し
大口で笑うと元気湧いて出る

松江市　山根邦代

血を分けた仲でも憎い蚊を叩く
数珠はめて幼き孫のお念仏
大根も播けぬ病名はうつとやら
本性で大臣の席明け渡し

安来市　原煩悩児

病いえすべてに知恵が回り出す　出雲市　黒目英男
好奇心趣味の川柳究めたい
円高に悲鳴を上げるものづくり
白熱の議論で平和勝ち取るぞ　美作市　小林妻子
離合集散お国の為が気にかかる
十指みな賛成をした訳でない
玉手箱開けた覚えはない白髪
味噌汁の味ふる里は変わらない　広島市　岸本清
失業と天変地異に病む地球
街に出て刺激の風に触れてみる
抜け毛ケアいろいろしたが不毛の地
天日干し布団畳めば陽の匂い　竹原市　若年幸子
寝ころぶと少女に戻す秋の空
寝ころんだ耳に大地の秋を聞く
まず棄てる整理整頓のスタート
まあいいか時間に甘くひとり住む　竹原市　土井輝恵
辞書捲る音の速さよ受験の子
なんとなく難しそうな抱っこ紐
くもの巣を払い命をいとおしむ
面映ゆい敬老会の初参加　竹原市　六田半徳
秋祭りふる里の風ここちよい
マヒの手をさすって祈る十五年
この角を曲がれば猫に会えそうで
日めくりの薄さ確かめ苦笑い　香南市　桑名孝雄
若返らなくても俺はまだ若い
ドクターストップないよねェ主治医殿
匍匐前進一寸にある運不運
袴が妙に重たくなっている　四国中央市　篠原久
ああ言えばこう言う人で嫌われる
嫌味とも聞こえる人の褒め上手
トラクターより車農家の三代目
友達の数が自慢のコップ酒　松山市　神野きっこ
墓参り他人の墓も見て回る
愛情の海で泳いだ反抗期
故郷の母が詰め込む思いやり
断捨離をしてから運が向いて来た　今治市　渡邊伊津志
デッサンの余白に見えて来た呼吸
魚切るより大胆な外科のメス
スランプを抜け出たらしい声の艶
隣まで帰り着いてる妻の声

北九州市　小松紀子

無理きかぬ歳だ今夜も湿布貼る
聞き上手胸のつかえが取れていた
言葉尻棘は少し抜いておく
お世辞でも若いネと言われウフフのフ

福岡県　本田さくら

ミニトマトコロコロ逃げて塀の外
夜間雨今朝は水やり免除です
昔話を残して風は通りすぎ
まわり道おしゃれ案山子に逢いに行く

福岡県　豊田愛

話す人無いから亡夫に独り言
疑うこと知らぬと友が釘をさす
良い祖母になろうと少し身を削る
雑魚だから群れにもぐって生き延びる

唐津市　岩崎實

一歩でも二歩でも半歩でもいいよ
来るくるがやっと来ました梨一個
入れ替えでタンスの古着捨てられる
新米を届け子等よりありがとう

唐津市　吉冨節子

ピーポーにもしやと思う母独り
もみ消して忘れた頃に煙立ち
老いたかな友が時々変化球
少しだけが深みに嵌まり抜けぬ足

唐津市　北村松風

人間の善意ドナーを待つ命
運の良い石だ奇麗に磨かれる
泥酔の出来るお方が妬ましい
煩わし口にださねど顔に出る

山鹿市　米加田恭代

ワンクリック削除できない過去がある
見えすいたおせじ言ってる我がいる
紫蘇の実をこそげ君への想い断つ
毛深くてメスかオスかがわからない

山鹿市　三谷たん吉

かわいさをまるで感じぬこの地球
予告なしいきなり揺らす性悪星
夏過ぎた次は秋だろ秋を出せ
オレの句を見たぞとばかり震度5が

札幌市　佐藤登美子

萎れてる五体シャキリと食の秋
消灯も目覚めも早い高齢者
人生の節目ふしめに出る涙
ご先祖の霊を弔うヒガンバナ

弘前市　髙森一呑

吹雪く夜は想定外の妄想に
血が騒ぐ父に似ている祭り馬鹿
たてまえと本音のなかで毒を吐く
夜な夜なに俺は女装で闊歩する

台風をじっと見据える林檎の眼
鬼灯を仏前に添え亡母偲ぶ
イナゴ追う小屋が僕等の秘密基地
信用失墜僕の立ち位置ポチの下

弘前市　稲見則彦

年金をもらえないかも五十歳
聞く耳を持つのが大事これからは
東北の旅が復興支援する
放射能洗浄したら何処へ行く

東京都　髙岡弥生

力みすぎつい出してしまう悪いくせ
腕組んで解ったように頷いて
脛かじり親も痛さを忘れがち
ふところの温みが欲しい朝の粥

日野市　大竹一良

絵に描いた餅で内閣足とられ
カラオケで軍歌歌えば腰が伸び
詫びるとは言わず真摯に受け止める
さよならのひと言ぐさり胸を刺し

東京都　井上つよし

難しい病気で個室行きとなり
良薬の一つに入れるサザエさん
良薬は孫とペットの写真集
入院で夫は家事が上手くなり

横浜市　巖田かず枝

裸婦像に塗ってあげたい日焼け止め
好き嫌い母の教えのとおり生き
時が過ぎて何で惚れたか後悔す
一滴も飲めぬが酒の歌が好き

富山市　有澤嘉晃

バステナーバリトンもゆく修行僧
きょうの元気残しておいてあす使う
曼珠沙華遠い彼岸の道しるべ
見て嗅いで味わっている秋日和

京都市　清水英旺

ベッタリと静電気のような新家庭
ぜいたくの極み食べ放題の残り物
老夫婦話し上手に聞き上手
色々と言い訳をしてマイペース

大阪市　木村青生

飽きもせず三度三度の飯を食う
格好より転ばぬ先の杖の歳
孫ならば少しのやんちゃ叱らない
じっくりとアルバム見つつ一人酒

大阪市　吉田知之

睡眠薬のんで昼寝もしています
達筆でサインの主が分からない
靴下の破れも親子同じ場所
マータイさんモッタイナイをありがとう

大阪市　平井露芳

札束を幾度数えて除夜の鐘
あっさりと古本の山小遣いに
旅に出てもしやもしやと湯にのぼせ
平凡なパソコン文字の年賀状

大阪市　吉川弘泰

百点に勢い付いたランドセル
風評が秋の味覚を遠ざける
嫁姑気くばり消えて水臭い
誤解だと言えば言う程怪しまれ

大阪市　寺井弘子

受付の人待ち顔の投票所
補聴器はいらん音までよく拾う
積み上げた服前にして思案中
坂道で手を貸してくれたイケメン

大阪市　田中都

トボトボと歩く姿が母に似る
ふるさとに置き忘れてた純真さ
飛び出した自転車の子に睨まれる
ちゃんと届いているのだろうか義援金

大阪市　松田聰

労いの言葉わからず義理を欠く
つきあいをきっちりすれば身もかるい
高価品ゆめのなかだけたのしめる
その日まで朝風呂と酒たのしもう

大阪市　浅井公平

七十を越えると歳は数えない
ナビに聞いても出てきませんね天国は
うれしいね女難の相にご用心
同棲中水虫菌と歯周菌

大阪市　太田としお

野良猫も力と知恵で生きている
人生は休む事なく時を追う
口車に乗って地獄に引き込まれ
連休で休むと体だれてくる

大阪市　前川善之

円高は得か損かと我迷う
国債の重さで日本沈みそう
ヒットなく凡打人生八十路すぎ
年齢に先に目がゆく訃報欄

堺市　増田和幸

コスモスのひょろひょろ伸びて庭は秋
大臣のすぐの辞任は軽すぎる
確固たる信念があり無表情
妻がすぐなぜなぜなぜと堅いこと

堺市　内藤憲彦

十人に好かれたいとは思わない
若くして亡き妻に今思い遣る
お互いに自由を得たい定年後
今日は鍋野菜の高値なお寒く

泉大津市　助川和美

人工骨に救われている万歩計
賑やかでちょっとしんどい三世代
慌てると泉州弁になるわたし
お向いが表掃きはる音で起き

貝塚市　石田ひろ子

日の射さぬままで路傍の草の旅
腰の低いどじょうになぜかほっとする
体調がマシになったら気が変わり
酒などはなければなくていけるもの

交野市　田岡久幸

一日の予定天気で決めている
健脚の米寿のあとをおいかける
けむたいが昔気質の理屈聞く
エプロンがだんだん似合い主夫になる

河内長野市　辻村ヒロ

のど自慢老いも若きもよい笑顔
一週のいのちの糧をスーパーに
愛犬の散歩で元気もらう朝
わたし散髪健太は犬の美容院

河内長野市　木太久正一

朝ドラを見ようと散歩切り上げて
あれとあれ無けりゃ優勝出来たのに
散歩道三日慣れたら犬吠えず
まだですかお鍋の蓋に手が行き来

河内長野市　松岡篤

気がせいていつも小走り生き急ぐ
ラーメンの三分待てぬ我が君は
あの世でも母に責められ父困る
責められてくやし涙を溜めておく

河内長野市　八木加修子

他所の子はちょっと見ぬ間に頼もしく
退職後そろばん抜きで飲んでない
店長の気くばり乗せて回る寿司
腹時計だけは故障も無く元気

河内長野市　梶原弘光

シニア割り活かして孫と映画館
出世払いおねだり旨い孫の勝ち
大空へ叫びたくなるあの秘密
母が逝く夕焼け空へ泣き叫ぶ

河内長野市　山本エミ

こだわりがノーベル賞を生み育て
ゴキブリが最後に残る近未来
囲まれたフェンスに育つ一人っ子
十字架に辿り着くまで増える罪

岸和田市　中岡香代

朝の祈り家族の無事を一番に
お守りに願いだんだん重くなる
雨上り待ちかねて抜く庭の草
狭くても四季味わえる庭の花

吹田市　藏田光子

嘘つけばすぐに広がる鼻の穴
うどんにしょ御飯のスイッチ忘れてた
空腹で行ったらあかんデパ地下へ
律義だなぁ彼岸忘れぬ曼珠沙華

豊中市　貝塚正子

ここにおく　私ひとりをここにおく
人生の迷い断ち切れ鹿威し
賞味期限胸に手をあて我思う
衣替え自賛と自省交錯し

豊中市　久高賢市

コスモスに語りかけたいのにそっぽ
誰にでも叫んで見たい朝がある
パソコンが賢くなってまた疲れ
ど忘れにア行カ行と繰っている

豊中市　源田啓生

暑気去って食事の皿の数がふえ
死ぬまでは生きていますよ風まかせ
ずり下がり青春してるズボン達
戦いの好きな神様多すぎる

豊中市　荒巻夢

停車時のガタンわざとじゃあるまいか
長大な顔遠近感を狂わせる
ぬぎすてた靴下だれに似ているか
お父さんでんでん虫になっちゃった

豊中市　石橋優明

ふたりならやっていけるさ今日も晴れ
寿と書いて子離れ覚悟する
ペコペコのお腹がグーと自己主張
カーテンが揺れた亡母さん来たのかな

豊中市　池田純子

慣れすぎた筆飄飄と誤字脱字
ジグゾーパズルゆっくり愛ではめて見る
半券に思い出のせてシンフォニー
気まぐれな猫が噂を蒔きに来る

富田林市　関よしみ

さわがしい現を逃れ旅にでる
旅はよし別嬪さんにほの字のほ
ひそひそと内緒内緒でひと回り
残暑なお厳しいようで御自愛を

寝屋川市　小谷滋彦

孫帰るそっと財布をのぞく爺
エンマ様予約の電話できますか
風呂上り障子に映るトドか豚
老妻の衰え知らぬ口達者

寝屋川市　岡本勲

ジーンズが似合う夫と旅に出る
金魚には二泊三日の留守任す
ゴキブリがわたし目掛けて飛んでくる
仰々しい包の中にある老舗

羽曳野市　宇都宮ちづる

書に励む夫を横目にガムを噛み
補聴器の代りに何時もふたり連れ
冷え性に辛い師走の水仕事
足裏の懐炉があるとプレゼント

羽曳野市　安本美喜

文明にあばき出されたお月様
ふっとふっと弱気にもなって齢の嵩
百三十歳迄とは言うて居たけれど
金なんか要らなくなったらおしまい

阪南市　坂口公子

万華鏡まわすと夢が咲いてくる
世間を泳ぐ知恵は先輩から学ぶ
写真整理してると胸が熱くなる
理に叶う話はちゃんと聴いておく

東大阪市　西田いくひろ

欲張って溜めても娘にはゴミに見え
福袋大きい方に手が出ます
捨てられず広い部屋でも狭く住み
母の歳越えて誇れるものは無し

枚方市　河田洋子

ファッションは平和のために活かせたい
Gパンの裂け目が流行る変な世ね
奥さんもはやりの服で身をつつむ
この酷暑短パンはやり省エネだ

枚方市　小川良吉

野菜作り農芸競う妻強気
鶴折って余生の欲に微笑みて
しっかりと往年の母のアルバム
妻が寝る胃袋満たす隠し酒

枚方市　坂本ミヨノ

何くわぬ顔していつも平常心
戻りたい所に未だ向かえない
草野球してた自分がなつかしい
ここ最近残暑対策水補充

松原市　市川雄太

故郷のなまりなつかし親の謝辞
スピーチを済ませ食欲フル回転
日焼してはっきり目立つ白い髭
真似してるつもりはないがピカソ風

箕面市　寺井柳童

着信の音にも季節感があり
油断して夏も終りの蚊がチクリ
秋彼岸会釈が続く墓の道
新墓地のお隣さんにご挨拶

八尾市　山根妙子

人生の七坂助走付け登る
平凡な人生歩み恙無し
秋茄子の艶と姿に頬緩む
茗荷の芽収穫せよと頭出す

八尾市　前田紀雄

心地良い目覚めで今日のプラン練る
日が昇るもう許されぬなまけぐせ
電話して携帯所在さがしてる
他愛ないお喋りうつが晴れてくる

大阪府　小栢　こずえ

生きざまを思い出したら恥ばかり
米袋ぎっしり蔵に積む至福
慣らされて高値不景気年の暮
勢いで登った富士の御来迎

大阪府　西川　冷子

涼風に手足も弾むウォーキング
物忘れ古い日記の紐を解く
我が畑蝶の楽園無農薬
老斑も年齢のほこりと自負してる

大阪府　畑中　節子

ときめきを未だ忘れず米寿なり
枇杷すずなりカラスの群れと対峙して
鈴鹿馬子唄関宿に着き雨となる
脳ミソがもう限界と愚痴り出す

大阪府　若月　祐作

ころ合いのカラス来ぬ間の柿の赤
しばらくは寺へ行く道塞ぐ萩
そっくりと言われじーっと遺影見る
パワフルな皺もフラットテクニシャン

大阪府　高木　道子

全日本川柳誌上大会のご案内（柳多留第16集）

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」（平成柳多留第16集）を開催します。日川協年次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ㈳全日本川柳協会の権威ある三大年間行事ですので、こぞってご参加ください。

課題と共選者（各題2句・連記）

「逆」―佐藤　美文　―酒井　路也　共選
「明るい」―いしがみ鉄　―三宅　保州　共選
「龍」―及川竜太郎　―奥田みつ子　共選
「都」―山田　昇　―矢沢　和女　共選
「ガラス」―弘兼　秀子　―竹崎たかひろ　共選

第二次選者　津田　暹　佐藤　岳俊　松代　天鬼
植木　利衛　西出　楓楽

参加費　2000円（投句料・『平成柳多留』第16集代金含む）

賞　平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・㈳日本青少年育成協会会長賞・㈳全日本川柳協会会長賞
全日本川柳誌上大会賞（予定）

締　切　**平成24年1月31日（火）（当日消印有効）**

発表・表彰　第36回全日本川柳徳島大会（平成24年6月）

参加方法　参加用紙（雑詠1句）と出句用紙（2通1組）に記入し、参加費2000円（振替又は小為替）とともに左記へご送付ください。

〒530-0041　大阪市北区天神橋二丁目北1―11―905
社団法人　**全日本川柳協会**
電　話　(06)6352―2210
FAX　(06)6352―2433
振替口座　00970―9―35755

■句集紹介

『紙つぶて』

川端一歩著

中原比呂志

本を読むとき、私はまず奥付をみる。あとがきを読む。そして著者のイメージを自分の頭に描きながら一ページへ戻る。

川端一歩（本名は徳二郎）さんと私は運輸事務所は異なったが、同じ路面電車出身で「川柳大阪」のメンバーである。

1950年（昭和25年）朝鮮戦争勃発の年、マッカーサー命令によってレッドパージが行なわれ、全国の職場から活動家のみならず多くの労働者が職場を追われた。大阪市交通局もその例にもれなかった。その後、朝鮮動乱景気で日本経済は復興していくが、パージ後の労働者不足に若手採用されたのが私や一歩さん、塩満敏さんたちである。若手が多く活気のある職場ではあったが、景気に湧く民間企業にくらべて、市交通労働者の身分は「地方公務員に順ずる」とされてはいたが、不規則勤務でつらく、低賃金でハングリーだった。

職場点検室には「法の遵守」の額が掲げられていて、公共への奉仕、市民へのサービス、実直・勤勉を常々上司や先輩から教え込まれたものだ。また、今日のように、高校、大学へと進学する時代でもなかったので労働組合は、新組合員教育として、知識・教養、労働運動理論の勉強をすすめ、労働学校で学ばせた時代でもあった。

職場では、野球、水泳、柔道、俳句、書道、茶道、華道…と多岐多彩にわたる文化活動も活発であったし、休憩時間を利用して囲碁、将棋が盛んであった。掲示板には、世話人が川柳句を掲示してメンバーを募集していた。

「歌は世につれ、世は歌につれ」で、各時代の社会的背景と重ね合わせてみることによって、歌が、一句が、膨らみをもって浮かび上がってくるものである。

労働者階級ですと胸を張る
労働組合どこへいったか見えないぞ
この国の憲法いちばん宝物
九条の旗が平和の時刻む

一歩さんの句は、今も青年時代で実践的に学んだ正義感、行動力が体内に脈々と波うち、刺激をあたえ、血を沸かして、老いを知らないエネルギーを生み出していると私は思っている。平和を愛するヒューマニズムの句が多いのはそんな素地があるからだ。

これらの経験・知識、行動力が鶴彬句碑建立のスタッフとして、見事、大事業をなしとげるベースになったことは間違いない。

彬碑に曙光が見えたうれしい日
句碑が立つ歴史の一歩かもしれぬ

大阪には多くの文学碑があるが、新しい名所として川柳碑が建立できたことは、まさに歴史的事業で川柳界にとっても誇れるものである。一歩さんは読書家であり、将棋に強いことは他の方が述べられているので省略するが、自分の趣味勉学の範囲にとどまらず、組織する能力とそれを維持、発展に努力されたところが他の人と異なる魅力である。

交通労働者の勤務は、土日も出勤、早朝深夜、泊り勤務など、複雑で支える家族も大変である。家族との時間より同僚との飯、風呂、泊りの時間帯が長い。家事育児、教育は必然的に奥さんまかせになってしまう。

わが家では妻が運転僕車掌
最高のアシスタントが側にいる
帰ったら夕食できている幸よ
定年退職家族みんなの賞である

口には出さないが、奥さんには愛情の花束を常に抱いておられるのがよくわかる。

定年をスタート台にまた走る

朝起きて家族とともに夜眠る、当たり前の生活を取り戻した定年後でも、癌を克服しつつ一歩さんの活動は多岐を極めている。

暁をいだいて闇にいる蕾　鶴彬

蕾の開花まで走りつづける一歩さんの情熱に敬意を表します。

『紙つぶて』から私がいただく名句

字は楷書心は草書身は隷書

こんにちは 新同人です

（順不同）

鳥取 岩崎和子

私が川柳会に入ったきっかけは、倉吉市の知人宅を訪ねた折、お隣からにこやかにお顔を出されたのが野口節子さんでした。「来週の土曜日に川柳会があるからいらっしゃい」とお誘いを受けました。以来、会に出席させて頂いてお友達もたくさん出来ました

尊敬する方は各川柳会の会長さんはじめ、会員の皆様で本当に才能のある方たちばかりです。こちらの方々は表情も静かに話されるのですが、北海道に生まれ育った私はこちらに来て五十年近くになりますが、荒削りの性格で伸び伸びし過ぎたようです。

好きな句はたくさんあります。母を思う句に出合いますとほろりとさせられます。

コスモスの風が前頭葉に吹く　新家　完司
古里を向かぬ日はなし母が住む　牧野　芳光
眼の底に微笑んでいる母が居る　伊藤　辰枝
破れても貼って直しているハート　竹信　照彦
夕暮れはついて行きたくなるのです　小谷美ッ千

いま伊集院静さんに嵌っていますが、読んだあとから頭から内容が抜けてゆく悲哀を、味わっております。

帽子の好きな私は、ウインドーをちらちら覗き見しながら、「つかのま燃えたつ恋に似た落ち葉よ」と口ずさみつつ、深みゆく秋を楽しんでいます。

大阪 笠嶋恵美

お友達から、西出楓楽先生の句集「天秤座」を借りて読み、ぜひこの先生に教えていただきたいと、朝日カルチャー教室に通い、誌友になり好きと言うだけで上達しないまま、同人にと言われ悩みましたが、楓楽先生の「同人になれば同人の句が出来る」に決心し推薦をしていただきました。

この言葉を支えに自分の気持を川柳に昇華させると、少しずつ自覚が出来て根っこが張って行くような、そんな力を感じています。

また、高野山に川柳塔碑があり、あの世でも師であり友であり続ける事が出来るのです。好きな高野山で句会に参加出来るなんて、何とすばらしい事でしょう。

川柳塔社と言う大きな器の中に入れて戴き、とてもうれしく感謝しています。

師と仰ぐ人が居て、沢山の人と出会うこんな幸せに、心から御礼申し上げます。

皆様どうぞよろしく、御指導下さいますようお願い申し上げます。

ひょっこりといい句が出来てほめられる　恵美

こんにちは 新同人です

和歌山　柏原夕胡

「おまえの名前でわかやま吟社に入会しておいたぞ」すでに川柳をやっていた今は亡き父・中後清史川柳塔同人が、私に無断で入会させてしまったのです。これが、私の川柳を始めたきっかけでした。当時は、川柳をやりたい気持ちなどありませんでしたが、何でもいいから没頭できる趣味を持ちたいと思っていた私は、興味本位で川柳の世界へと足を踏み入れたのでした。そして、その魅力に嵌ってしまい、今では一番大切な趣味となっています。

墓に来て小さな城だなと思う

私の大好きな句です。ずっと以前、川柳マガジン誌で見かけた、どこかの結社のお名前の知らない方の句です。目新しい言葉や技巧や小道具などに頼らず、素直な句風でありながら、ホームドラマができるほどの内容の深さを感じ、想像力をも逞しくさせてくれます。また、身近な素材だけに共感を覚え、清潔感を感じます。

見かけによらず身体があまり丈夫ではなく、作句や句会への出席もままならない時もある私ですが、この一句を目標に、自分らしく、真っすぐな気持ちで川柳を愛し続けていきたいと思っています。

鳥取　斉尾くにこ

こんにちは、同人のお仲間になりました。よろしくお願いします。川柳を趣味として良かったことは沢山ありますが、一番は多くの方々に出会えお友達になれたことです。今までの世界とはまた違ったドアを開けました。毎月届く柳誌に心ときめき、気になる方のお名前を探し、句に目を走らせ柳友の名前を見付けて共に喜びと、そこはキラキラと煌めいていて新鮮な空気に包まれていました。

私の稚拙な十七音字や迷い、有頂天や凹みに対して、優しさや叱咤激励、笑いや辛口批判、勇気や立ち止ること、…教えてもらいました。それらは直接であったり句評にあったメッセージだったりして、活字の場合には嬉しくて赤ペンでビックリマークなどをしたりして、繰り返し何度も読んでしまいます。多くはまだお目にかかったことのない方ですが身近に感じる時です。

これからも川柳に出会えた頃を思い出しながら、戴いた優しさは胸のポケットに入れて言葉を紡いでいきます。

私の川柳の目標はひとつ「続けること」です。育てていただいた方への感謝を忘れず、新しい出会いにトキメキながら柳歴六年目を迎えます。

夢遙かまだ二合目のクライマー

こんにちは 新同人です

奈良 加門萌子

入っていた「文学と映像の森」という講座が終わり、能動的な趣味を始めようと思って、川柳を始めました。六大家、他にも沢山

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ　麻生　路郎
人恋し人煩わし波の音　西尾　栞
国境を知らぬ草の実こぼれあい　井上　信子
鯉のぼりまたこの国が好きになる　新家　完司
アフリカに降る星屑よパンになれ　但見石花菜
自分史へ誇るもの無し母一字　四道　花子
子が育つ夢ひとつ消えふたつ消え　村上　敬舟
母恋し卒寿の春のいまもなお　鈴木内午郎

読書は好きで今までに感動したのは「トルストイの短篇集」「国家の品格」「落日燃ゆ」「水府泡幻」「ケストナーの少年文学」「一瞬の風になれ」「佐賀のがばいばあちゃん」「いのちの対話」最近では「下町ロケット」が心に残っています。

国内旅行、読書、映画も好きでしたが、映画館が奈良旧市内に一館も無くなり、がっかりしています。もっぱら小犬と散歩の毎日、改めるのは夜更かしです。

大阪 島田誠一

私は七年前に定年を迎え、さあ思いっ切り好きな事をして余生を楽しもうと釣り、山登り、旅行、海外ツアーと主にアウトドアを中心に精力的に取り組んでおりました。それぞれ定番の趣味であり多いに楽しめましたし、今も続けておりますが、ある時友人から会社ＯＢ組の川柳同好会を紹介され、とり合えず見学することとなりました。気の合う仲間と和気あいあいに川柳を楽しんでおられる様子がとても生々として好感のもてるものでした。

私と川柳のお付き合いの始まりです。しかし最初の一～二年はなかなか作句が出来ず、先輩方の句を見ては溜息をついていました。無理にうまく作って形を整えようとするので、余計に句が生きてこず苦痛すら覚える時期もありました。

程なく川柳塔さかいの河内天笑先生に教えていただく機会を得、多くを学ぶことが出来たのです。テクニックもさることながら、きどるよりも素直に、無理に飾るより素朴に正直に日常の人間を切り取ることだと痛感した次第です。今回同人の仲間入りをさせていただき誠に光栄ですが、川柳同様、今後の私の生き方も正直に素直にを心がけたいと願っています。

こんにちは 新同人です

大阪 島田千鶴子

娘たちが嫁ぎ義母を見送り、なんとなく毎日を過していた時朝日カルチャーの川柳教室に出合いました。先輩の方々の句、また初めて手に取り読んだ川柳誌、三ヶ月後には、場違いの所に入ったのではないかと後悔をしたものです。あと三ヶ月、もう三ヶ月と続けているうち、人の行動、心の変化、自然を見る目、世の中の動きなどよく見ると、人間も自然も世の中も面白くそしてちょっぴり怖く、素晴らしいものだと気付きました。それらを私の感覚、私の言葉で、表現する事に引き込まれて行きました。

夢掴むために両手は空けておく　楓　楽

私の好きな句です。家族だけのものではない、私の両手で、新しい夢と楽しみを見付けたのだと思いました。

大会で「ちずこ」と初めて呼名した時の嬉しかった事を忘れず、これからも心新たに川柳を続けていく所存です。

みなさまのご指導の程よろしくお願いいたします。

鳥取 高浜 勇

暁をいだいて闇にいる蕾

私の胸に強烈に刻み込まれている鶴彬の句です。

この句を知ったのは、初めて参加した二年前の川柳塔まつりの時でした。まつりの翌日にあかつき川柳会の岩佐ダン吉さん、川端一歩さん、近藤正さん、木本朱夏さんたちが鶴彬の句碑を案内してくださるということで、数名の鳥取の仲間と一緒について行きました。

十月にしては暑い汗ばむような中を、数時間にわたって案内していただきました。句碑は大阪城内の豊国神社近くの一の櫓付近にあったと思います。

数トンはあろうかと思うどっしりとして安定した形の良い石に、句が刻まれていました。—**暁をいだいて闇にいる蕾**—その時、初めてこの句と鶴彬という人を知りました。

鶴彬の生い立ちや暗黒の時代に翻弄され、志なかばで心ならずも若くして逝き、無念だったであろう一生を思う時、平和な世の中でのうのうと川柳を詠んでいる自分とのあまりにも大きなギャップに、一層強烈に私の胸に響き、忘れられない句となっております。

こんにちは 新同人です

鳥取　竹村紀ノ治

私の好きな句について。

私は昭和十七年七月に父を亡くしました。七歳でした。母は、妹二人と実家の鳥取県の赤碕町（現琴浦町）へ、私は、父の実家の山口県防府市へ、別れ別れに住むことになりました。

父の命日は七月七日です。（麻生路郎師と同じ命日であることを知って、不思議なご縁と感じています。）毎年この日に合わせて母が鳥取から墓参りに来ました。このときは母をひとり占め出来るのです。一年分を甘えられる何より嬉しい日でした。

そして川柳を始めて次の句に出合いました。

それは

上の子は足だけ母にふれて寝る　丸山弓削平

これは『川柳の群像』東野大八著で知りました。

私は、七歳の児に戻り、まだ若かった母の顔が浮かんで来ます。川柳っていいな、素晴しいな、ありがとう。

これからも川柳を続けて行きたいと思います。

新同人です。よろしくご指導お願いします。

大阪　遠山唯教

川柳をはじめたきっかけ

平成十六年四月　なにわ柳壇投稿

平成十六年十月　朝日カルチャーセンター会員

尊敬する川柳人　西出楓楽氏

好きな句

俺に似よ俺に似るなと子をおもひ　路郎

朗らかな顔が大きな輪をつくる　唯教

お勧めの本　好著として

梅棹忠夫著「文明の生態史観」集英社

池波正太郎著「又五郎の春秋」中央文庫

中谷巌著「資本主義はなぜ自壊したのか」中央公論

川柳以外の趣味

現役ではゴルフ、現在はインドアのテニスレッスンで毎週二時間の汗をながしている。

雑　感

敬老日の夕刻に高校生になる孫娘から電話があり「おじいちゃん、おめでとう、長生きしてね」という嬉しいのか寂しいのかそんな歳になったのかと、多少複雑になっている。

長生きをしてねと電話やさしすぎ　唯教

こんにちは 新同人です

鳥取 成田公一

何年か前、地元の新聞に投稿を始めたが、出しても出してもボツになった。とうとう腹を立てて、「節」という題のときに、選者の目は節穴だという句を出して、それきり川柳から遠ざかっていた。

そのときの選者が、小西雄々氏だったが、このたび同人としてぼくを推挙して頂いた3名の推薦人の筆頭に、同氏の名前を見て、唖然とした。

これでいよいよ同氏には頭が上がらなくなった。

ぼくの若い友人に、大野秀君というのがいて、うちのおやじは実にけしからんやつだという話になった。彼の父は島根県美保関町の川柳作家で、なんでも家系の中にすぐれた詩人の少女がいて、墓地に詩碑が建っていたのに、父がその詩碑を全部削ってしまい、代わりに自作の川柳を書きこんだのだという。そのお父さんの雅号は聞き洩らしたが、その墓碑の句はぼくにとっては、衝撃的な句だった。

日本の農を継ぐ手が白すぎる

川柳はとにかく人を笑わせればいいと思っていたぼくの川柳観を、がらりと変えた句だった。まもなく政岡未延子さんの門を叩くこととなった。

島根 錦織禮子

このたび編集部から新同人にかかる原稿依頼があり、思いつくまま拙いペンを執らせて頂きました。

川柳との出会いは平成十八年春。友人が自らの川柳を素敵に披露してくれたのがきっかけです。早速同年二月、彼女の所属する吟社「川柳塔まつえ」に入会させて貰いました。当時の会長は恒松叮紅氏、大先輩ですが飾らないお人柄なので、以来尊敬しています。

真面目に月一回の例会に通う中、裏方の句箋作りや投句の清書をお手伝いするようになりました。その間心に残ったのは、三島淞丘会長のもと復刊四十周年記念行事が、同人句集の発刊、祝賀句会等で盛大に行われた事です。

今年五月、当まつえは、新生まつえとしてフレッシュな主幹が誕生しました。スタッフの一人として投句の受付を担当することになり、本社の同人になることを勧められました。情けない句しか出来ない身で辞退しましたが、本社からの承認を頂戴し現在に至っています。継続は力と自らを戒め、意義ある川柳に命をぶつける覚悟です。不束ですがこれからもよろしくお願い致します。

最後に天笑先生の作品から軽妙な印象句を…

ゆっくりとしとくなはれと放っとかれ

こんにちは 新同人です

鳥取　西谷悦子

私と川柳との出会いは、NHKラジオの毎月第四土曜日の十一時から放送される文芸選評「川柳」の時間を、いつも腰に付けているミニラジオから聞いたことからです。

その頃の選者さんは河内天笑先生で、聞いてとても面白く素人の私でも出来るかも知れないと投句し始めたのがきっかけです。後に先生夫妻と面識があるようになりました。

そして地元の新聞に「日本海柳壇」が有ることを知り、無知ながらも投句を始めました。一句でも活字になれば大変うれしかったことを覚えています。そうしているうちに地域の公民館活動の一環として郡家川柳会が発足し入会しました。

趣味として楽しんでいるうち鈴木公弘先生に出会いました。それからです、川柳の奥の深さを知り、ますます引き込まれてゆきました。五年程先生に学ばせていただき、その後体調等の関係で現在は、地域の仲間と公民館活動に出掛ける以外は殆んど投句になりました。川柳のお蔭でいつも頭を活動させる幸せを感じております。

印象に残っている句は河内天笑先生の「**まだあてにされているから頑張ろう**」と鈴木公弘先生の「**親と書く字の大きさを考える**」です。あとの趣味は花育てと体に合わせた野菜作りで、家事と両立させて励みたいと思っております。

鳥取　深澤千恵子

今年の秋も我が家の小さな庭に、千日草の可憐な花が咲いています。その小さな花をながめながら、何か良い句は出来ないものかと、ついつい川柳のことが頭に浮かんできます。

私の好きな句は「**母の日の花は枯れても捨てぬ母**」です。この川柳をラジオで聞いた時、今は亡き母が健在だった頃、私が誕生日に送った花を枯れても捨てず大事に飾っていたのを、鮮やかに思い出したからです。

川柳を始めて三年半、本格的に始めたきっかけはケーブルテレビの川柳番組で、軽い気持で初めて作って応募した川柳が放送され、うれしくてやる気になったことです。

それからは新聞の川柳欄に投句したり、地区公民館の句会にも参加し、鈴木先生のご指導の下、川柳同友会みらいの一員になり、川柳仲間も沢山できました。

今日も家事の合間やニュースを見ている時、ウォーキング中でも頭の片隅には、いつも川柳のお題があります。

今はやっと、川柳の入り口に立ったばかりです。同人になれたのも、これから頑張れというエールだと受け止め、毎月の締切に追われながらも楽しく川柳作りに励み、日々精進したいと思っています。

こんにちは 新同人です

大阪 山室光弘

平成十九年に会社を完全にリタイアした時、さて何をするか模索しました。取敢えず図書館で読書三昧でしたが毎日では飽き足らず、パソコン教室やゴルフレッスン等にも通いました。そんな時、地元の公民館で文化教室の開催を知り十九年七月に訪問、色々な教室がある中で何となく川柳教室を見学した所、いきなりその場で作句を言われました。今まで川柳など一度も作った事はないので、右も左もわからないまま指を折って、何とか五七五の文字を並べてみましたら、課題や席題に入選しました。それが川柳を始めるきっかけで、その後四年近く「長柳会」諸先輩のご指導により、何とか川柳らしきものが詠める様になったと自負しています。

しかし最近ではむつかしさが分ってきて、川柳の奥の深さが特に感じられるようになりました。今年は東北大震災に強く胸を打たれ、テレビで見る惨状でしたが水煙抄にまとめて投句した所、六月号に西出楓楽先生に巻頭で六句選んでいただきました。そんな事もあって、四年ぐらいの経験では同人などまだまだと思っていましたが、「長柳会」同人の皆様の推薦もあり、このたび川柳塔同人の末席をけがす事になりました。まだまだ未熟者ですが、何卒ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

兵庫 吉井菜々子

田辺聖子さんのエッセーのなかで川柳に出合い、実作をはじめて三年目頃、尼崎の川柳大会に参加させて頂いたご縁で、「川柳あまがさき」に入会しました。大会の直前、大阪の阪急高架下、かっぱ横丁の古書店で、須崎豆秋さんの句集「ふるさと」（七〇〇回記念、復刻版）を入手し、豆秋さんの句に惹かれ、執心。外出時にはバッグのなかへ。就寝まえには枕元へと、肌身離さず、大事に。川柳塔の諸先輩方とのご縁は、豆秋さんのお計らいでしょうか？

ようやくホームグランドが出来たという喜びのなか、柳誌への投句を始めさせて頂きました。

尼崎の武庫之荘駅を真っすぐ南へ、トレビエ会館で開かれる「川柳あまがさき」。毎回、開会のごあいさつの冒頭「ご出席いただいたからには、一遍でも大笑いして帰って下さい」と、会長からの温かいお言葉、とても和やかな雰囲気のなか、勉強させて頂いております。（未だ未だ未熟で、これからですが）。閉会後の賑やかな懇親宴も楽しみな！月例句会です。

いつも温かくご指導くださいます諸先輩方皆様に、あらためて、心からお礼を申し上げます。どうぞ今後ともよろしくご指導くださいますようお願い致します。

こんにちは 新同人です

鳥取　吉田陽子

私が川柳を始めたきっかけは、思いがけなく大病を患い、さてこれからどういう生き方をすればよいのか迷っていた時、新聞柳壇の選者であった鈴木公弘さんにお声をかけていただき、師事することにしました。その後目標を定めるため川柳塔社を紹介していただき、現在に致っています。

慣れない自由吟に苦労する一方、自分を見透かした一句が出来た時には、そんな自分自身に驚き、また、喜びを感じる事があります。最近好きになった句に森山幽香里句集の中の「**咲いた日に散る風にあう花もあり**」があります。

絵手紙を画くのも好きな私には花や虫を観察することが日課になっています。そのせいで活字びっしりの本より挿絵の入った句集やエッセーに惹かれます。岡部伊都子、堀文子さんの著書を側に置いて、心を癒やされています。

地域活動の一つとして小さな川柳会のお世話をさせていただいておりますが、毎月欠席者もなく、句を作って集まる皆さんのエネルギッシュな姿に元気をもらっています。ご指導下さった恩師は元より、川柳塔の先輩の方々に出会えたことに感謝して、これからも仲間と一緒に川柳を作り続けたいと願っています。

「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇〇号記念出版

『麻生路郎読本』

A5版
514頁
頒価　三〇〇〇円
（郵送料共）

目次

麻生路郎アルバム
麻生路郎作品「旅人」「旅人その後の作品」
麻生路郎文集・麻生路郎語録
麻生路郎物語（東野大八）
麻生路郎の人と作品
麻生葭乃作品「福寿草」
麻生路郎著作解題・麻生路郎年譜
麻生路郎・葭乃作品索引

ご希望の方は左記の事務所までお申し込みください。

〒543－0052　大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201号
電話　06－6779－3490
川柳塔社

エッセー

私の二刀流

仁部四郎

唐津には、松浦文化連盟という公費の補助を受けていない文化団体が昭和23年以来活動しているが、その主な活動の一つに、「唐津『五足の靴』記念短歌大会」というのがあり今年の十三回大会には、大人三六四首（一人二首が原則）中高生八九六首（一人一首）が集まった。

明治四十年夏、新詩社「明星」の主宰与謝野鉄幹と、当時大学生であった北原白秋、木下杢太郎、平野萬里、吉井勇の五人が、長崎天草などへの旅の一部として唐津を訪れた。世に『五足の靴』といわれる一ヶ月近くのこの旅を記念しての短歌大会である。今年は、伊藤一彦、永田和宏、山埜井喜美枝、米川千嘉子らを選者に迎えて開かれた。

「刺すごとく、『アイディンティティ』と言わずとも『らしさ』と言えばいいのじゃないか」という私の歌が、米川千嘉子選で特選、伊藤一彦選で佳作に入った。

「革命はみな年表に眠らせて味噌汁の具に明日はレタスを」が、佐賀県を代表する園田節子の選で入選になったのは平成十四年のことで、大腸ガン切腹入院の年のことであったが、このたびの受賞は特に嬉しかった。

私の川柳が、新聞の読者文芸で初めて活字になったのは、昭和五十四年十二月で、「プーツなりリーゼントなりヤングなり」（佐賀新聞・北島醇酔選）であったが、昭和五十六年三月には、「顔が立ち議会の時計動き出し」（毎日新聞まいにち川柳・渡辺蓮夫選）と続いて川柳にはまり込むことになったのだが、これくらいなら私にも、の思いは短歌にも及ぶようになって、昭和五十六年九月に二首同時に佐賀新聞で活字になった。

「うつせみという語手帖に書きとめて茂吉の歌碑の裏に廻りぬ」（草市潤選）と、「高校の分校照らすナイターの明り茂吉の歌碑を読ましむ」（豊増幸子選）の二首である。佐賀市北部の古湯温泉には、高校の分校があり斉藤茂吉の歌碑があった。

川柳は、唐津での新岡回天子主宰の川柳会を経て、「川柳塔」の同人となったのが昭和五十七年二月のことで、佐賀県文学賞川柳部門の審査員も十年ほどは勤めながら、今日までなんとか「川柳塔」への出句も皆勤している。

「川柳塔」のどこかで一度書いたことがあるようなのだが、五・七・五ではどうも字数が足らぬと思うことがよくあって、それが短歌への関心を深めるようになっている。

「『らしさ』では『アイディンティティ』に足らないか」の五・七・五を川柳として出したら通用するだろうか。私の苦心は、短歌の初句の「刺すごとく」にあったので、二人の選者がこの初句を評価してくれて、短歌に仕立てた甲斐があったと思って嬉しかった。

川柳も短歌も定型を守ることは基本であるが、短歌の方が、融通性があるように思われる。声に出して読むこともとても大切なのだが、声に出すとその融通性がわかるように私は感じている。短歌の方が、より便利なのかなと最近は思っている。

私の短歌は、すべて我流で、これからも結社に属することはないだろうが、発想は川柳であるケースが多いのである。

「重陽は目出たき日とてジョニクロを紅茶にさしておかわりをする」（佐賀新聞・塘健選）に選者からは、「『日とて』の半ば追従する語調が面白い」との評をもらったが、私の感覚では、「たき」「とて」「ジョニクロ」「おかわり」と川柳的諧謔を狙ってのことであった。

誹風柳多留一一篇研究 76

増田忠彦・山口由昭
小栗清吾・伊吹和男
山田昭夫
清　博美

603 **名人のまり拠足に入ッたもの**

増田　江戸でも有閑人のなぐさみにされた蹴鞠。名人の技はさすがに堂（胴）ならぬ足に入ったものだ。

山口　賛。言葉遊び。

小栗　賛。「手に入る」（その道に熟達する）という成語がある。

船頭のたれるのハ手に入ッたもの　四21

清　小栗説賛。

604 **おつ伏せて馬鹿で背中をかいて居る**

増田　ばかは、「賭場で用いる、百文あるいは五十文という定量の銭を刺す串。俚言集覧に、『馬鹿…銭を刺貫く銭の串に馬鹿と云うものあり』という」（『角川古語』）

サイコロばくちで伏手が筒（どう）を伏せて、ばかを孫の手がわりに背を掻いているという図。

夜そば切り箸がたらぬとばかで喰　明二天2

山口　賛。場面としても馬鹿馬鹿しい面白さである。

清　賛。

605 **どう悟つたか禅僧もためる也**

増田　座禅を組んで本来無一物を念想する禅僧が、どう悟りを開いたものか蓄財をはじめだした。穢土にも江戸にも、色色がある。

禅坊主よく悟つたハ金をため　八一32

山口　賛。

うそか溜て本堂かたつ　武一19

よりいいかな。

清　賛。

606 **道にそむけた母おやの跡トを追ひ**

増田　「そむける」は「そむく」に同じ。妻としてのあるべき道をはずして、まさに離縁されようとしている。がんぜない子がその母親のあとを追う。去る女が男児を連れることはできなかったから、これも男の子なのであろう。

山口　賛。いかなる母でも母は母。

清　賛。

607 **松の木をへ先へ出して踊らせる**

増田　すっきりした解が浮かばず、ご教示をえたい。一つのダロウ解。

謡曲『自然居士』を連想した。自然居士の説法の場で子どもが人買いにさらわれる。居士は、琵琶湖に逃げた人買いを追ってその舟に乗り込み、連れ去った子どもの解放をせまる。人買いは自然居士に、得意の舞を舞えと

要求する。やむなく居士は舟の上で鼓を打ちながら舞を舞って子をとり戻した。曲の中には「志賀辛崎の一つ松、つれなき人の心かな」「所は志賀の浦なれば、さざ波やさざ波や志賀辛崎の松の上葉を…」などと唐崎の一本松が配されている。

高座から直にかけ出すじねんこじ　安七宮3

小栗　「舳先」と「踊り」となれば、屋形船の船遊山と思う。屋形船の舳先には松の木（鉢植え）を飾ったもののようで、「松の木」「舳先」「踊り」で、「さて何のこと?」という句であろう。

せがき船衆を置く場へ飯を置　五2
初リ〳〵　とみよしへ松を出し　傍二15

この「輪講」の解は誤りと思う。

屋形船主しのやうな松一木　ケイ五57

清　小栗説が正解です。

608　**あなどつて嫉の出て見る鏡研ぎ**

増田　中以上の家の若嫁であろう。奥に控えていてみだりに人前、とくに男の前に顔出しはせぬものとされた。ただ鏡磨きは女の道具を磨く出職で、男をこえた老人であった。その鏡磨きを呼び入れて店先の土間などで作業をさせているのであろう。彼なら老人だからかまわないと、奥から若嫁がのぞきに顔を出す。

うしろから能イ顔の出る鏡研ぎ　二9

小栗　賛。あなどる（＝他人を見下げてばかにする）という語をどう考えればよいか。老人で愚かそうなので、からかわれる心配もなく、安心して……ということか。

伊吹　賛。安心してだと思う。

清　同。

609　**小児医者さじをとられて手を重ね**

山口　江戸時代どの程度医学の専門化が進んでいたかはよく解らないが、少なくとも女性を対象とする中条流や外療（げりょう）などという言葉はある。小児医者という句も沢山あるから小児科も専門化していたにちがいない。主題句は患者である幼児に薬を盛る匙をとられ、どうすることもできずに手を重ねて頂戴をしたのである。

小児医者がら〳〵　などをふつて見せ　宝13札3
どりや〳〵　と甘草すくふ小皃いしや　明四宮1

清　それだけの句であろう。

610　**ぬめの襟かけていやあと下女いわれ**

山口　ぬめ【絖】は、絹織物の一種。天正年間中国から京都西陣に伝承した。多くは五枚繻子の生織物。（「日国」）

下女などの着る物は木綿物と決まっているが、どうした訳かこの下女は高級品の絖の襟などを掛けてきたのである。同僚の下男や近所のひとにでも「よう。よう」といわれたのである。

けんひきのあたり迄下女いつそぬり　安七義5

伊吹　賛。光沢があるので目立つのだろう。

清　賛。

611　**豆いりの名人店を度〳〵　おわれ**

山口　まめいり【豆煎、豆炒】は、男女が情を通じること。情事。いろごと。（「日国」）

女を引っかけることも「名人」となるとなかなかなものであるが、その代わり穏やかには済まない。隣近所で騒ぎを起こしては長屋を度々追われる羽目になるのである。

豆いりの舟炮録の用意する　一〇九45

清　賛。

愛染帖

新家　完司　選

聞きなれたギャグは微笑むだけにする

（評）「またか」とは思うが、口には出さない。白けた顔もせず、微笑んで応えてやる。人情の機微を心得たオトナの対応だ。

大阪市　小谷　集一

恋ぐらいできます髪も染めました

（評）髪を染めて十歳は若返った。鏡に向かって「よしっ、まだまだイケル！」と、ガッツポーズ。このパワー、見習いたいものだ。

岡山市　工藤千代子

天然の鮎は炭火で焼いてやる

（評）清流で育った鮎に対する思い遣り。であろうが、釣られて焼かれて食べられてしまう鮎にしたら「何を勝手なことを」だろう。

三田市　堀　正和

無視をしてください隅が好きだから

（評）遠慮しているのではない。萎縮している訳でもない。隅が好きだから隅っこで静かにしているのだ。どうぞお構いなく！

貝塚市　石田ひろ子

遅くまでテレビ見たから昼寝する

（評）いい身分である。現役のときは「明日の仕事に差し支えるから」と自重していたのだが…。これまで頑張ってきたご褒美だ。

大阪市　松尾柳右子

人生に飽きた表情だけはせぬ

（評）さて、「人生に飽きた表情」とはどのようなものか？　自分でも気がつかず、そのような表情になっているのかもしれない。

米子市　中原　章子

ひと間だけ片づけ客を待っている

（評）来客のたびに大掃除するのは面倒。お通しする部屋と玄関だけ片づければ充分。加えて、トイレのチェックをしておけば万全。

高槻市　片山かずお

呆けたかと言われ「一緒！」と言い返す

（評）ユーモアのある返答が出来るのは余裕がある証拠。予想もしない痛烈な反撃に、相手も「マイッタ、マイッタ！」であろう。

河内長野市　谷　久美子

妻に爪立てるとはまあ強い猫

（評）何とまあ大胆不敵なヤツ。奥さまのパワーを知らないのだ。奥さまとしても、亭主相手と違って、報復手段がなかなか難しい。

豊中市　水野　黒兎

スクワットしたらオナラが出てしまう

（評）なるほど、筋肉の動きがそのような不本意な作用をもたらすのだろう。だが、そのことで大切な体操を止めるのは残念。これからは誰もいないところで遠慮なくやろう。

松山市　神野きっこ

跡取りもなく引退出来ぬお月さん

大阪市　谷口　義

声出して読んで耳にも覚えさす

鳥取市　岸本　宏章

人肌の酒が恋しい星月夜

札幌市　三浦　強一

肖りたい人に握手をしてもらう

コンビニのおでん結構いけますね

大阪市　大川　桃花

性に合う仕事で多忙苦にならず

豊橋市　藤田　千休

お喋りに口閉ざさせたガーリック

半兵衛をきめこむ核の推進派

藤井寺市　若松　雅枝

電話にテレビ鳴っているのはどれだろう

急に来た冷たい秋にうろたえる

鳥取県　山下　節子

ファミコンが腕白坊主消していく

一目散だったそろそろ休もうか

岩出市　村中　悦男

聴覚の老化と医師は書いて見せ

全身で会議に臨む遠い耳

橿原市　安土　理恵

始末書をかくほど悪さしていない

不揃いの皿で育てた優良児

寝屋川市　冨山ルイ子
庭に咲き絵手紙に咲く秋桜

岸和田市　井伊　東吉
終章を飾るに見合う彼岸花

三田市　石原　歳子
墓参りすみましたかと彼岸花

松江市　石橋　芳山
空砲は止まらず口の立つ奴ら

西宮市　吉井菜々子
発車ベル缶コーヒーと滑り込む

堺　市　奥　時雄
アングルでカバーできない顔になり
吾輩を焼いたら残る雑魚の骨

西予市　黒田　茂代
人さまの前で演じる擬似平和
心空っぽ歳の重ね着ばかりして

堺　市　澤井　敏治
怠け者めと肩甲骨の軋む音
愛煙家多額納税蛍族

大阪市　小泉ひさ乃
秋の夜のテレビスターの食べ歩き
新しいタイプの総理また期待

松江市　三島　淞丘
おでん屋を横目で通る休肝日
真っ直ぐに帰って妻にからかわれ

和歌山市　古久保和子
院長の趣味が飾ってある医院
雑巾を絞る時にも左きき

海南市　三宅　保州
事故多発地と書いてある後始末

鳥取市　福西　茶子
丸ポチャが好きでなってる訳じゃない

河内長野市　村上　直樹
解散は総理リコンは妻の武器
積ん読の書斎にも秋　女郎花

橿原市　居谷真理子
極楽と思たか蓮が咲いている
犬飼うて犬に遊んでもらおうか

高槻市　初代　正彦
秋の夜をお茶と団子の休肝日
海外ではっきり知った円の価値

弘前市　髙瀬　霜石
千円も十万円も寸志なり
目印になる店とうにつぶれてた

大阪市　津村志華子
小学校のクラス会です杖ついて
住む人も絶えて空しい鬼瓦

堺　市　加島　由一
ベッピンのレジについつい並んじゃう
電話ではやけに明るい母の声

鳥取県　斉尾くにこ
健保から国保に替えて医者通い
定年のゴールテープをやっと切る

奈良市　岩本　浩二
鉦一つ鳴り仏壇の菓子が消え
天高く嫁は美味そに芋を喰う

シドニー　坂上のり子
ほのぼのとする絵を一つ残したい

宇部市　平田　実男
嬉しい日次々浮かぶ句のヒント

鳥取県　加賀田志延
苦吟する枕にボールペンの跡

河内長野市　坂上　淳司
水割りを倍に薄める休肝日

大阪市　古今堂蕉子
阪急に乗れば阪急の空気なり

豊中市　江見　見清
おばちゃんはメールしながら喋れます

三田市　上田ひとみ
姑に似すぎています　うちのひと

大阪市　岩崎　公誠
階段を下りる姿は蟹になり

尼崎市　長浜　美籠
西陽さす窓あれ思いこれ思う

米子市　高田　振作
賑やかな妻のおかげでボケもせず

池田市　栗田　久子
よくしゃべる日は食欲も増してくる

青森県　松山　芳生
城下町みんな城主の貌で棲む

鳥取市　有沢せつ子
仕事上覚えた文字は忘れない

河内長野市　梶原　弘光
瞑想にふけり貧乏ゆすりする

松原市　市川　雄太
秋風が小さな部屋に迷い込む

柏原市　森吉幼里恵
バランスを大事に生きた長寿箸

大阪府　籾山　隆盛
4Bを握るとひらくこころの瞳

鳥取県　石谷美恵子
見たくないニュース聞きたくない噂

福島県　七ツ森客山
出来たての塩辛酒を呼びよせる

香南市　桑名　孝雄
痛風の素が並んだ酒のアテ

芦屋市　黒田　能子
エレベータ一人だけでも隅に乗る

弘前市　稲見　則彦
懲りもなく今日もどうだと囲碁敵

枚方市　小林　わこ
自分流植えて楽しむ山野草

熊本県　髙野　宵草
本音吐く夫婦喧嘩で誤解解け

鳥取市　倉益　一瑶
細くても大根は大根の味

八尾市　吉村　一風
引っぱるのがうまいと凧も高くとぶ

西宮市　泉水　冴子
資源ならあります世界一の水

弘前市　福士　慕情
書き終えて日記パタンと床に就く

奈良県　渡辺　富子
結局はほかすチラシへ手をのばす

大阪市　津守　柳伸
お見舞いを済ませ健康たしかめる

和歌山市　柏原　夕胡
私より美人は誘わないコンパ

和泉市　横山　捷也
禁酒したと知らず土産に酒を買う

藤井寺市　鈴木いさお
別々にこっそりジャンボ買う夫婦

三田市　上垣キヨミ
はずれ籤本の栞に役立てる

高槻市　富田　美義
営々と祖母の字らしき農のメモ

海南市　小谷　小雪
ほこほこと野良着に染みる田の匂い

神戸市　白川　淑子
負け試合反省会はガード下

鳥取県　吉野いさお
パトカーにたやすく乗れた三次会

藤井寺市　太田扶美代
おひとり様一病みんな持ってはる

池田市　上山　堅坊
花柄のタオルを使う老い独り

八尾市　村上ミツ子
ばあちゃんの支持率上がる年金日

唐津市　樋口　輝夫
立ち読みの続き昨日の本がない

高知県　小澤　幸泉
西国の寺へ導く彼岸花

加西市　金川　宣子
曼珠沙華彼岸に合わす律義者

鳥取市　近藤　秋星
秋晴れはいいな何日続いても

東大阪市　北村　賢子
からっぽの心を持て余す身体

弘前市　髙森　一呑
ねぶた師に命をかけた跡がある

大阪市　岩崎　玲子
金持ちは財布いくつも持っている

唐津市　井上　勝視
そっと来て骨身にしみる不況風

和歌山市　田中　みね
飛び込んで助けたいけど泳げない

米子市　生田　寒之
金のない身でも強気な地方自治

三田市　田中　章子
盗って下さい言わんばかりの長財布

西宮市　藤本　直
年輪は手の甲に浮くセピア色

鳥取県　細田　裕花
正常に両目も歳をとっている

京都市　坪井　孝一
父だけが我慢をすればいい家庭

富田林市　中井　アキ
さりげなく気配りみせている老舗

高知市　小川てるみ
生き方を変えれば歩幅まで違う

田辺市　岡本　昇
指先の勘で一振りシェフの塩

堺　市　西村りつえ
銀杏の臭いを知らぬ茶碗蒸し

鳥取市　田村　邦昭
子供らに残すことばが見つからぬ

京都市　桝本　宏子
御転婆な孫のあこがれ雑技団

大阪市　伏見　雅明
ウエストを広げてズボン生き返り

篠山市　酒井　真由
バーゲンで遠慮をしてもはじまらぬ

鳥取県　竹信　照彦
行幸のお蔭で道路ぴっかぴか

河内長野市　水谷　正子
羽衣がほしい昨日と今日の鬱

大阪市　坂　裕之
休肝日祭ばやしが邪魔をする

富田林市　山野　寿之
喉元に酒を流して半世紀

鳥取市　岸本　孝子
飲兵衛も下戸の前では飲みづらい

豊中市　藤井　則彦
師の遺影見てはネクタイ締め直す

熊本県　岩切　康子
辞書捲り知人の句集読んでいる

大和郡山市　坊農　柳弘
釣瓶落とし慌てる事は何も無い

河内長野市　八木加修子
仏頂面それが私のポリシーだ

大洲市　中居　善信
何を探して歩くのだろう遍路旅

紀の川市　北山　絹子
末っ子を大事にすれば犬が拗ね

唐津市　坂本　蜂朗
待合室糖と血圧披瀝する

鳥取市　西川　和子
先を行く人にいけずをしたくなる

藤井寺市　俣野登志子
せっかちで髪の毛爪も伸び急ぐ

西宮市　片山　忠
四人部屋起こさぬように行くトイレ

藤井寺市　津田シルク
ベースアップなくてもいいさ社があれば

八尾市　前田　紀雄
自己主張ちょっと欲しいネ野田総理

堺　市　増田　和幸
脱原発コストアップで威嚇する

岸和田市　雪本　珠子
現実と理想の回路繋がらず

鳥取市　池澤　大鯨
自家製のぶどう酒ならばいただこう

鳥取市　大前　安子
赤い目でワイングラスと笑い合う

大阪府　高木　道子
この秋の顔して秋刀魚横たわる

堺　市　近藤　治子
部屋じゅうを満たせてくれる金木犀

四條畷市　吉岡　修
湯タンポも火鉢も納屋でスタンバイ

米子市　加藤　正二
断捨離を明日からにして今日は寝る

河内長野市　木見谷孝代
似てきますおんなじ部屋で寝て食べて

八尾市　田邊　浩三
負ける手を考えている孫との碁

鳥取県　岩崎　和子
カレンダー見ては締切りチェックする

岸和田市　増田　隆昭
遮断機にいらいらしてる救急車

和歌山県　森下よりこ
迷子になった新しい病院で

奈良市　矢野　良一
親父からされた説教子にしてる

岸和田市　森元ふみよ
定年後ときめく事ががらり減り

阿波市　三浦千津子
のたりのたり伸びたうどんの様になり

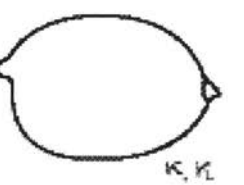
米子市　後藤　宏之
やれやっとシートベルトのクセがつき

高槻市　安田　忠子
人生は後半からが面白い

共選欄　檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句　７３８句）



「ピリオド」　福士慕情選

被災してピリオドまでも迷いだす　塩竈市　木田比呂朗
ひとつのピリオド故郷に決別　福島県　七ツ森客山
ピリオドが早い日本の総理の座　札幌市　小沢　淳
間違って押したじゃ済まぬ核ボタン　唐津市　山口　高明
御開きは一本締めと決めている　箕面市　寺井　柳童
ピリオドを打つには酒が呑み足らぬ　東かがわ市　清川　玲子
晩酌で終りにしよう今日の鬱　札幌市　三浦　強一
鍋噴いてやっと終わらす長電話　奈良市　大久保真澄
肩パッドに秘めた恋ありでも捨てよう　シドニー　坂上のり子
主婦業にピリオドロボットにバトン　大阪府　米澤　俶子
歩き出す為の終止符だってある　大阪市　栃尾　奏子
百歳で第一幕を締めくくる　鳥取市　福西　茶子
延命にピリオドを打つ尊厳死　鳥取県　吉野いさお
死神がピリオド打ちに来て困る　和歌山市　柏原　夕胡
薬指しがらみ抜いて一人旅　大阪市　寺井　弘子

「ピリオド」　池森子選

平成五年五十五歳で職を退く　堺市　源田八千代
百歳はカンマピリオドもっと先　河内長野市　坂上　淳司
中締めをしたあとからが長い酒　弘前市　稲見　則彦
ピリオドを打つには悔いが多すぎる　和歌山市　福井　菜摘
恩をみな返しピリオドへの準備　海南市　堂上　泰女
ピリオドを打った話を蒸し返す　高槻市　片山かずお
ピリオドを打って普通の人になる　京都市　桝本　宏子
一区切り後はも一度最初から　堺市　羽田野洋介
終止符をうって口紅引きなおす　神戸市　山口　光久
離婚印ぶれずに押したのは女　橿原市　居谷真理子
四季ごとにピリオド庭に花の種　岸和田市　増田　隆昭
ピリオドのつもり桜の狂い咲き　岸和田市　中岡　香代
人生のピリオドにある白い花　大洲市　花岡　順子
ピリオドの笛が鳴るまで無我夢中　日野市　大竹　一良
陽が沈む今日一日の役終えて　大阪市　川端　一歩

ピリオドを打てと合鍵錆びてくる　紀の川市　宇野　幹子
纏うもの捨ててピリオド打ちました　河内長野市　谷　久美子
ピリオドを消去懺悔重ねてる　八尾市　高杉　千歩
追伸に本音を添えてペンを置く　神戸市　新保登美子
ピリオドはあなたの側と決めている　西宮市　緒方美津子
親切にされてピリオド打てません　大阪市　榎本日の出
ピリオドを打ちたい人が離れない　可児市　板山まみ子
いつまでの夫婦ごっこが続くのか　三田市　久保田千代
ピリオドを打つ潮時が見抜けない　堺市　遠山　唯教
五枚目の小はぜピリオド打つように　枚方市　小林　わこ
後半でがらり作戦変えた妻　大阪市　伏見　雅明
アナログにいまだピリオド打てぬ僕　堺市　村上　玄也
ピリオドはこの街涙壺がある　藤井寺市　太田扶美代
一生に一句果てない人生路　横浜市　小野句多留
雲の上あとは叙勲を待つばかり　篠山市　遠山　可住
三つ指をついてお世話になりました　東大阪市　北村　賢子
恋破れ泣き泣き食べたカツカレー　大阪市　坂　裕之
突然のピリオドだった風の乱　芦屋市　黒田　能子
台風一過きみの歯ブラシ捨てました　岡山市　工藤千代子
もう少し喋りたいのにメモがくる　大阪市　江島谷勝弘
ピリオドは打てぬボルトの世界新　弘前市　稲見　則彦
ピリオドまで一目散に駆けてみる　寝屋川市　冨山ルイ子
さよならをいつ言おうかと差し向い　堺市　加島　由一

一夜明け潮目選んで仲直り　河内長野市　村上　直樹
それ以上食べるな胡椒唐辛子　大阪市　神夏磯典子
沈んでも明日は朝日となる夕陽　堺市　志田　千代
ピリオドを打てば勇気が湧いてくる　富田林市　中井　アキ
ピリオドまで一目散に駆けてみる　寝屋川市　冨山ルイ子
三幕目ピリオド打ってよく遊ぶ　富田林市　山野　寿之
ピリオドを打ってアンコールの余韻　柏原市　森吉留里恵
すべてよしありがとうだけの終止符　三田市　北野　哲男
とても大きなピリオド打って逝きました　和歌山市　坂部紀久子
ピリオドを打つと見えないものも見え　出雲市　竹治ちかし
ピリオドを打ってその後が動き出す　豊中市　池田　純子
ピリオドのあたりでしぶとさが覗く　美作市　小林　妻子
ピリオドのそれから先にある本音　松江市　三島　淞丘
ピリオドを打つその先が面白い　豊中市　江見　見清
ピリオドを打ちたくなって空を見る　三田市　久保田千代
ピエロ今ひそと終止符打つとする　奈良市　米田　恭昌
ピリオドがまだ見えて来ぬので命　美作市　山本　玉恵
ピリオドを打たねばならぬ泥の舟　大阪市　津守　柳伸
先手必勝ピリオドも白旗も　尼崎市　長浜　美籠
ペースメーカー入れてピリオド立ち上がる　鳥取県　岩崎　和子
終止符を消して続きを書く未練　茨木市　藤井　正雄
ピリオドで一旦休憩しませんか　橿原市　安土　理恵
ピリオドを打って網目の夏帽子　鳥取市　武田　帆雀

うしろ髪ひかれピリオド橋渡る　鳥取市　平尾　菜美
家裁でてパントマイムになる二人　黒石市　佐藤　古拙
煩悩がピリオドを打つ邪魔をする　和歌山市　福本　英子
終止符を消して続きを書く未練　茨木市　藤井　正雄
離婚印ぶれずに押したのは女　橿原市　居谷真理子
幕降ろすふたりへ雪は降り止まず　奈良県　渡辺　富子
ピリオドを暫し温存する微熱　生駒市　飛永ふりこ
あなたへの想いにピリオドは不要　海南市　小谷　小雪
ピリオドの先に結んでおくリボン　松江市　石橋　芳山
終止符はおあずけ明日があるもので　池田市　栗田　久子
ピリオドは桜吹雪が似合いそう　米子市　政岡未延子
自分史に終止符を打つ流れ星　川西市　西内　朋月
昭和史にピリオド打てぬ戦中派　東大阪市　佐々木満作
ピリオドを打つには数珠が要るらしい　鳥取市　土橋　螢
台本に無い倒産劇で閉じる社史　大阪市　鶴田　遠野
一夜明け潮目選んで仲直り　河内長野市　村上　直樹
陽が沈む今日一日の役終えて　大阪市　川端　一歩
ピリオドのたびにブランコ高く漕ぐ　西宮市　山本　義子
ピリオドを打つには惜しいエピローグ　高槻市　左右田泰雄

秀句

ジャンケンポン弔辞を読むか読まれるか　弘前市　高瀬　霜石
ピリオドを花で飾ってあげましょう　和歌山市　古久保和子
沈んでも明日は朝日となる夕陽　堺市　志田　千代

ピリオドの夢はコスモス日本晴れ　三田市　上垣キヨミ
嫌なことパタンと閉じて雲の上　松山市　神野きっこ
ひとりになりたいただそれだけのこと　三田市　上田ひとみ
見事なる最期計算づくだろう　弘前市　高瀬　霜石
一陣の風がピリオド打ちにくる　藤井寺市　太田扶美代
遠からずピリオドは来る浮き雲よ　尼崎市　春城　年代
ピリオドが打てず片足立ちのまま　大阪市　谷口　義
ピリオドの無いふしくれの母の指　宇部市　高山　清子
ピリオドはぜひ真ん丸に控え目に　豊中市　水野　黒兎
ピリオドのさて出陣の靴を履く　雲南市　菅田かつ子
ピリオドをどこで打つのか独楽鼠　米子市　政岡未延子
打っては消し打っては消しのピリオド　和歌山市　柏原　夕胡
もうみんな忘れましたと北の駅　大阪市　柴本ばっは
幕降ろすふたりへ雪は降り止まず　奈良県　渡辺　富子
肉体はピリオド魂の始まり　八尾市　宮崎シマ子
ピリオドを自ら打つと海が泣く　西宮市　緒方美津子
三人の子がピリオドを飲みこんだ　大阪市　古今堂蕉子
向き合って残るピリオド齧り合う　松山市　高橋　宏臣
目には目を悲しい事を断ち切らん　和歌山市　田中　みね

秀句

家畜車に積まれた豚の生の位置　青森県　松山　芳生
葛藤をしてからのピリオドであり　鳥取県　西谷　悦子
ピリオドの先に結んでおくリボン　松江市　石橋　芳山

『麻生路郎読本』余滴

(6) 河盛家のこと ①

棗原道夫

「麻生路郎物語」(5)は、「河盛仁平噂ばなし」と題して、江戸時代の終わりから明治にかけて堺の豪商であった河盛仁平や葭乃の父の河盛彦三郎のことが、すべて「葭乃書簡」によって綴られている。河盛家のことを調べてみたところ、いくつかの資料が見つかったので、葭乃の文章を引用しながら、その内容を補足していくことにする。

初代河内屋仁兵衛

私の曽祖父は河盛仁平といって、屋号は河内屋という木綿問屋でありました。河盛の姓を名乗るまでは垣崎といったそうですが、なんだか武家筋のような気がするのです。多分明治維新の頃だったから、御家人くずれか、どこかの浪人だったのが、新時代のくるのを見越して侍にみきりをつけ、商家に奉公したのでしょう。これは私の勝手の憶測です。(葭乃書簡)

「葭乃書簡」中の河盛仁平は、河内屋仁兵衛の二代目である。仁平が亡くなったのが明治18年4月20日(月)。その一月後の5月29日(金)から6月6日(土)にかけて、「朝日新聞」に「河盛仁平氏の履歴」が7回に亘って掲載された。「朝日新聞」に記事が掲載されたことは、堺市立中央図書館所蔵の『明治天皇堺行在所御記録(河盛仁平相続人河盛桑次郎手記より寫取)』によって知った。その記事に初代河内屋仁兵衛のことが記されている。各回約2000字の記事だが、7回のうち5回までが、初代仁兵衛に関するものである。「朝日新聞」の記事は、どこまでが事実かわからない部分もあるが、初代仁兵衛についての資料としては最も詳しいので、長く引用しておく。原文には句読点がないが、明らかにそこで文が終わっている箇所に、句点のみ打っておく。読点を打たないのは、当時の新聞記事の文体を味わってもらいたいからである。なお原文は総ルビ付きである。

抑氏(筆者註—二代目仁兵衛のこと)の祖先を原るに足曳の大和國葛上郡名柄村字南里村(筆者註—字南町の誤りだと、6月6日紙上で訂正している)と云ふ處に木綿を以て營業にする島谷安平(通名島安)と云者あり。夫婦の中に五人の男子を有てるが之が末弟に當る德松と呼ハ其性魯鈍と云ふにハあらざれど物の役に立べう思はねば安平平素大に之を憂ひ一日獨思案を巡らすやう彼德松が爲す處を以て考ふるに如何程教育たればとて所詮怜悧の者にハ成るまじく斯れば成長するとても商家の進退なんど思ひもよらず他人は兎まれ角もあれ古語にさへ子を見る父に如ずといふ我眼を以て鑒定たれば今更彼を家に養ひ慫ひなる商人となさんより寧今より剃髪させ一生を佛門に入て終らせんこそ不便に似て不便にあらず却て彼の爲なれと心愛に決せしかば程なく或人の周旋に依り南都東大寺の住職に請ひ遂に徒弟となしたるは卽ち十才の時なりし。さる程に德松は法名を義明と改め其身佛徒に入りたるも己之を欲せざれば自然經文の稽古を嫌ひ日々の勤行を怠り少も法用を勤めざるにぞ住職某大に困じ將來を案じ居る折柄義明偶々病に罹りたるを以て父の許に歸せしが思ひしには似ず輕症にて日あらず本

復したるに付き父安平は東大寺に歸さんと之を促せしに義明は頭を左右に打振り父の命に背きまするは不孝のやうにござりますが私ハ出家になります事を少も好みませぬ故此上のお慈悲にハ何卒私を兄さんのやうに商人にして下さりませ。若此事をお許し下さらば仮令何のやうな辛い状に遭ますとても辛抱し決して否みハ致しませぬと涙チロ〳〵述る状の如何にも不便に聞えければ安平も愛着の羈絆つによしなく元より己の心とても強て出家させんとにハあらず只將來其見込あらざるを以て一旦髪を下させしも今や商人たらん事を只管請て止ざるに就てハ己も之を満足に思ひ遂に東大寺の住職へハよき程に云なし更めて己が始終取引する堺中の町の木綿商河盛利三郎方を頼み丁稚奉公にぞ遣しける。

（「朝日新聞」明治18・5・29）

「葭乃書簡」には〈なんだか武家筋のような気がするのです〉とあるが、大和で木綿を商っていたようだ。朝日新聞6月6日紙上に、〈初代仁平の父島谷安平の祖父に當神阪徳司と云は吉野郡天の川なる辨財天の神官を勤居りし人にて當時故ありて神官を廢め名柄村の内なる字南町へ移住み遂に農に歸したるなり〉とあり、初代仁兵衛の曽祖父は農業をしていたようだ。新聞記事では、初代の名を「仁平」としている。「仁兵衛」であったことは間違いないようだが、「仁平」を名乗っていたかどうかは未詳。また、記事の最後に「河盛利三郎」という名が出てくるが、当時はまだ「河盛」姓を名乗っていず「森川」姓であった。当然、仁兵衛も「河盛」姓ではなかった。いつ「河盛」に改姓したかについては、後で述べる。今しばらく初代仁兵衛についての新聞記事にお付き合い願いたい。

徳松は已より父に請ふて商人たらん事を欲し且性來朴直の者なれば此家へ奉公に來りし以來朝ハ他の者に先んじて臥床を離れ口を淨て神佛を禮拜し夫より家の拭掃除に懃り之を濟したる上は庭に散亂したる主人の履物ハ勿論下男下女の履物に至る迄順を逐て正しく据列ぶるなど大抵家内の人の起出る頃迄にハ小用を終り主人の眼覺す節ハ神妙に手をつかへて挨拶を陳べ夜ハ例も人に後れて臥床に就き奉公を大切に勤る事十有餘年一日も變る事なし。されば主人利三郎も其神妙なる行ひに感じ末頼母しく思に付てハ不便を加る事も亦尋常ならず名を仁平と改め恰も我子の如くに之を勞り十九才になりし春元服をさせ世才に及て永年の勤功に依て格外なる資本を與へ暖簾を別ち家を同町にぞ持せける。是ぞ初代の河盛仁平氏にて其翌年仝所甲斐の町に住む綿谷善平の長女かぢ（廿八年）と云ふを妻に娶り睦間敷暮すに就てハ皆之主人の厚庇と厚情なりと打喜ばざる日とてなく其後ハ自宅に一人の丁稚を召使ひ己ハ主家へ日勤なし商法を是專らに掌り居り。斯て天保元年三月女子を擧之をうのと名け其後天保四年正月元日の朝男子を擧之を新二郎（筆者註―『堺市史 第七巻 別編』によると、二月十五日出生で、名は新次郎。この新次郎が葭乃の曽祖父にあたる）と名けたるが其頃より家に不幸の打續き商法の爲に多分の損失を招き（後略）（「朝日新聞」明治18・5・30）

以前に主人からもらった資本のほとんどを失った仁兵衛は、家財も売り払い、召使いにも暇を出し、主人利三郎と妻には書き置きを遺し、子ども二人を道連れに自殺をしようと、茅渟の海に向かった。ところが、急に腹痛が起こり、一歩も歩けなくなってしまった。これは主人から受けた恩義に報いることなく死のうとする不忠の罪を天が憎みなさったのに違いないと思った仁兵衛は、死ぬことをやめ、僧になって陰ながら主人の家を守ろうと決意した。二人の子どもを連れて家に帰

った仁兵衛は、妻にそのことを話し、二人の子どもと共に大和の実家で世話になるよう説得し、自らは高野山を目指すのだった。夜中に大門に着いた仁兵衛は、次のような夢を見た。

何處とは知らず渺々たる青海原に三艘の大船碇を下せしが夫と見る中彼方の空より數を盡せし金銀珠玉宛ら花を散すが如く船の中へと降下れるが自然と昇る旭に映じ海面を輝かせると見て忽地夢は覺たりけり。（「朝日新聞」明治18・6・3）

息子新次郎が正月元日の太陽の出るときに生まれたことを思い出した仁兵衛は、この夢が我が身の運を開くものではないかと思い、堺へ帰り主人に謝罪して、もう一度がんばってみようと思ったのであった。その途中で、仁兵衛のことを心配した主人が高野山に迎えに行けと送りだした手代とばったり会い、仁兵衛は無事に主人に迎えられた。

程なく實家に預たる妻子を引取り其上先の奇夢に感ずる處あれば幾許かの資本と一艘の所有船を主人より借受け多くの綿糸を仕込て船に搭載れ是を松前に下して賣捌き其金を以て大豆干鰯等を買入れ大坂に積上りて是を賣捌くに二三ヶ年の間一度も損せし事なく例も多の利を占るを以て暫時の中に富豪と稱せらるゝに至り遂にハ寶榮丸（筆者註―榮寶丸の誤りか？）二寶丸とて二艘の手船をさへ航海さすに及びたり。さる程に仁平は是皆主人の厚庇なりと悦ぶに就て又先の夢をも感ずれば大師の德を甚く仰ぎ天保十四年の頃寶榮丸にて得たる利益ハ悉く高野山に寄附し順禮堂（筆者註―準提觀音堂の誤りだと、6月6日紙上で訂正している）を建立せり。此金額千七百餘両なりしとぞ。其後不動坂の不動堂を又一人にて再建したる故を以て世人寶榮丸を高野丸とぞ呼たりける（筆者註―新たに作った信心丸を高野丸と呼んだと、6月6日紙上で訂正している）。斯て弘化二年に至り善寶丸と云ふ千石積の和船を新に造り彌々富豪の名遠近に聞え多の下男下女を召使と雖も只謙遜を是旨とし召使の者たりとも仮にも呼捨せず又召使の者にハ毎夜沐浴をさせ一六の日にハ燒物を据て飯を食すと雖も己ハ毎月三回の沐浴にて專ら疎菜を食ひつゝ日々六文の湯錢と月に六回百文宛の燒物料を一個の箱の内に収て之を蓄へ毎年十二月大晦日の日を以て件の箱を開き困窮の者に施すを例とせり。又弘化三年仝所湊村の茶毘所へ千二百両の金を投じて修繕を施したり。斯て嘉永六年二月の頃長男新二郎を仁平と改め（筆者註―仁兵衛の誤りか？）家名を相續させ大和國葛上郡池の内村梅吟某の長女かい（そのとき十七年）といふを妻に娶り己ハ仁左衛門と改名し隱居の身分となりしが其後安政元年の冬大地震及び大津浪のありて死傷したる者夥敷仁左衛門大に之を憫み大阪の川々にて死たる者の爲に一大施餓鬼の供養を行ひ猶且其亡靈を慰むる爲京都本願寺へ經文讀誦の布施として金千両を納めたり（筆者註―「堺市史 第七巻 別編」によると、二代目仁兵衛がしたこと）。然るに翌年（筆者註―1855年）九月廿七日病に罹り六十二才を一期として無人の數に入りしが其病に罹る日迄主家に出入して主人の機嫌を伺ひ未だ一度も怠りし事あらざりしとぞ。（「朝日新聞」明治18年6月4日）

茲に氏（筆者註―二代目仁兵衛のこと）が平素の行の一二を擧んに祖先仁左衛門ハ義に依って金を捨ると他人の貧困を憐れむ爲にハ更に金錢を吝ざれど我身の爲にハ一厘の錢と雖も濫に費用はず只質素儉約を專に守り玄冬の時といへど火鉢に手を出して暖る事なく若手先の冷て堪難き時ハ両手を揉あせ摩擦の力に依て生じたる温氣を以て火氣にかへてこれを凌ぎしとぞ。されば人々の是を眞似て一時の寒

氣を凌ぐ者ある時ハオゝ河仁火鉢をやつて居るかと評を下すに至りしと云ふ。又仁左衛門の大阪に取引のありて來る時ハ足に草鞋を穿ち茶店にも立寄らず例も三四反の河内縞を脊に負ひ途中にて之を賣捌き其口錢を以て一膳飯屋に立寄正午の食事をなす費用に充て歸る時も又何なり品物を買調へ是を賣捌きつゝ家に歸る抔須臾の間も手を空しうせず。（「朝日新聞」明治18年6月6日）

河盛三家

初代仁兵衛の主人であった河盛利三郎は、当時はまだ「河盛」姓を名乗っていず「森川」姓であった、と前に書いた。そのことについて書かれた文章があるので紹介しておく。

さて、ここで、堺の河内屋一門と河盛家のことについて少し触れさせていただきます。創業者河内屋又兵衛が奉公にあがった河内屋利兵衛は、総本家として河内屋一門を統括し、先に述べましたように、河内木綿を扱う大店を持ち、利兵衛のところから別家独立する際には、木綿販売以外の別の事業につくのが慣わしでありました。河内屋又兵衛は、醤油業につきましたが、同じく利兵衛のところから別家独立した河内屋仁兵衛は、回船問屋を営みました。堺の河内屋一門の中でこの三家は、「暖簾うち」の関係で特に協力しあい、江戸時代末期から明治時代の始めにかけて、堺でたいへん活気のあった商人グループのひとつでした。明治五年（一八七二年）、総本家の旧姓「森川」の字の順番をひっくり返し、さらに漢字自体も、「河内屋」の「河」を使用して、「河盛」姓を創作しました。堺の河内屋一門の人々は、一斉に河盛姓を名乗りました。（「堺の醤油屋　河又・大醤」、河又・大醤株式会社代表取締役社長　河盛幹雄、『フォーラム堺学　第八集』平成14・3）

河盛姓になった経緯は次の通りである。年号が明治と改まり、明治3年10月には苗字使用が許され、新姓や改姓が自由になった。かねがね本家の河内屋利兵衛は、森川姓を名乗っており、河内屋又兵衛は前述のように米田姓であったが、明治4（1871）に本家が「森川」をひっくり返し、河内屋の河を残し、河盛ということに相談がまとまり、二代目・又兵衛も、これに同調した。すでに河利、河仁、河又の河盛三家の墓は、その結束の強さを確認するかのように、京都西本願寺大谷本廟の一角に並んで建てられており、後年これに新しく、「河盛」の新姓を刻んでいる。

そこには、長い歴史を誇る河内屋という屋号への、なみなみならぬ哀惜の情がみられる。二代目・又兵衛が同時に、又平と改名したのは、又兵衛という名前が武士風で、これを旧身分制度の否定から平民風に改めたものであった。（『むらさき　堺の醤油屋　河又・大醤200年のあゆみ』平成12・11・3、河盛幹雄発行）

河盛家一統は、総本家・河盛利兵衛（木綿問屋）を芯に、別家組織を形成して成立し、菩提寺である圓光寺の過去帳などから、源流に近い別家本家が6系統ある。（河盛家名簿、昭和58年12月刊）

（中略）

垣崎姓は、河盛仁兵衛（回船問屋）の系統で、通称河仁と称し、米田は河盛又兵衛（醤油醸造、問屋）の系統で、通称河又と称している。この他、河徳（徳次郎を祖とする）河安（安兵衛を祖とする）河新（新兵衛を祖とする）河勘（勘次郎を祖とする）の4系統があり、これらが総本家からの直接の別家であるか、間接の別家であるかは不明である。

この他、総本家からの別家は数家あり、河源、河定、河卯、河惣、河亀、河和、河治、河松、河嘉、河市などに河盛姓が数名ある

が、その別家の時代、あるいは祖先の氏名などは調査未了である。

河盛姓を名乗っている約500名の人々は、これらの系統のうちのいずれかに属する。仏文学者の河盛好蔵は河安に属する人であった。（同前掲書）

河盛三家の墓。京都西本願寺大谷本廟。

河盛三家の墓が西本願寺大谷本廟にあることを『フォーラム堺学 第八集』で知ったが、大谷本廟の墓所は広大なので、おおよその場所を教えてもらえないか電話で問い合わせたけれども分からなかった。そこで、河又・大醤株式会社社長の河盛幹雄氏にお願いしたところ、貴重な時間を割いて会って下さり、その上、『むらさき 堺の醤油屋 河又・大醤 200年のあゆみ』まで下さった。河又（米田家）の墓の区画番地（14区206号地）を教わった翌日の8月31日、西本願寺大谷本廟に、河盛三家の墓の確認に行った。

左が「垣﨑墓」、真ん中の一際大きい墓が本家で「森川墓」、右が「米田墓」と刻まれている。墓の右側面は三基とも、一行目に「圓光寺門流」、二行目に「泉州堺」とあり、三行目には、左の墓から順に、「垣寄二兵衛」、「森川利兵衛」、「米田又兵衛」と、それぞれの名前が見える。「垣﨑」の「﨑」が「寄」に、「仁兵衛」の「仁」が「二」となっている。「仁」のにんべんが消えたのかと思って触れてみたが、「二」としか読めなかった。左側面には三基とも「明治三庚午年」の文字がある。一番上の台石に、三基とも右からの横書きで「河盛氏」とあり、その右に、縦書きで二行に亘って「明治□年／三月改姓」とあるが、明治何年かが見えない。河盛幹雄氏に確認したところ、「明治五年」で間違いないということだった。

この三基の墓は、本家森川と、別家垣﨑・米田のつながりの深さを示すために明治三年に建立され、明治五年三月に「河盛」に改姓したことを示している。墓の右側面にある「圓光寺」とは、現・堺市堺区甲斐町にある浄土真宗西本願寺派の寺で、本家の菩提寺である。

「葭乃書簡」に、〈河盛の姓を名乗るまでは垣崎といったそうですが、〉とあったが、二代目仁兵衛は、確かに「垣﨑」であったことが、墓の文字からも分かる。前掲の「朝日新聞」の記事によると、初代の姓は島谷で綿谷かぢと結婚、二代目は梅咲かいと結婚した、とある。それでは、なぜ垣崎姓を名乗るようになったのか。初代または二代目が、幼いころに垣﨑の養子になった、再婚相手が垣﨑で養子になった、自ら垣崎姓を名乗った等考えられるが、不明である。

二代目河内屋又兵衛が、明治五年の改姓を機に、河盛又平と改めたが、二代目河内屋仁兵衛も、この時に、河盛仁平と改めたのかもしれない。

畳む

太田　昭選

ストレスを畳むといつかバネになる　泰女
相合傘畳み他人になる二人　(岸)孝子
凶のくじ畳んで枝に結びつけ　公誠
冗談へ本音も少し畳み込む　せつ子
魔女が今翼たたんで僕と住む　修
現実は毒も一緒に畳み込む　美義
暇だから捨てるチラシを折り畳む　准一
店畳み招き猫にも暇を出し　滋彦
娘の晴れ着母広げたり畳んだり　正雄
サムライが胸に畳んだ傷のあと　四郎
しくじった過去がきちんと畳めない　森生
切札をきちんと畳み胸に持つ　敏子
畳んだら小さくなった悩み事　恵美
傘たたむしぐさ一つに出る育ち　(深)千恵子
子の成長思い洗濯物畳む　庸佑
家計簿に畳み込んでる妻の愚痴　弘風
さすが政治家上手に風呂敷を畳む　霜石
押入れに畳み込まれている国旗　堅坊
ぐちゃぐちゃのままの朝刊渡される　(志)千代
畳まれてやっと自我の芽起き上る　東吉
畳む間も無しに諭吉は旅にでる　(奥)五月
大雨に稔った稲穂畳まれる　典子
石だたみ遠近法のまま続く　ばっは
あれこれを胸に畳んでEカップ　みつこ
ジェラシーは小さく胸に畳むもの　扶美代
店畳む明日へ塩をたんと盛る　久仁雄
不景気で父祖伝来の店畳む　(鈴)いさお
ツケの効くところが順に店畳む　正和
情報を胸に畳んで対峙する　裕之
大切な言葉は胸に畳み込む　活恵
わたくしを畳む日までは輝こう　(宮)弥生
作業着を畳むと亡父が現れる　光久
今日も無事終えて感謝の陽を畳む　和郎
畳んだらきれいなあした見えてくる　くにこ
意地を張る心を内に畳めない　玄也
畳むのも着るのも世話になる着物　慕情
畳んだ店を来ない人までくやしがる　忠
佳
翼まで畳んでしまうシーベルト　宏子
辛抱を畳みやがてを咲く蕾　朝子
ポケットに小さく畳んだ恋がある　蕉子
正論は折り目正しく畳まれる　弘一
嫁ぐ娘の着物拡げてまた畳む　一風
人
見栄張った大風呂敷が畳めない　淞丘
地
林住期そろそろ角を畳もうか　留理恵
天

風呂敷の畳み方にも出る気品　**片山かずお**

軸
子も育ち余生に傘を折り畳む

けじめ

齋藤さくら選

寝る時だけとパジャマ姿を叱る妻　遠野
怒るのはやめて笑って納めよう　螢
けじめよりふにゃふにゃが良い時もある　弘風
白黒のけじめがつかぬうちわもめ　一弘
イエスノーはっきり言える子に育て　俶子
優先席けじめ知らない長い脚　正雄
休日も男のけじめ髭を剃る　宏章
二世帯のけじめ忘れた内輪もめ　美千代
二時間も寝坊したので風呂掃除　公誠
禁煙のけじめ千円まで延ばす　かつ子
浮気バレあれからずっと丸坊主　千休
呑んべいの親父のけじめ休肝日　振作
親しくもけじめつけねば壊れ出す　好文
しきたりとけじめが好きで煙たがれ　恵美
けじめがついた今日一日に感謝する　悦男
けじめつけると夫勇んで出かけたが　ミツ子
古希なんてまだ洟垂れと老人会　淳司
いねむりと野次でけじめのない議員　(深)千恵子
けじめつけがらくた全部捨てました　久美子
やかましく言ってもけじめ守らぬ子　光久
黄の線を踏まないように歩道行く　みつこ
けじめなくダラダラ暮らしすみません　勝弘

上に立つ者がけじめを示さねば　(田)章子
冷蔵庫息子の家はよう開けん　公子
どうけじめついたか夫婦の笑い声　恭昌
電車内化粧室ではないのです　ヒデコ
癌告知やっと煙草にけじめつけ　敏子
あと一杯もう一杯と妻の留守　蜂朗
負けは負け謝ってからまた挑む　裕之
けじめにはやはりお金が物をいう　日の出
失敗を詫びる丸刈りだってある　正和
割り勘を通し貸し借りありません　玄也
迷信じゃない厄年というけじめ　敏治
上手く飲む酒のけじめが難しい　森生
禁煙を決めて妻子に誓約書　義雄
今日からは妻に実権奉る　秀四
あっさりとけじめをつけたのは涙　扶美代
　佳
ささやかなけじめ近くに墓地を買う　(石)美恵子
作業衣に替えて働く顔になり　遡行
息子から借用証をくれました　深雪
ひと言で終るけじめが言い出せぬ　一兆
悪酔いの部下がけじめの箍外す　時雄
　人
先生と一歩さがった線がある　(志)千代
　地
へそくりは私の為にだけつかう　弘一
　天
朝昼晩わたしに掛ける浄め塩　**髙瀬霜石**
　軸
金だけで済ますけじめは楽なもの　光久
酔う程に故人の情話してる通夜　勝視
通販のいろいろな果て粗大ゴミ　黒兎
いろいろの色があるから迷いだす　隆盛
酷寒酷暑いろいろ耐える陸奥の人　寒之
何気なくお道具箱に詰めておく　小雪
いろいろとあったのでしょう背の無言　くにこ
あれこれと溜めて金目のものが無い　俶子
幸不幸義理もいろいろのし袋　志華子
さまざまな意志で人形踊りだす　唯教
いろいろな想いを覚ます除夜の鐘　森生
不確かな明日へいろいろ策を練る　(西)悦子
詳細は聞かぬ笑顔を信じよう　留里恵
おでんグツグツ僕は大根狙ってる　慕情
いろいろと言えば誰をも傷つけぬ　(福)洋
白黒黄地球が生んだ肌の色　(志)千代
　佳
定価って何さ毎日五割引き　霜石
いろいろな神が戦を巻きおこし　伊津志
絵文字色々愛がオモチャにされている　千代子
省エネもいろいろあろう冬支度　螢
いろいろな意見集約して力　准一
　人
さくらさくらひとりの人のかたちして　芳生
　地
擬態ですどんな色にも染まります　客山
　天
原発は種々の国から追試受け　**富田美義**
　軸
愚も恥も重ねわたしの虹つかむ　淳

いろいろ

飛永ふりこ選

推敲にいろいろの字句踊り出る　公誠
いろいろな夢の抜け殻抱いて冬　(渡)富子
どの薬効いたことやら生きている　政勝
A型のくせにほんとはズボラです　正和
風ふいて世間の噂色が出る　奮水
十人の色出しあって揉めている　茶子
サプリメントいろいろ飲んで医者通い　振作
いろいろな願い神様どう裁く　庸佑
大津波原発の事故堰止め湖　弘風
地場野菜てんこ盛りした道の駅　淳司
いろいろと難癖つけて値切る市　倫子
いろいろな形やっぱり丸が好き　一粋
開店の向こうは今日で店じまい　獏沓
トラブルをいろいろ生んだ原子炉だ　愁女
いろいろな鳥の囀り聴きわける　雅明
ストレスは細かく砕き全部のむ　日の出
子には子のいろいろあって黙秘権　恭昌
いろいろな仕掛け抱えて出る漁師　孔美子
いろいろのお世話を貰い生かされる　朝子
いろいろも災難だけは躱したい　像山
いろいろとギャップがあって頓挫する　光久
二万五千ラン命名の親がいる　淳

初歩の教室

題 ― マーク

鈴木公弘

今回の出題は皆様にとってノーマークだったのでしょうか？同想・類想の句がたくさんありました。「やはり皆同じようなことを考えるのだな」と納得せず、着眼点を少し変えたり、表現語彙に気をつけたりして、できるだけ「個性みなぎる句」を考えましょう。

【少し手を入れた句】

原 やっととれ若葉マークも新しい　開　子
添 やっととれた若葉マークよありがとう
原 急かせるな初心マークで且つシルバー　篤
添 急かすなよ初心マークのシルバーだ
原 軽口がマークされてる勇み足　(野)宣　子
添 軽口のマークに乗った勇み足
原 古いロゴマークが消えてゆく淋しさ　(株)玲　子
添 古いロゴマークが消える淋しさよ
原 老化度をマークシートで試される　道　子
添 老化度をマークシートに試される
原 世界からマークされてる原発は　秋　星
添 世界からマークされてる原発だ
原 幸せの後姿をマークする　宏　之
添 幸せの後ろ姿をマークする
原 才ある人おこぼれ欲しくマークする　(後)美恵子
添 才ある人のおこぼれほしいマークする
原 出かけるとトイレマークを先ず探し　正　彦
添 出かけたらトイレマークをまず探す
原 健康の幸マーク日々元気　(宮)俊　子
添 健康の幸せマーク付けて生き
原 カレンダー赤いマークの外出日　(山)久　子
添 外出日真っ赤にマークした暦
原 覚えてる次ぎ買う時の目印を　(石)久　子
添 買う順をしっかりマークして帰る
原 星印つけながら今朝ニュース読む　妙　子
添 新聞の星は覚えておく印
原 愛車には若葉枯葉のマーク付き　一　泉
添 若葉枯れ葉のマークに愛車守らせる
原 店員は買いそうな客すぐわかる　憲　彦
添 店員にマークをされている財布
原 サスペンス私のマーク真犯人　智加恵
添 マーク通りの犯人だったサスペンス
原 メールのハート大した意味は無いらしい　利　子
添 無意味と知ってハートメールに気落ちする
原 夜も更けてマーキングする参考書　(高)弥　生
添 参考書うとうと付けるマーキング
原 競走馬マークにしるし目も走る　ミヨノ
添 競走馬マークしている目も走る

【平凡になってしまった句】

ライバルとマークはしたが先越され　加修子
マークした相手のスキをついてやる　雄　太
「…やる」意欲は買いますが、強調しすぎのように感じます。
先ずマーク見てから選ぶブランド品　弘　光
ブランド品と結論付けるとき、マークを見る行為と重なってきます。たとえば「バーゲンのまずはマークを見て選ぶ」
マークされ見事に決めたアスリート　紀　雄
この句の場合、アスリートを見てしまっています。自分がアスリートでなくてはいけません。
ブランドのマークで価格はね上り　こずえ
「ブランドのマークが価格はね上げる」。
あの星座亡母が見ている古希の坂　律　子
「亡母」は「ぼうぼ」と読みますので、中八になります。

【入選】

安い傘マークを付けて可愛がる　堅　坊
スーパーの目玉をマークして走る　ひろ子
ライバルとマークしあって共倒れ　宏　造
実績を上げて次第にマークされ　孝　明
腫れ物と顔に書いてる反抗期　きっこ
好きというマーク瞳にあふれている　ひとみ
ブームです生前墓にマーキング　一　子
「ブームです生前墓をマークする」でもよかったかと思います。
マークされても壁のりこえる底力　武　臣

あのテーブル何度も覗く骨董屋　　のり子
リアリティがあります。
星マークつけて初秋の食べ歩き　　(藤)昭
川柳には季語は不要と言いながら「今」を描けと言われます。したがって、この句の「初秋」は意味があります。
マークした箸の階段踏み外す　　一兆
なでしこはマークされつつ強くなり　　憲
お風呂さえ制御装置へ身をゆだね　　安子
「お風呂さえ制御装置にマークされ」悪餓鬼にマークをされてあっかんべえ　　寒之
一石を投する人をマークする　　(中)章子
キスマーク付けて帰宅の千鳥足　　登美子
誕生日孫の背丈をマークする　　洋一
ネズミ取り前の車をマークせよ　　和幸
「ネズミ捕り」がいいかと思います。
カレンダーにハートのマーク躍ってる　　滋彦
マークした男に酒を注いでいる　　起世子
青春のランドマークは君の家　　志延
マークした方の活躍見る紙面　　治子
良妻のマークは置いてよく遊ぶ　　温子
ベルマークみんなで溜めて愛贈る　　敏治
ネコマーク母が達者の旬野菜　　エミ
マークして追いつくように努力する　　美紗子
蚊にマーク刺されてかゆい若い肌　　弘泰
「マーク蚊に刺されてかゆい若い肌」…「若い」の要不要を考えてみましたが、蚊の気持ちになれば、やはり「若い肌」でしょうね。
ノーマーク本命よそに勝ち上がる　　英男
ツアーでは同じマークの後につく　　眞砂子
躓いた石にマークをつけておく　　幹子
ライバルの入選甘かったマーク　　淑子
ギャル語聞きはてなマークがせめぎあう　　ふみ子
付けた丸想い出せないカレンダー　　ちづる
手術前乳房にマークされる妻　　義雄
生き返る新鶴マーク空にかけ　　勝治

【佳　句】

電柱に犬の沽券のしみがある　　真澄
のっぽだと何処へ行くにもマークされ　　(田)紀美恵
わたくしをぴったりマーク影法師　　則彦
相合傘マーク残して散った夢　　孔一
前に出た時からマークされていた　　久美子
シュレッダー裏のマークに気が咎め　　(畑)節子
罰ゲーム顔にマークがまた一つ　　裕美
入社式早くも彼女マークする　　松風
いい奴と知ってマークを止めにする　　勝
マークした弱みでずっと従いてゆく　　孝代

【今月の推せん句】

可も不可もなくてマークをされもせず　　**酒井　真由**

最前列や頂上に立ちたい人が多い世にあって、これぞ穏やかな人生。みんな生きることに精いっぱいですが、なぜ等しく死ぬことを考えないのでしょうか。あの世とやらに持って行けるものがありましょうや。すべてが浮世の鳥獣戯画。私たちもその絵の中にいます。しかし、互いを信じて争うことなく、謙虚にやさしく正々堂々と「いのち」を燃やし続けましょう。

日記帳恙無い日の晴れマーク　　**福井　菜摘**

この爽やかさには心が洗われます。この方は、きっと良い人だと思います。前向いて生きる人の作品に触れると、自分の愚かさが湖面いっぱいに浮き上がってきます。ですから私は、技巧にはしって本当らしく描くベテランより、この教室の人々が好きなのです。

落款を押せる人生だったかい　　**森吉留里恵**

信念を持って微動だにせずに己を通す…簡単なようで最も難しい生き方です。完璧はありえずとも、自分と向き合って恥じない生涯でありたい！私もそう思っています。

【私の句】

傷痕をマークするひと大嫌い
上向いていないか眼マークする
（登載漏れの方は役員が添削して返却します）
良い年をお迎えください。

秀句鑑賞

同人吟　藤村亜成

―11月号から

亡父、高鷲亜鈍（平成元年没）が路郎川柳との出会いがあって、昭和三六年、現代川柳の方向を示す柳論「詩川柳考」を発表、その後従来の川柳の三要素（穿ち、軽み、ユーモア）に変わる現代川柳の三要素として３Ｌ「愛（ＬＯＶＥ）・生（ＬＩＦＥ）・住（ＬＩＶＥ）」を提唱する。私の所属する川柳ねやがわの会では、今もその実践句を目指し現在に至っている。今回同人吟鑑賞の機会を得ることで、少なくとも川柳塔誌の同人の作品においては明らかに従来の川柳の三要素に捉われぬ自由な発想の句の多いことが判り意を強くした。さて今回の鑑賞では限られたスペース故、割愛した句も多いが可能な限り取り上げた。その分短評に終始してしまったことをお断りしたい。

インク色の闇をさ迷う銀のペン

木本　朱夏

深い思考に陥り揺らぐ闇。インク色と銀色のペンで創作に耽る作者の様子が鮮やかに浮かび上がる。

許すことばかりで海は涸れていく

久保田千代

そう、いくら慈愛が深く大きくとも許容には限界がある。時には拒否することも必要です。

自信たっぷり満水の琵琶湖

高島　啓子

四季折々に表情を変える湖面。時には涸れることもあろう。いっぱいに水を湛えた琵琶湖に作者の安堵感のようなものが窺える。

誰に見しょとて卒寿の鏡

春城　年代

ふと思う。なんでこの歳になっても化粧するのかと。美しく見せたい女性の性が微笑ましい。

祈り続ける私がわたしであるように

松本　文子

醜悪な情報の氾濫と虚飾に満ちた世界、人間関係の練れや悩み、ともすれば見失いそうな自分。ああ神さま私に強い意志と信念をお与えください。悲痛な願い。

子に見せる背中アイロンかけておく

伊達　郁夫

後ろ姿、特に父親の場合、子に対しいつもしゃきっとしていたい。実に巧い言葉を持ってきて心情を表現している。

何時だって心の駅に亡母が居る

大内　朝子

思い出のレールを辿れば瞬時に亡母に逢える。駅名を「恋慕」と名付けよう。母親を想う作者の深い愛情がこの句に込められている。

お酒って悲しい時も飲めるんですね

寺川　弘一

うらやましい方だ、と一旦思ったけど作者を知る私には、安易に受け取れない。騙されてはいけない、ひょっとしたら自虐かも、と考えるとなんだか深い意味合いを持って来る。読者はどう思われます？

蚊よ許せキミの嘴許せない

福西　茶子

僕の都合で草の命をむしり取る

西川　和子

どちらも、底に生き物に対する愛しみの情

があり、前者は擬人法を用いそこはかとなくユーモアを醸し、後者は「むしり取る」で人間のエゴを鋭く穿つ。

いい仲間バックアップを忘れない
山崎　武彦

僕などバックアップを忘れ何度もひどい目に合っている。コンピューター用語を用い仲間を大切にする気持ちをユニークに表現。

横にいる人が一番わからない
前田　孝子

横にいる人、身近な人、夫、妻、子供そうなんだよね、判ってるようで、もっと言えば自分自身が一番わからない。

残された沈殿物はさみしんぼ
石橋　芳山

沈殿物は消化不純物。不満、鬱憤、要はストレス。淋しさの裏返しともいえる。

不器用な老父は愉快な釘を打つ
大石あすなろ

不器用と愉快で、豪放磊落な老父の人物像が見えてくる。何とも微笑ましい家族の風景である。

おぼろなる月に悪人美しい
井上　勝視

ぼんやりとした月夜に映るのは、悪人に相応しい。惟それだけだが、作者の持つイメージ感覚に惹かれる。

夕焼けが海の鱗を紡ぎだす
福士　慕情

静かな海のさざ波に夕焼ける陽が反射する美しい情景を、中七、下五で見事に描写。芸術的な表現は寧ろ俳句に近い。柳俳の接点は短詩的な観点から希薄になってるようだが。

これからの歳は束ねて神棚に
川端　一歩

どの風の色にも溶けて老いてゆく
榎本日の出

前者は定年を迎えた初老の諦観か、後者はその後齢を重ね丸くなってゆく老境か、両者に共通する悟りのような境地。

執刀医神よ仏よ後光さす
愛燦燦　病魔の妻にふりそそぐ
山室　光弘

敢えて二作取り上げた。夫妻のガンとの壮絶な闘い。一連の句から妻が無事手術を終え成功した感動が、理屈なしにひしひしと伝わってくる。実感句ならではの作品だ。

大病を抱き本気で生きている
増井ヨシ枝

前作もそうだが生死の境にあってこそ生かされている事の真実の意味が体感できるのであろう。健常者は、なかなかそのような境地になれない。

こころ模様が急に変って花屋まで
鴨谷瑠美子

女性の繊細で、移り気な心理が表れていて面白い。ちょっとした切っ掛けで、鬱から躁に、好きな人から電話でも、あるいは喧嘩の仲直り?

あり余る自由に溺れそうになる
森　茜

「制限のない自由は放縦であり自由のない制限は奴隷である」とは誰が言った言葉か忘れたが、何とも人間とは難儀な生き物だ。この句のように制約のない満喫した自由の中では逆に、生き方や方針を見失いそうになる。

ポツネンと独りブログ散歩する
高杉　千歩

パソコンの中で他人のブログを散策する孤独な現代人の姿をこの句は映し出している。ディスプレイ画面に向き合う現代人の日常から、じかに触れ合う人間同志の温もりが損なわれていく様な危機感を覚える。

信念が揺らぐことなし怒り肩
山口　光久

怒り肩に、作者の強い意志が込められていて力強い。

紙数が尽きた。残念だが筆を置く。

秀句鑑賞

―水煙抄

―11月号から

伊達郁夫

落ち込めば自分に熱いエールする

今井万紗子

落ち込んでしまう一日。そんな時、自分自身を鼓舞する勇気と自覚。そんな前向きな姿勢に感動をおぼえる元気いっぱいの句です。

いくさ下手右を掴んだまま老いる

中前幸子

いつか勝ってやると、礫を握り締めて構えていたが、もう老いてしまった。その無念さとその我慢の時間の長さがひしひしと感じます。

ポケットの初心ときどき陽にさらす

福井菜摘

初心はいつもポケットに忍ばせている。でも、すぐ忘れてしまう。時々陽にさらして初心に帰りたいものです。実感として共感します。

介護の手心の窓を徐々に開け

田中由美子

介護する側、される側の心の機微は至難ですね。急がず相手の心を温かく見守る愛情が介護の真髄ですね。

迷ったら鏡の前に立ってみる

辻内次根

迷い抜いたら、鏡に自分を写して自分の環境・立場・姿勢・表情・思考をじっくり眺めて見る。きっと、答えが写っています。すばらしい発想ですね。

腐ったらやっぱり鯛も捨てられる

大久保真澄

いくら鯛でも腐ったら捨てられる運命にあるのですね。鯛という肩書きはいつまでも光り輝くことは出来ないのですね。

幸せはずっと普通の日が続く

花岡順子

聞いたことがあるような句ですが、やはり共感を呼ぶ句ですね。平凡で、ごく普通の日が続く幸せに気づくことに共感します。

三連休今日は何の日でもいいか

助川和美

同感です。老いると暦になんと連休の多いことか、連休は閉じこもることが良策と考えるようになりました。まして、何の記念日かわからなくなりましたね。私も。

仏壇の花キッチンにお裾分け

石田ひろ子

仏壇に花を切らさぬ温かい心が、そっとキッチン、玄関に分けて飾る作者の心の機微にじーんとさせられます。

ネジひとつ抜けているから生きやすい

針生和代

歳と共に、ネジが緩み、抜けていく。それを自覚することにより、構えの姿勢から余裕の姿勢になれる。素晴らしい余生です。

これでいい思わないけど変われない

渡辺芳子

何とかしなくてはと、焦ってみても何にも変れないジレンマ。人生はその葛藤の連続ですね。どこで達観するかが問題ですね。私も同じジレンマを下げて生きています。

人の名が思い出せずに話題変え

山根妙子

ぽんと膝を叩いてしまいました。そうなんです。お互いが人の名が出てこずに、なんとなく諦めて話題を変えるのです。誰も経験する妙味のあるブラックユーモアそのものです。

幸せになろう一コマの残像

白川淑子

あの一コマのドラマが、今から振り返ると私の珠玉だったのだと気づく。そのドラマの一コマをいつも胸に留めて生きていく。奥の深い穿ちの効いた素晴らしい句だと思います。

12 共選は、おもしろい

選者一人の「単独選」の場合、発表されるのは入選した句だけであり、どのような句が没にされたのか知ることはできません。しかし、複数の選者が同じ句を選ぶ「共選」では、入選句を読み比べることによって、没にした句の一部（どちらかが抜いている句）が分かります。共選のおもしろさはいろいろありますが、いちばん興味深いのはこの点でしょう。

大会での共選は二人選がほとんどですが、誌上大会では一つの課題を四人とか五人で選をすることも珍しくはありません。ただ、ここでは分かりやすい二人選で話を進めます。

私の経験では、投句数が二百句ほどで、入選四十句と決められた場合、ダブル入選（選者二人共が抜いた句）の率はだいたい二割から三割弱でした。すなわち、ダブル入選は十二句足らずで、残りの二十八句ほどは、片方の選者しか抜いていないことになります。もちろん、この率は共選する相手によってかなり違ってきますが、川柳観が似ている相手であっても、ダブル入選が五割以上になることは稀です。

また、投句数が増えると、ダブル入選が減るのも当然です。本誌の「檸檬抄」は、男女二人による共選ですが、投句数は毎月七百句を超えますので、入選枠は六十句と多い目に取ってはいますが、ダブル入選は十句そこそこです。

このように、選句結果を読み比べることができるのが、共選の特徴であり、投句者としては興味深く勉強にもなるのですが、選者にとっては少々つらいものがあります。

冒頭にも書きましたが、単独選では、没の句は発表されませんから、没句を取り上げて批判を受けることはありません。しかし、共選では、A選者とB選者の入選句を読み比べることによって、「Aさんはこんな良い句を落としている」という批判の目に晒されることは大いにあり得ます。すなわち、共選は選句の力量（選句力）を比較される場でもあります。

しかし、良い句か良くない句かという判断は、個人の川柳観や価値観の違いによって大いに異なります。また、ほとんどの大会では入選句数を指定されていますので、同程度のレベルの句が並んだとき、どれかを没にしなければならないケースがあります。その句が共選相手の入選になっていた場合など「やっぱりな…」と、忸怩たる思いがするものです。

このように、「川柳観の違い」「判断の違い」のおもしろさが表われるようにしたのが共選というシステムですから、選者としては、「違っていて大いに結構！」と開き直らなければとても務まりません。投句者としては「どちらかの選者に入るかも」という気楽さで取り組みやすい共選も、選者にとっては試練の場であり、また、貴重な勉強の機会でもあります。

さて、川柳塔社では、恒例になっている秋の「川柳塔まつり」に続きまして、春に「川柳塔まつり誌上大会」を実施することになりました。すでに応募用紙がお手元に届いていると思います。また、今月号の本誌にも広告が出ています。この誌上大会は、大会に出席しにくい方々も気軽に応募できます。また「川柳塔まつり」と同じように、どなたでも応募できます。まだご存知でない方々には声をかけていただきまして、揃ってご参加いただきますようお願い申し上げます。

本社十一月句会

十一月七日（月）午後一時
アウィーナ大阪

紅葉前線の南下や、山々からは初冠雪の便りなど、日本列島に秋の深まりが急ピッチで進む中、十一月句会は106名（投句4名）の参加で開催された。初参加は八尾市の秋田あかりさん、神戸市の山﨑武彦さんの2名。

句会に先立ち、先ごろ亡くなった同人、臼井二英、持田多輝子の両氏へ黙祷を捧げた。

今月のお話は、あかつき川柳会の岩佐ダン吉さん。「手と足を……の一句は古いか」と題して、昭和初期の軍国主義時代に川柳を通して反戦活動を繰り広げ、治安維持法違反で検挙され獄死した鶴彬の代表句「手と足をもいだ丸太にして返へし」が、いまの時代でも決して古くはないと、インド洋の海自による給油活動、イラク戦への派兵、南スーダンへの陸自派遣などを例に挙げながら、熱っぽく話された。（いさお記）

月間賞は堺市の柿花和夫さん。

（司会―美籠・善純）（脇取り―賢子・蕉子）（受付―冨子・寿子）（清記―勝弘）

席題「しかし」　大内　朝子選

しかしまあ御難続きのうさぎ年　直樹
しかしですなんでこの句を没にする　弘一
それにしても天の機嫌が悪すぎる　㈱千恵子
謝っていても反省していない　㈲千代
厚化粧しかし小皺は隠せない　いさお
四角いりんごしかしやっぱり丸が好き　りこ
服はセレブしかし心は冷えている　隆彦
よく笑うしかし泣くのも早い酒　時雄
何事もしかしと小骨多い人　耕治
奥様に弱くて外で威張ってる　賢子
姑の思いわかるけれども譲れない　葉子
熱弁はよいけどしかし的がない　いくひろ
捨てる気で出したがしかしやめました　耕治
あの人のしかしが会議混ぜ返す　淳司
街が好きしかし田舎も捨て難い　完司
同意したあとでしかしの悪い癖　好
逢いたいがしかし逢ってはならぬ人　冨美子
しかしながらあんたの態度でかすぎる　たもつ
退院はしたがやる気が出てこない　㈲千代
しかしから続く話が長過ぎる　希久子
ユニクロで埋めてネクタイだけグッチ　修
妻と子にボクのしかしは無視される　真理子
イケメンで独身しかし銭が無い　いさお
しかしやであんたは妻子あるんやろ　勝弘
承諾はしたが納得までいかぬ　美籠
根は真面目しかしすらすら嘘が出る　武彦
紫外線で癒える病気もあるのです　ばっは
原発は廃止しかしは要りません　ダン吉
入学は出来たしかし卒業むつかしい　美智代
元気やわしかし動かん妻である　善純
朱に染まる余白残しているしかし　柳弘
商売繁昌しかし内輪は火の車　俶子

佳

賛成の言葉の蔭にいるしかし　蕉子
酔いつぶれなぞ放って帰ろかしかしなあ　茂
お別れの手紙の追伸が長い　冨美子
しかしあなたはどなたといつも老母は言う　楓楽
返事するしかし本音は避けている　公誠

人

口下手だしかし誠意は見てとれる　時雄

地

無位無冠しかし優しい妻がいる　集一

天

後二ヶ月しかし一年早いなあ　善純

軸

取り敢えず聞いてしかしの自己主張

兼題「牛乳」　江島谷勝弘選

牛乳をおかわりをして丈夫な子　雅明
牛乳を残しみごとな菓子ができ　幸泉
産んだけど牛のお乳で育った子　理恵
牛乳を飲ませた母の口車　善純

牛乳がサプリメントのおばあちゃん　集一
裏表ない牛乳のあたたかさ　ばっは
ゴロゴロとお腹にカミナリが入る　冴子
牛乳もあえて東北産選ぶ　一歩
乳張ったまま置き去りにされた牛　哲子
牛乳の凄さ知ってるコッペパン　千里
シューベルト聴かせた美味しミルクだよ　俶子
共稼ぎパパも手慣れた哺乳瓶　正雄
ミルク飲んだらあんなにデカくなれるのか　葉子
哺乳瓶見せたら猫がとんでくる　靖鬼
休肝日猪口で牛乳舐めている　弘一
縮まないように牛乳欠かさない　隆彦
恋に遠く牛乳ばかり飲んでいる　㊟千代
牛乳がうまいと思う二日酔い　一歩
深酒に牛乳だけの朝ごはん　好
牛乳を熱燗で飲む休肝日　いさお
牛乳もお酒も冷の方が好き　まつお
牛乳で大きくなって酒を飲む　紀雄
牛乳で乾杯をする秋の駅　義
牛乳がまだ安いのでホッとする　朱夏
牛乳に歓声あげた給食日　美籠
期限切れ牛乳風呂で潤う肌　靖博
張り込みの刑事に届くパンミルク　正雄
妹に越されぬように飲むミルク　葉子
牛乳のパワーを知った骨密度　まつお
奥様は牛乳風呂で若返る　弘風

女はビール男はミルク飲んでいる　希久子
周平とホットミルクであたたまる　朝子
佳
牛乳はとても大事な便秘薬　光久
牛乳で育った孫は元気です　准一
牛乳を噛んで飲めよと無理をいう　克己
牛乳はわたしの力飲んでおく　月子
牛乳を搾る体験子が弾む　朝子
人
まだプーンと牛の匂いのするおちち　ばっは
地
牛乳が泣くシーベルトが泣かした　寿之
天
ガチャガチャと朝を配った牛乳屋　寿之
軸
牛乳も個人差があります効き目　たもつ

兼題　「女々しい」　太田扶美代選

拳で涙拭いて男は立ち上がる　美籠
女女しさを三面鏡に諭される　正雄
女々しさはご法度なりと寡婦健気　武彦
女々しさを溶かす夕陽が眩しすぎ　月子
すぐ涙出すのでドラマやめておく　みつ子
過去を追う女々しいことと知りながら　葉子
女女しいと叱った明治の父である　りこ
貸した百円未だに覚えてる私　なべんもお酒のことを医者に聞く　耕治
女女しさと男らしさの二重奏　いさお
女女しいぞと背中押したらこけはった　哲子
女々しい男雄々しい女増えている　㊦千恵子
雄々しくはないが女々しいこともない　公誠
過ぎ去ったことにうじうじする夫　則彦
大国が小さい島を取りに来る　紀雄
女女しさを脱皮青空澄み渡る　朝子
ハンケチを渡され男涙拭く　㊄千代
草食系のボクは女女しいのでしょうか　いさお
女女しいから恋はなかなか終らない　善純
アルバムを見たら女女しい悪い癖　善純
お別れのテープ放さぬ宝物　なぎさ
言い訳を重ね女々しい貌になり　美代子
女々しいと言われてムキになる若さ　准一
女女しいとは言わないで愛妻家です　㊟千代
妻逝って女々しい自分腹を立て　舞夢
女女しさを売り物にする節がある　義
女女しいぞ正直になれ小沢さん　勝弘
大の男が爪を噛むのはやめなさい　保州
亡妻を恋う女々しいと言われても　楓楽
何時までも逃げた魚の事ばかり　弘風
女々しさをときどき武器に使ってます　義子
男まさり女女しいことは嫌いです　能子
佳
女女しくては生きられなかった終戦後　求芽

ケータイに女女しいほどのストラップ　瑠美子
実は僕女女しい奴と思ってる　勝弘
落ち込むと最低十日は寝込んでる　玄也
濡れ落葉などと言わせぬ二度の職　賢子
人
二代目の女女しさ睨む鬼瓦　一風
地
死ぬ時も一緒だなんて甘えるな　ばっは
天
パッと割り切るDNAが欠けている　かずお
軸
やさしさを女々しいなどと言う勿れ

兼題「茹でる」　西内　朋月選

老骨をぬる目の風呂で茹で上げる　完司
湯けむりで無口な人と茹であがる　ばっは
固茹でにしたい男と住んでいる　朝子
焼酎をそば湯で割ったまろやかさ　堅坊
下茹でをしてからついた嘘でした　義
熱燗で脳もこころも丸く茹で　公誠
万策も尽きてほうれん草茹でる　義
茹で加減母の勘には歯がたたず　寿子
茹でたての顔が出てくる「ゆ」ののれん　真理子
茹であげた蟹の甲羅のごとく酔う　黒兎
くたくたになるまで茹でる介護食　あかり
コトコトと茹でた愛です召し上がれ　和夫
長生きの作り話を茹でている　完次
茹で方の温度時間にシェフの技　かずお
茹ですぎたパスタの訳はあの電話　まつお
心配の種も茹でれば灰汁が抜け　宣子
小松菜とあなたの小言茹であげる　ふりこ
煮え切らぬボクをワイフが茹であげる　光久
何となく幸せになるゆで卵　(神)千恵子
悪人を茹でると毒が浮いてくる　いくひろ
スパゲティ茹でてる時に鳴る電話　見清
殻のむけ具合占う茹で卵　(久)千代
茹でられた顔でおでん屋梯子する　一風
茹であげたサヌキうどんの粘り腰　弘風
祭りの灯男一匹茹で上がる　完次
茹でだこになるまで入る美人の湯　保州
釜茹でにされる憶えは蛸にない　克己
五つ子を風呂に入れたらパパはタコ　茂
茹で蛸の親父の似合うあっぱっぱ　哲夫
ぐたぐたと原子炉をまだ茹で続け　時雄
釜茹でにしたいライバル一人いる　集一
茹ですぎにラー油一滴きかせとく　葉子
佳
恨むなら漁師恨めと蛸茹でる　完司
茹でたての言葉つるつる掴めない　公誠
フニャフニャの男だ茹でてみてやろう　かずお
釜茹では五右衛門よりも太い麺　敏治
ばあちゃんもしっかり茹だる美人の湯　俶子
人
茹ですぎて焦点ぼけてきたブラン　見清
地
長々と真っ赤な嘘を茹で上げる　寿之
天
世の中を茹でると苦い味がする　いくひろ
軸
徹マンの疲れを茹でるサウナ風呂

「薬」　河内　月子選

長過ぎる包帯多過ぎる薬　希久子
一割負担になって複雑薬代　賢子
脳トレを兼ねて薬の仕分けする　柳伸
褒められると治ってしまう肩の凝り　冨美子
症状を言うたび増えてゆく薬　誠一
偉そうな口ききはるが薬漬け　玄也
薬よりサプリメントに頼る彼　なぎさ
薬代と思って通う趣味の会　和夫
医者いらず庭にアロエも十薬も　紀乃
おでこにも赤チンつけていた昭和　淳司
にこにこと薬ならべてはる食後　ダン吉
そこまでが薬そこから恐い酒　修
食間の薬時どき忘れます　美智代
デザートに血圧下げる薬飲む　弘風
捨てたものではない薬草にある効果　寿子
一割でたんとお薬くれはった　美代子

おはじきのように並べて薬飲む　かずお
お守りは財布の中にあるニトロ　耕治
虫食いの葉が勲章の無農薬　直樹
百一歳薬頼らず生きて来た　舞夢
十薬を育てる老母と抜く私　りこ
野菜ジュース薬みたいにファイトわく　ふりこ
お薬で治しましょうにほっとする　耕治
落ち込んだ時の薬は般若湯　公誠
良くなったらしいな薬忘れてる　かずお
忠告が漢方薬のように効き　好
薬のむことは忘れたことがない　蘭幸
ノンアルコールではお薬になりません　弘一
父の樹が薬目標高くする　㈼弥生
百薬の長と仲よくして達者　一風
薬のむただそれだけが仕事です　千里
薬不用上手に眠るのが取り得　わこ
佳
酒二合この世愉快にする薬　完司
テキメンに効く現金という薬　保州
全没は時どき貰う薬です　勝弘
薬づけ時限爆弾だいて生き　日の出
客がいる買いたい薬またにする　見清
人
元気になりました薬をやめてから　楓楽
地
百楽の長も時には毒を出す　りこ

天
ライバルに薬の数で勝っている　玄也
軸
命乞いするよう薬きっちりと

「野　暮」　小島　蘭幸選

野暮なこと言いたくないが見ておれぬ　能子
野暮ったいままの変らぬ君が好き　賢子
土の匂い付けたまんまで喜寿が過ぎ　堅坊
お月さま野暮は承知でプロポーズ　美代子
どことなく野暮なお方で好きになる　ばっは
野暮でいい僕には僕の処世術　武彦
ラーメン屋へ行く野暮ったいデート　瑠美子
鷹揚で野暮なところに惚れました　好
来年の順位を予想虎ファン　忠昭
野暮だけどやさしく強い人でした　舞夢
野暮天の愛はいつでもストレート　あかり
サラダになってかぼちゃ野暮とは言わせない　希久子
野暮天はさすが物怖じせぬくしゃみ　則彦
4番のスクイズ野暮とは言わせない　求芽
野暮だっていいじゃあないかもてるなら　敏治
泥を這い無骨に守る千枚田　富子
飲み屋での話を友が妻にする　シマ子
連れ合いが空気だなんて野暮なこと　瑠美子
放っとけばだんだん野暮な国になる　一歩
ステテコの父前掛けの母が好き　保州

身形は野暮でも心はおしゃれです　満作
飲む店をセットしたのに野暮な人　紀子
野暮ったい男で仲間よけいいる　ダン吉
野暮なこと言わぬ主人に羽根がある　なぎさ
継ぎはぎのパンツを野暮という昭和　直樹
ジーパンの穴野暮と言わせてくれますか　弘一
大声であんたは野暮と言うてやる　理恵
野暮ですと将軍様に言えもせず　時雄
ブランドを着てももっちゃりしてる僕　寿之
オレ流は変えぬ野暮だと言われても　いさお
野暮な杖はずして妻と腕を組む　りこ
笑われてもいいの寒がりなんだから　㈼千代
佳
野暮ったいけれど形に包まれる　なぎさ
締め付けは野暮ですゆるキャラの時代　冨美子
飲み過ぎに注意せよなど聞き飽きた　完司
鋭さと野暮コロンボは光ってた　冴子
ワインが出て野暮な話は止めにする　見清
人
王様も秋には野暮な夢を見る　完次
地
野暮ったい夫の三歩前歩く　りこ
天

わたくしに気付かぬ人はみんな野暮　柿花和夫

軸
亡父は野暮だったと思う雨が降る

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。編集部

川柳塔すみよし(大阪)(前月分)　岩崎　公誠報

しっとりと話す言葉が胸を打つ　裕之
心地よい汗を流して一万歩　和代
工夫してゴーヤのすだれ二階まで　光夫
段取りと工夫重ねて床の中　吉太郎
湿っぽい話を変える笑い声　かりん
ぬれ前餅だから湿っているのです　まつお
嬉しいとなかなかノーと言えません　芳香
残りもの妻の工夫で生きかえる　(奥)五月
あかんことあかんと言える人ええな　美世子
なるほどと気付いた時は他人の後　妙子
真剣に工夫したのに見破られ　舞夢
賽銭箱一円玉の軽い音　桃花
度肝抜く母の工夫で蘇生する　半銭
しめっぽい話はあるがみんな過去　日の出
干からびた心湿らす赤とんぼ　崩
お賽銭隣の人は音がせぬ　克博
迷いつつ心を込めて言ったNO　りつえ
戦時中に工夫工夫で生きてきた　のん子
百歳越え湿っぽくない弔問者　定子
禁酒禁煙これで夫を駄目にした　ばっは
雑談の中で拾っている工夫　太郎
その昔彼の口笛待ったもの　シマ子
NOメイクどこのお方と尋ねられ　温子
イエスノーはっきり過ぎて損をする　たかこ
あきらめずあきらめないでと励まされ　篤子
仲間から不協和音が出て慌て　庸佑
あたり前の暮しに感謝忘れずに　直子
好調のバロメーターは酒の量　一歩
苦労などないのに頭真っ白け　勝弘
一工夫過ぎて自分の首を絞め　昌紀
イエスともノーとも下駄を預けられ　蕉子
責任のない雑音が邪魔をする　公誠
一癖へ工夫しているお付合い　遠野

川柳大阪(前月分)　長井　善純報

ロボットも進化をすればウツになる　一歩
人間の進化が地球壊してる　芳香
進化するIT機器に銭食われ　堅坊
被災地の進化見守る絆あり　かよこ
めざましい進化だ妻の変化球　まつお
今一歩もう二歩と力わく　ゆめこ
退職後進化ゼロとは恥かしい　喜楽
ショックには強い男の進化論　柳弘
恋女房口だけ進化する恐怖　万紗子
人類の傲慢自然怒りだす　川童
端だから節電クーラー効きにくい　照月
変人ですだからどうだと生きている　功
何べんもあれだけ念を押したのに　勝弘
会話ないだからケンカも忘れてる　八重子
先生の腰低くなる選挙前　いつふみ
嬉しいのだから一本付けたげる　柳昌
だから今精いっぱいに生きて行く　すがお
だからって急に手のひら返せない　朝子
六十路坂愛と金庫の鍵は別　彦太
暑い夏いかに節電それが鍵　珠生
タイガース優勝の鍵真弓さん　紀雄
心の鍵開けてあげたい被災の子　美世子
復興へ大きな鍵を持つ絆　義明
鍵かけて夢を見てます小宇宙　一風
最後の鍵やはり優しさなんだろう　ダン吉
新しい鍵でスタートする夫婦　笑風
何かにつけ妻が鍵を握ってる　善純

京都塔の会(前月分)　都倉　求芽報

欲張りはどんな音かと作曲家　ますお
孫も年頃仏壇拝みすぐ帰る　篤子
自と公の補助輪ほしいか民主党　昭
被災者の供養で泣いた大文字　文代
すっぴんの鏡のわたし超怖い　朝子
跳ね返るわが足音にある恐怖　欣之
自然からしっぺ返しの次は何　宏子
広くあいてる恐そうな人の横　啓子
妻の名を呼び間違える日が怖い　則彦
あがくほど深みに嵌る蟻地獄　庸佑
あがく子に今が大事と言い聞かす　綾子
あがいたらあかんひとまず深呼吸　ふりこ
悪あがきします締切五分前　益子
夢の中でもてあそばれる猫じゃらし　義昭
暮らし向きあがいたことも遠い日々　輝美
あがいても放射能にはかなわない　満子
あがくこと止めて融通無碍に生き　弘之
天と地の狭間で足掻く僕がいる　美義
ロボットのあがきをいつか見てやろう　求芽
あがいてもアカンと知って寝ることに　かずお
再会を約す握手の熱いこと　英旺

ホームスティ身についてくる英会話　肇
会社での顔はカバンに入れ帰る　福子
再会のひとしき眼鏡かけかえる　葉子
念仏会風も香華の匂いする　比ろ志
再会へゆっくり溶かす角砂糖　昌乃
ワタクシのお葬式です下見会　公子

川柳さんだ(兵庫)(前月分)　堀　正和報

物忘れ茗荷のせいにしておこう　順子
家庭内丸ごと見せるおままごと　宣子
この子こそと賭けたつもりが妻に似る　雄太郎
三十年いろんな私乗せた皿　ちあき
地産地消三田青磁の皿に盛る　晃
病から解き放されて逝く宇宙　一子
骨董品私に幾ら賭けますか　喜代子
赫灼と人徳積んだ柳友が逝く　キヨミ
適当に放っとかれてるから元気　淑子
釣り上げた魚に餌を惜しむ夫　好文
明日に賭けもう振り向かぬ顔になる　紀乃
平凡な暮しに賭けてきた命　茂山
腕磨きプラス思考で日々新た　雅司
戦時には松茸食べて腹の足し　一泉
宝くじ私の夢を賭けてみる　裕美
真実はいつも哀しい物語　ひとみ
節電の日本が光る宇宙から　章子
皿割ったくらいで承知しない妻　忠
五十年賞味期限のない夫婦　哲男
竜巻に注意どうすりゃいいのです　正和

川柳塔さかい(大阪)　村上　玄也報

一言を飲み込み角を立てぬ義理　像山
忘れっぽくなってしょっちゅう義理を欠き　かりん
不義理したふるさとでした無人駅　ばっは
表彰され義理の親戚急にふえ　隆男
また不義理してモヤモヤがなおらない　月子
とことんは詰めやさしさ仇となり　誠一
息詰めて星のささやき聴いている　みつこ
泣きながら砂を詰めてる甲子園　愿
息詰めて検査結果を待つ廊下　朋月
問い詰められてポロリ本音を吐いた貝　俶子
詰められぬ席にお尻を入れてくる　つづや
バタンキューでした働きづめのころ　千代
箱鮨に関西弁がつめてある　好
詰め込みで応用効かぬ木偶の坊　世紀子
押しつけの愛詰め込んだお弁当　半銭
お尻押す詰め込み役という助役　敏治
笑い話たんと詰まった玉手箱　りつえ
理詰めでは通らぬ人の世の情け　のん子
カプセルに青い希望が詰めてある　玄也
名月を袋に詰めて持ち帰る　雅子
ヘルパーにきたんじゃないわお母さん　としお
ヘルパーは昨日と同じ愚痴を聞き　時雄
病む人へヘルパーさんという天使　日の出
被害者が追いつめられる放射能　唯教
アリガトウはヘルパーたちの励みです　山彦
ヘルパーならもっとやさしくしてくれる　八千代
ヘルパーのリズムを乱す話好き　清晋
ガイドヘルパー僕の後からついて来る　政男
別嬪のガイドが好きな白い杖　進
ヘルパーはオマケしないで帰らはる　和幸
内閣にすぐ失言病が出た　健吾
夏過ぎて煤けた肌に美顔術　舞夢
斜めから擦り寄ってくる美辞麗句　清
夏浴衣涼やかな目に媚態秘め　竜之介

佳句地十選（11月号から）

西口　いわを

青空へカルテが躍る異常なし　みね
人生の最後に出そう正誤表　無限
一喝をすれば明日から独りぼち　勝弘
水たまりここにも秋の月がある　桂子
険しい山越えて可憐な花を見る　美智代
ずん胴になって女は強くなり　ふみ
花束の中にやっぱり薔薇ほしい　勇
シルエットの影から人の心見え　雄太
明日がある思うゆとりで楽になり　弘子
プロポーズしているように花が咲く　弘一

夏風邪が素敵にさせた鼻濁音　雅明

岸和田川柳会(大阪)　米富　淳風報

どろ臭く勝ってさわやかインタビュー　昭
ノルマから放れ安らぐ棺の中　蛙城
被災者と心触れあう両陛下　和美
主婦業にノルマあるようなないような　香代
掃除機になって畳は叩かれず　幸子
手をつなぐ散歩も終る孫の羽化　三四郎
子育てに優しいハグは欠かせない　淳風
月に照らされては拙いことがある　愿
胸ポンと叩くあなたについていく　隆昭
一人身の今日のノルマは風まかせ　武志
木洩れ日のシャワーでわたしリフレッシュ　珠子
爽やかな空だ核などゼロにする　ダン吉

温泉に浸ったあとのマッサージ　忠太
叩いても割れない水に諭される　哲夫
さわやかと言えぬみちのく青い空　東吉
さわやかに長椅子で寝る小宇宙　年須美
指先から拡がる世界点字読む　英夫
脳細胞接触不良起こす老　弘子
さわやかな事だけを書く日記帳　房枝
塾プール子供にだってあるノルマ　みつ江
拙速の恐さを亀は知り尽す　良一
病む母にスキンシップの介護する　義泰

川柳塔打吹(鳥取)　野口　節子報

いらぬ手を出して切られる松の枝　美代子
老眼で手元が狂い段ちがい　たけ代
願い事あって八方手を尽す　泰輔
手料理に花丸くれた姑も逝き　節子
大震災手をさしのべるボランティア　勝誉
あの世から手まねきしても行かないぞ　英美子
バス旅行何時の間にやら皆家族　道子
過疎のバス運転手だけ乗っている　義人
人の和に乗れずぐちには乗っている　美知江
べんちゃらに正直者はひょいと乗り　滋
乗り換える事など出来ぬ夫といる　紀美恵
神様の留守のあいだに船に乗る　螢
月見酒とろりと秋の風に乗る　美ッ千
精霊が乗ったら動く茄子の牛　芳光
飛行機に乗ると翼が生えてくる　完司
高々となでしこ達が杯を上げ　悦子
高見から見下す目線気に障る　公恵
スカイツリー見上げて首に貼り薬　清
大臣と言うりっぱな高等小使も　克枝
天狗でも鼻の高さが気になるか　重忠

薬より効き目の高い褒め言葉　玲子
どじょうの声天の声かと期待する　みち子
高台に住めと縄文人が言う　玲坊
好きだからふわりと高い雲に乗る　泰山
食文化終戦直後思い出す　和子
暑い日は喉がそうめん恋しがる　龍枝
聞きわけの無い胃袋が困らせる　紀の治
感謝して食べればみんな肉になる　貴恵
間食が過ぎて肥満の二段腹　禎元
食前の薬忘れてビール飲む　善江
食べて寝てよく働いて健康だ　久芽代
日本も欧米並の食文化　勝憲
有頂天若さを食べて消化せず　三津子
生きている心が愛を食べたがる　くにこ

和歌山三幸川柳会　武本　碧報

空気枕のかるさで程の好い男　朱夏
喧嘩後の重い空気を除湿する　笑美子
二世帯の階段下りてくる空気　あや
皆の衆空気に感謝してますか　昇
高慢な河豚の空気を抜いてやる　幹子
観客を同じ空気にするピエロ　喜久子
風呂敷へ朝の空気を包み込む　絹子
十日なら水と空気で生きられる　義雄
綿菓子に空気のおまけ付いている　起世子
動かない空気を孫がかき回す　夢子
本音言えなくてファジーになる空気　碧
これ以上のんびりすると日が暮れる　竜
のんびりも銭がからむと輝く日　東吉
のんびりと生きる予定の金魚鉢　かずみ
シナリオのない道をゆくのんびりと　菜摘
怒ってることに気付かず手を繋ぐ　登美代

稲わらを見るとのんびり出来ぬ牛　町子
その内に咲く慌てることも無いだろう　章子
のんびりと比例していく体脂肪　富子
ゆったりと余生の旅を楽しまん　房代
誤作動も起こすふたりのハーモニー　当代
ナツメロが聞こえ昭和のハーモニー　准一
夕立とナスビトマトノハーモニー　イセ
陰と陽妙に波長の合う夫婦　みね
三世代洋と和で良いハーモニー　ひろ子
風鈴にすだれを抜けてゆらす風　次根
影踏みに弾む親子のハーモニー　柳昌
足を止め聞いてる鳥のハーモニー　武
エコライフ人と自然のハーモニー　桂香
柔らかい声が似合いのまるい鼻　美花
内密にと言う袖の下重過ぎる　孝子
ははの鏡で母の秘密が漏れている　和子
オフレコが洩れて火消しに大わらわ　義雄
ポケットで秘密ひとつが干からびる　俶子
放射能隠す単位かシーベルト　保州

竹原川柳会(広島)　古田　太虚報

音沙汰はないが気になるのも絆　房子
絆です五十五周年花が咲く　輝恵
車椅子かこむ絆の温い風　慶子
母と子の絆あふれる授乳室　京子
振り返り振り返り手を振る絆　力
一軒家明かりがついて無事を知る　半徳
薬くすり私を家に帰さない　一路
ゴーヤいっぱいエコカーテンの家に住む　民恵
ばらばらの家族が集う七回忌　静風
家中を一つになでしこジャパン見る　笑子
ありがとう家のインコが喋ります　淑子

家に帰るとホッと亡夫の息づかい　幸子
控えてるのにまた父の雷だ　栄恵
控えめの妻ガッチリと手綱締め　弘子
控室講師もなごむ花一輪　千代美
金賞の酒が控えている書斎　白狐
奥の部屋で合図を待っているのです　蘭幸
花嫁の父だけが泣く控え室　敬子
喜怒哀楽今日も心はころころと　比呂子
被災地の漁師に笑顔ああサンマ　汎美
八十五才さあこれからが正念場　規代
野菜の命うまさ引き出す夕の膳　栄香
五里霧中ぺたんと座る大師堂　厚子
画用紙の大きな丸はママの顔　史子
頭から爪の先までおシャレする　千枝

川柳らくだの会(鳥取)　岸本　宏章報

白黒もグレーゾーンも生きる知恵　都
抜け毛ケアいろいろしたが不毛の地　清
割亭着嫁がなかなか畳ませぬ　孝子
折檻と躾のけじめ紙一重　富貴子
いろいろと妻は指図し旅に出る　寿賀子
言訳はよしてすっきりけじめつけ　邦昭
一生涯トラの法被は畳まない　宏章
万札がみじめに見える小銭入れ　せつ子
晩酌に妻はけじめと水を出す　仁子
それぞれの持ち場があって口出さぬ　大鯰

川柳塔おっぱこ吟社(香川)　川﨑ひかり報

長い道人と言う字で支え合い　八重子
底辺で人間らしく生きてゆく　はつ恵
辺境を又脅かす余所の船　放任
この辺で考え少し変えてみる　よしみ
プライドを捨てると視野が広くなる　いさむ
金色の波ころばせている入り日　弘
夏台風日本列島狙われる　あきら
肩車父と見た日の祭り獅子　ひかり

南大阪川柳会　前　たもつ報

原発に故郷失うシーベルト　憲太郎
失った我が家の跡に彼岸花　弘泰
森羅万象実になるものと失せるもの　柳弘
何もかも失くし命がある再起　柳伸
誤解とやボタンの孔のかけ違い　東吉
宿帖が誤解している父娘連れ　遠野なぎさ
居残った二人誤解のシルエット　和雄
言い訳をするほど誤解深くなる　直子
誤解とけぬまま心の重たさよ　克己
秋の陽が沈まぬうちに解く誤解　ひさ乃
ゆっくりと日にち薬が効いてくる　とし子
薬より父の一喝胸に貼る　更紗
まだ生きる欲くすり手放せず　弘風
家計簿を見ると薬が欲しくなる　清
独り居の背中に遠い貼り薬　忠昭
誤解とけ胃薬要らぬ胃が笑う　祥昭
時には必要失敗という薬　一歩
女ひとり生きてゆく武器くすり指　集一
薬より歩け歩けというカルテ　美籠
ほどほどの優しさ女には媚薬　庸佑
愛用のちびた筆にもある思い　恭昌
セールスの汗と涙のちびた靴　修
そろりちびり薬なみです酒五勺　正春
鞦韆を買って背筋が又縮む　太郎
出し惜しみしたらあかんと言う財布　弘子
断捨離に亡母の遺したちびた下駄　楓楽
皮下脂肪増えて詩嚢がちびてゆく　ルイ子
いやだナー身丈ずんずんちびてきた　郁夫
アナログと歩む私の周波数　シマ子
明日あると挑む就活靴が鳴る　柳右子
生きるとは八十路の谷を乗り越える　勝弘
やっぱりね養殖だったどじょうさん　昌紀
ハンドルに逆らう車輪付けた国　津志子
母想うことしきりなり彼岸花　栄子
日本を出ると日本好きになる

川柳ふうもん吟社(鳥取)　夏目　一粋報

放射能汚染コシヒカリを泣かす　洋々
ジグザグに歩きコントはまだ続く　一瑶
叶わない夢の半数子に託す　無限
夢のようそんな気分に何時なれる　清信
ジグザグに進まぬ蟻の一本気　節子
幸せが夢ならずっとさめないで　圭一郎
半数はあなたも荷物背負ってね　春名
ジグザグに逃げる泥鰌は生き残る　地佳平
プライバシーきれに食べたシュレッダー　美恵子
三才に入選したぞきょうさめえ　凱柳
細腕で支える家紋荷が重い　とも湖
目標に向かいジグザグ進んどる　一京
半数はいつもの役に堪えている　行男
夢のよう一人娘に婿がくる　蟹郎
ジグザグの感情線がよく喋る　清帆
ジグザグのコースは人を丸くする　孝男
半数がてきでも半分は味方　高明
半数の指がなぞった鎮魂碑　志延
補聴器のお陰で聞ける虫時雨　秋月
支持率は半数迷うことはない　善夫
あなたとの愛に道徳など忘れ　美雪

ジグザグの波が平和な町を舐め　金祥
日本中荒れて助ける術がない　妻子
ジグザグに稲を刈ったの誰ですか　振作
ジグザグで生きて来ました夫婦仲　茂登子
ジグザグに稲妻暗闇を千切る　昌鼓
ハヤブサの帰還ニュースだ夢のよう　義徳
今の地位夢のようだね野田総理　孝二
ジグザグの二度や三度は男道　回春子
半数は私応援してくれる　菊雅女
きょうさめえ市議が真面目に議論する　隆浩
ありがたい法話半数義理で聞く　毅
きょうさめえことだ泥鰌が降ってきた　一粋

川柳塔みちのく(青森)　小寺　花峯報

疑問符をつけて夫は朝帰り　小とみ
放射能色をつければノーベル賞　信子
八十路越え疑問符たんと持っている　一湖
骨董市疑問符品も陳列し　つとむ
はてなって?探す時間が多くなる　綾子
ぶらぶらと年金下げて老いの坂　きよし
悠々と流れる川も牙をむく　初江
舞台暗転ナゾを知ってる浮き雲よ　夕香
二浪してやっと疑問符脱皮する　呑舟
悠々と引きこもっているニート族　柳子
浮き雲が仮眠してる二十五時　ひとし
疑問符を漂白剤につけておく　美鈴
争いの途中で疑問符が離れない　芳生
浮き雲がハートマークになっている　隼人
十五夜の月は悠々地を照らす　則彦
源氏名を替え続けてた鱗雲　一呑
浮き雲とかくれんぼする昼の月　ふさゑ
浮き雲を真似てきびしいひとり旅　花匠
悠々の貯金枕を高く寝る　井蛙
もう牙は過去を語らぬ花遍路　黙人
風鈴は音を立てずに冬の朝　花峯
日本晴れ浮き雲ひとつ描き入れる　慕情
ネオン街スリル求めてぶーらぶら　一花
浮き雲にぶらさがってる蟻である　劦

川柳ささやま(兵庫)　遠山　可住報

秋の海水着の恋を捨てに行く　久子
大海の眺め小柄も胸を張る　美緒子
向日葵の海で元気をとりもどす　純子
時刻表読みまちがえて乗り遅れ　美紗子
ボスの座にいつの間にやら妻がいる　哲男
米俵抱いてる腕が悲鳴あげ　稠民
世界はひとつ丸い地球に抱かれて　真由
満天の星が世界に降る平和　多美子
砂浜を素足でかけるなつかしさ　開子
子育てへ父を見せとく腕相撲　可住
海はこわい多くの命飲んでいる　かほる
うかつでは済まぬ台風予報聞く　幸子
学問も海を越えれば箔がつく　照代
千年の眠りがさめた海の乱　美智子

ローズ川柳会(兵庫)　木村貴代子報

無理ムリとみんな言うから余計ムリ　てる
無理にでも笑顔と元気見せてやる　貴代子
無理せぬがいつしか無理のきかぬ身に　義子
その頃は無理と思わずローン組む　年代
萩活けた空瓶とても嬉しそう　みつ子
萩の寺庵主に句碑のいわれなど　哲子
無理難題笑顔で聞いている余裕　いわゑ

川柳塔唐津(佐賀)　仁部　四郎報

亡父を知る父の背越えた齢になり　勝視
ご信徒に成れと朝から逼られる　高明
リベンジを心に秘めて待つ球児　輝夫
かけもちのパート地婦連の紅を買い　四郎
衣食住満たされたあとは儲けもの　蜂朗
はねのけてかけられている夏布団　實

松露川柳会(鳥取)　小西　雄々報

秋風にハートを乗せて便りする　公美枝
頑張るとハートに誓い深呼吸　鈴枝
それなりのときめきハート結ばれる　智恵子
お茶一杯心をこめて入れました　弘子
荒波が心を砕く虚脱感　和代
なでしこが皆のハート燃えさせる　久子
楽しさを倍増にするハート持つ　静江
愛を知るハート幾つも持っている　正光
振り向かすために開いておくハート　雄々

川柳塔まつえ吟社(島根)相見　柳歩報

太陽に笑われそうな二日酔い　叮紅
おてんとさまが見てるぞ狡を止めておく　弘充
太陽へさっぱり流す蟠り　ちえこ
太陽が沈んでからが忙しい　昌枝
老いてでも心の太陽曇らせぬ　長吉
カクテルの底に本音を閉じ込める　淞丘
ハラワタの色が本音で茶褐色　芳山
米研いで研いで女が吐く本音　晋市
本音かな嘘ともとれて首かしげ　政子
引き出した本音いっぱい入れてある　凉子
冷蔵庫開けると本音語りそう　芳恵

この歳で本音出さなきゃいつ出すの　禮子
吐く本音いざ鎌倉に取っておく　民子
また転ぶ八起の元気持っている　注湖
笑い転げて柔らかくする頭　久枝
転ぶたび人という字が丸くなる　桂子
転び方覚え人生秋がいい　知恵子
七転び生きた分だけ皺の数　幸子
近いうち君とふたりで転ぼうか　柳歩
歯科の椅子寝転んで見る付け睫毛　草庵
ゆっくりとふところの石捨ててゆく　ゆき
手間暇かけて自分が良いと思う服　ミツコ
足湯して晩の献立考える　美智子
ゆっくりがうっかり手前様となり　たけし
ボンボンは難問をパス上手だな　孝流
パスしたとメールの文字も踊ってる　千里
こだわりはパスしなさいと雨が降る　博子
疲れたなあ炊事軍曹パスしたい　幸代
パスポート世界の靴を履いてみる　とも子
パスされたブーケ両手で受け止める　寿代

高知川柳社　小川てるみ報

堅物を納める器妻の功　正躬
銀の器であなたの愛をまってます　千鳥
ホークにナイフ欠伸している食器棚　三千世
素人が活けても映えてくる器　暖
トイレから美人の女神出す器　哲史
饒舌な器だ蓋がしまらない　てるみ
少年の器に無限大を知る　和広
柔と剛そんな器で仲がよい　京子

ほたる川柳同好会(大阪)　水野　黒兎報

要件の他は一切話さない　久子
他意無いと言われかえって湧く疑惑　黒兎
他人とはとても思えぬ古い友　正子
嫁はんを染め切れなくて喜寿迎え　幹治
空高くあぜ道染める彼岸花　公子
風船に染まる七回甲子園　柳童
媒染を忘れて色が落ち着かぬ　美智代
ツアー客もみじの恋に染められて　郁子
悪友に感化されたと親は言い　淳
不幸色に染める破調の地球人　契子
弁解をせずにふわりと外に出る　長一
綿帽子ふわりとフォトもセピア色　勝
パパが押すブランコふわり日曜日　春代
大笑いストレスふわり飛んでいく　康子
嬉しい日みんあふわりと浮いて見え　見清
さわやかに生きて来たかと振り返る　桂子

川柳塔鹿野みか月(鳥取)　福西　茶子報

一生のコンビ伴侶が見つからぬ　房子
好きな人へちょっと意地悪したくなる　くに子
生きるため露も霞も食ってみる　盛桜
お陽様とコンビを組んでよく育つ　美ッ千
髪長く男か女風変わり　久枝
拡大鏡とコンビを組んで辞書を繰る　重忠
お互いに俺が主役と言うコンビ　いさを
葬送の曲はゆっくり海ゆかば　螢
露を抱く芋茎に母の影を見る　茶子
コンビ組み嬶でんかと六十年　はるお
とても重たいのち壊れぬように抱く　彩子
人生百才露の命というなかれ　照彦
頷いて何でも有りと慌てない　孔美子
出る釘を打つのが趣味で通ってる　弘子
助け合いはげまし合った名コンビ　八重
くされ縁それからコンビまだ達者　(西)和子
弾みすぎ衆人の中で声を出す　睦子
植木鉢並べて道を狭くする　実満
一齣が諭しいものになるコンビ　富久江
惚けかげん同じ位でまだコンビ　満
失敗を笑いに変えるコンビです　小鹿
ダイヤ婚夫婦コンビで足六本　菊乃
酒飲めば意地悪を言う息子と暮らす　惣子
意地悪こっこ出来るあなとの居て嬉し　(鹿)節子
昭和からころり平成風変わり　美代子
意地悪になりたくなくて笑ってる　(岩)和子
七色のコンビ大きな橋になる　みさ子
意地悪をしたと気付かぬほど無邪気　かおる
本心が意地の悪さを叱咤する　諷人
意地悪な土の中には善の根も　永子
長年のコンビ解消して独り　京
意地悪な神が九回裏にいた　忠良
愚痴り合う夫婦漫才いいコンビ　蟹郎

倉吉川柳会(鳥取)　竹信　照彦報

冬将軍せめて行くなよ被災地に　けいこ
雪女今年の冬は遠慮せい　石花菜
追い打ちをかけて日本に冬がくる　次男
老いひとり冬眠をして春を待つ　智恵子
おお寒い冬物ほしい朝まだき　康子
野も山も白一色の冬が好き　賀寿恵
隠す雪解けた息吹に又期待　恭子
長い冬草木も芽を閉じ春を待つ　英子
トンガリ屋根のてっぺんから海ゆかば　螢
蟷螂に睨まれている動けない　美ッ千
警察犬よりも鋭い妻の勘　由紀子
包丁を鋭く研いでトマト切る　美代子

だんだんと鋭さ消える頭脳線　和子
鋭いがチョッピリ人情味がほしい　酔芙蓉
鋭さも個性になればシメタモノ　貞子
眼力を見せてくれますサスペンス　祐子
人類で一生終わるあと少し　瑞子
同類とすました顔の毒きのこ　龍枝
類似品なのに大きな顔をする　盛桜
たぐいまれな人あつまってきて句会　完司
人類もそろそろ絶滅危惧種なり　鬼一
気が合うか類は類呼び良くしゃべる　美津恵
有名になると親類増えて来る　風露
類を呼ぶ赤ちょうちんは酒好きだ　日出子
馬鹿言うなこれは私の杖ですぞ　重忠
蔵の中これも先祖のがらくたか　喜美子
これくらいでも許されぬ袖の下　茶子
コレまでと思った途端目が覚めた　泰輔
私は妻これでもこいつでもないわ　萩江
玉子焼これしか出来ぬ娘です　悠子
これなあに尺取り虫の変身だ　玲子
これ付けて心臓やっと動いとる　照彦

川柳茶ばしら(愛知)　関本かつ子報

天秤にかけて残った趣味の道　幸子
バイキングあんなに取って食べ残し　遡行
楽な道ばかり選んでずっこける　美千代
秋まつり吊橋渡り里帰り　雅美
米寿も師囲む生徒は七十四　まみ子
巨人軍敗けても原の大写し　かつ子

川柳クラブわたの花(大阪)　西川　義明報

恋成れり満月へ盃なみなみと　耀一
デパ地下で五時まで待って老舗味　知佐子
中秋の妻子を偲ぶ青テント　民
万葉の秋心の悩み癒えました　博子
牙むいて暴れた海も虹かかる　愛子
頑張れば塗り替えのきく我人生　奈良司
月見酒友が断る筈が無い　宏至
反抗期親よりでかい靴を履き　いつふみ
老母おしゃれ散歩の前も薄化粧　宏
自分に一つ妻へ梨を二つ買う　義明
大臣さん猿より頭脳悪いかも　正春
割り切れぬ終止符にまだ疑問あり　俊子
敬老のケーキが食事当てに来る　はじむ
絞り粕今日は主役で粕汁に　晴美
原発を呑み込む大蛇目を醒ませ　浩三
恐ろしい海千山千笑ってる　孝子
夫の弱みあの時のあのプロポーズ　和子
前向きに生きて過去など気にしない　ますみ
百歳の生き方学び真似てみる　美代子
ふところは軽いがこころ空をとぶ　一風

川柳塔わかやま吟社　川上　大輪報

モッタイナイ手柄に生きた平和賞　紀子
過労死の手柄社史には載ってない　保州
遺言状がどうやら父の玉手箱　輝子
夢食べて膨らんできた玉手箱　精子
玉手箱開けると噂立ち込める　准一
玉手箱に入れた初心が消えている　徑子
退院のドラマを包む玉手箱　寿子
無視無言これほどつらい刑はない　俶子
無視される辛さは人にわからない　登美代
無味無臭私はここに居りますよ　紀久子
飛びついた無料の裏にある仕掛け　克子
無の境地その時だけは美しく　秀子
命あれば無一文でも出なおせる　美子
母が逝く柳行李は無にかえる　緑良
無農薬虫たちだって安心だ　小雪
無欲です財より寿命思う歳　佐一
煩悩が邪魔して座禅無になれぬ　英子
曲げないで母にもらった無の心　和香
喋らせた無口誰より的を射る　冨美子
無一文皆の力で立ち上がる　美子
さらさらの砂に生きると書いてみる　ほのか
二人三脚築いてたのは砂の城　泰女
さらさらと風飄飄と人生譜　大輪

八尾市民川柳会(大阪)　土谷　耀一報

民話発掘バス乗り継いで乗り継いで　草風
秋の山紅葉一枚空を舞う　雄太
ケータイを磨いては待ついい返事　留里恵
体温まで貰う民話にある訛　朝子
葉っぱ一枚あれば人間騙せます　耀一
磨かれて磨いて花は華になる　森子
満ち足りた人生老いへ木の葉舞う　一風
豊かさを返せば亡母の貌になる　華
両手広げて一葉太陽仰いでる　賢子
舌の根の乾かぬうちに即増税　紀雄
号泣のセシウム罪のない葉物　欣之

川柳塔きゃらぼく(鳥取)　大塚　恵子報

変り目にツクツク法師なき急ぐ　恵子
八十の手習い友がまた増える　亜弥
虫の音に安らぐ今宵眠れそう　麗
今日は晴れ明日が見えないご時世に　鶴子
ほの赤いすすきの穂から秋が来た　ゆき
芳香の花から匂うよき時代　瑞枝

マニフェスト忍者のように消えて行く　喜周
噴水の背のびの先に子等の声　寿々子
昨日の続きで今日一日も恙なし　千代
父母の轍を残す佛事　未延子

わかあゆ川柳会(島根)　松本はるみ報

コスモスに手招きされてまわり道　ちよえ
日の丸で送った日もあり無人駅　かつ子
毒舌が恋しくなった冬の天　はるみ
まわり道寄り道ふたりの道しるべ　好栄
明日がある信じてゆこう川とんぼ　恵美子
のんびりと夫婦で歩く夢やぶれ　澄子
偶然の出会いうれしい華のとき　英子
まわり道よけたつもりの罪と罰　博利
まわり道起死回生の運拾い　清泉

川柳塔なら　坊農　柳弘報

研究にすべて費やす仕事馬鹿　彰治
何自慢したいか肩で風を切る　次郎
やさしくて細くて丸い母の肩　いさお
肩の荷を下ろした途端自治会長　紀雄
費やした苦労偲ばす大仏殿　博一
来ぬ人へ費やしている花時計　洋子
肩書きを捨てた男の痩我慢　満作
肩書きがとれて出てくる人間味　堅坊
ベッドからこぼれた夢を拾ってる　隆之
費やした旅の時間と軽い私語　とし子
肩ぐるま父と祭の走馬灯　萌子
前置きが長く本論宙に浮く　弘風
足首をひねって借りる君の肩　寿之
御仏に肩を抱かれた蓮の池　郁夫
費やして薔薇の化粧に騙される　ふりこ

八十年生きた五割は恋に消え　修
寄り添うて阿吽になってきた時間　惠美子
点滴のベッドを囲む血の絆　道子
お隣の軋むベッドが寝させない　恭昌
両肩を下げて暮していく余生　比呂志
ひと捻りされてあっさり裏返る　芳子
一粒の米にたっぷり汗と知恵　あかり
黒幕がおひねりを撒く首相選　真理子
写経する自分に費やす無の心　弥生
転職の肩に値札が吊ってある　一風
短命にならないように一捻り　順啓
それからはダブルベッドに寝る独り　理恵
真っ白い時間みつめているベッド　富子
子の知恵に大人五人がひねられる　國治
スイッチを切って独りを取り戻す　良一
病床にとどく陽光生きる糧　隆盛
栓ひねり水ほとばしる幸せよ　克己
愛に生き愛を費やす女王蜂　柳弘
終焉の土を枕にするベッド　義久
傲慢をひねりつぶしてやる正義　朝子

川柳花の輪(大阪)　妻谷　重風報

欠伸連発体内時計に逆らえず　一幸
思い切り欠伸してから寝る至福　克衛
あくび出て話の山は峠越し　三楽
大あくび出来る平和を噛みしめる　勇太朗
古希の身に誇りに思う母がいる　やすの
六人目産んでかあちゃん誇らしげ　みちる
バーゲンに誇りを家に置いていく　泰子
誇るもの地震知らずによく眠る　重風
大あくび出て話の山は峠越し　ミヨノ
肩の力抜く大あくび頭脳冴え　薫
真面目だが要領わるく無位無冠　

楢山へ行く要領を確かめる　敬子
要領の良い子悪い子皆我が子　風
言い訳が要領得ない朝帰り　楽鬼

岬川柳会(大阪)　八十田洞庵報

月光も邪魔にならない若い人　洋子
残り火を消して流れた山津波　和香
山津波世界遺産も泣いている　清一
花活けて残暑の酷さ吹き飛ばす　令子
あかあかと畦に灯ともす慰霊花　和美
野田丸の船出多難の舵を切る　東吉
息子にもちょっと甘えて母の味　茂平
虫の音の庭の楽園里の秋　悦子
不況下でUターンする里の秋　冨美
手を引いて歩みをとめて秋の月　桜琴
ナデシコの粘りに習うウォーキング　年子
青汁を飲めと言われて蝶になる　峻史
大荒れの日本列島救い給え　富美子
満月が川面に揺れる古都の秋　寛
コスモスの花がやさしい秋にする　貞夫
日本国天災被害つづき過ぎ　圭子
水に生き水に生かされ水に泣く　覚庵
見栄一つほしくて買うた備前の壷　洞庵

はびきの市民川柳会大阪)徳山みつこ報

番犬を続けてくれた家族愛　悦子
盲導犬ほんとにほんとご苦労さん　敏
貰われた小犬にもある運不運　庸佑
褒められて脳が元気になりました　美喜
やわらいだ暑さ散歩の距離が伸び　獏沓
残暑見舞ペンギンの切手貼る　みつこ
残暑つづいて向日葵も微熱する　美代子

びくびくも歳のせいかも不整脈　アヤ子
びくびくと小さな嘘を抱いて生き　りつえ
判決は死刑か無期か怯えてる　雄太
びくびくと高まる鼓動肝試し　淳介
ふる里はびくびくしてる土石流　ヨシ枝
ワンマンが常におびえる反逆者　章司
夜の道追って来たのは影法師　泰子
ユニークなお顔と言われ喜べず　いさお
ユニークな人自分では気付かない　登志子
ユニークな考え方が賞をとり　フジ
ユニークさ人より半歩抜けていい　喜久子
ユニークさ宴会部長と崇められ　久仁子
君はカリスマユニークを越えている　扶美代
独特なカラーが魅力ジミーの絵　ちづる

川柳同友会みらい(鳥取)　**吉田　陽子報**

新妻もやがて大きな顔になる　みどり
グチ聞いてもらえて元気とり戻す　ふみ子
お祝いを届けくやしい帰り道　久司
目がさめて手足が動きほっとする　温子
次々と頂く西瓜買った後　章子
水不足棚田の月も欠けている　美恵子
すみません言えば収まる事ばかり　千恵子
歩けども夫の気持まだ読めぬ　ひとみ
キュウリナスあの手この手で食卓へ　美江
限界が来ればじたばたしたくない　寒之
努力せず限界だけを口にする　京子
時々は甘えて頼むこともする　俊子
掛け持ちの趣味が私をタフにする　陽子
力こぶ学歴捨てて稼いでる　恵美代
ナメクジに似合う衣はないものか　勝之
シーベルト知らない風が心地よい　信子

猛暑日はオレンジ色の息を吐く　敦子
ひとりしか産まぬ夫婦の共稼ぎ　嘉子
三日間孫に渡した家長の座　律子
はっきりと苦い言葉もありがたい　澄枝
組閣成る党の掃除も出来ぬまま　正雄
簡単に掃除出来ない棚の上　安子
責任という芯入りシャンとする　勇
怒りまぎらすひたすらに花いじり　華蓮
秋風に抱かれ一時苦を忘れ　一眸
いやされる旅に心の鍵外す　菜美
気紛れにいじって欲しくないハート　遊子
苦のために生を受けたと思わない　和代
生きるため横の絆を太くする　公弘

豊中もくせい川柳会(大阪)　**藤井　則彦報**

渡る世間は浅き夢みし事ばかり　郁子
裏わざを心得ていて持つゆとり　庸佑
万葉の古歌へいざなう女郎花　勲
一本の薬を握って人を知る　志津子
役に立つ話と耳をかたむける　雀舎
裏わざこなす男支える尾骶骨　(永)玲子
紅色になるの忘れた秋芙蓉　きらり
霊柩車割引中と言われても　幹治
モザイクを掛けられようと割らぬ口　幸雀
福島米胸なで下ろす検査済み　佐和子
カマキリの雄は済んだら丸齧り　歌留多
木犀の香る庭です薪を割る　佳恵
原発事故地獄の蓋をこじ開ける　堅坊
浅漬けのようにさっぱりとはいかぬ　夢隆
小気味よいジョークで済ますわだかまり　満子
塩昆布を炊く裏わざは母譲り　(岩)玲子
ストレスはいつも仏間の鈴で消す

裏わざを知ってもやはり自分流　見清
カード買い後が気になる引き落とし　千枝子
青空を心に移す深呼吸　巴子
芸術と縁は浅いが秋は好き　すみ子
運命と割り切れば楽苦も幸も　美智代
子育ては祭りだったと割烹着　美義
月の出を待ってる孤独な宵である　寿美子
気の済むまで弾いてみせる円周率　則彦
砕け散った破片を探し続け秋　葉子
神さまの裏わざ低気圧高気圧　求芽
花束をほどいて楽にしてあげる　啓子

大山滝句座(鳥取)　**新家　完司報**

歯を削る音に名医もヤブもない　照彦
不審者が頭の中に住んでいる　芳山
鉄棒で宙返りして見る未来　寿代
治ったら名医死んだらヤブ医者だ　美恵子
札束を積んでも牛は動かない　芳光
おにぎりも金も転がりやすい坂　博子
私を忘れかけてる母見舞う　典子
日中韓の歴史小骨が抜けません　厚子
首位を追う人とおんなじ絵は描かぬ　忠良
土のついた大根がよく売れる　螢紀の治
前略御免と督促状が来た　石花菜
制御棒不如意のままで生きている　和子
やすむ前収支ばっちり合わせてる　恒子
年金で米寿までも生かされる　久絵
省略について行けない石頭　水歌
順番に足から歳が這い上がる　美ッ千
恋をするパワーください夕茜　幸子
お金数える時だけしゃんとする頭　克枝
兄二人酒をかついで極楽に

日記には汗が省略されている　麦青
平家の血流れていると自慢する　久子
涙なく敗戦歴史語れない　重忠
長く生き話し相手になるつもり　鈴野
省略をしてはいけない恩返し　すみゑ
通訳が短いような気がします　仁美
前略でいきなりやってくるラスト　完司

長柳会(大阪)　坂上淳司報

禁煙で里帰りした飯の味　淳司
青春に私の愛は攻めて勝つ　明子
旅帰り茶漬けの味に舌鼓　三和子
差し向かい水割りつくる月明かり　ヒロ
責めるならそちらの手並み見てみたい　幸子
スイーツに自分を責める肥満体　たけし
メタボ腹防ぐ食事の腹八分　靖博
祭り太鼓短気なバチが大あばれ　エミ
責められて誰か仲間を捜してる　弘光
人前で自分を責めるふりをする　もこ
短期定期利子でランチも食えません　篤
責められて言い訳せずにふて寝する　マサ
あの亡母の厳しい責めは愛だった　敬二
老い母の座椅子を囲む丸い風　一慧
気短の父そっくりに兄も老い　けい子
過不足のない人生に悔いひとつ　光弘
雨やどり止んでないのに走る人　正子
松竹梅妻に指示され竹にする　正博
ラーメンの三分待てぬ我が君は　加修子
瀬戸際でいつも出遅れ自己嫌悪　久美子
千人の世論で責めるマスメディア　隆彦
午前様問答無用と責められる　武男
自分史に短気の跡がここかしこ　正美
うちとけて短気とのんき一つ屋根　孝代
大夕焼短気な秋の陽が落ちる　芳野
言い勝った短気に長いながい夜　和代
けれん味ない笑顔陛下と沢佐々木　直樹
自尊心あの一言で真っ二つ　和子

川柳藤井寺(大阪)　鴨谷瑠美子報

御自慢の魚拓に鱗くっきりと　雅枝
一人旅鱗はがれて帰国する　シルク
年を経て鱗おとした人魚姫　みつこ
清流に銀鱗跳ねて鮭遡上　いさお
コスモスと見つめ合ってる鱗雲　光男
一枚のうろこ武器にも宝にも　あかり
三陸の明日は大漁鰯雲　みよ子
鱗脱ぎ呑み合う友はもう僅か　清之
童謡がとっても似合う鰯雲　喜代子
年かさね落しきれない目の鱗　榮
お隣りのピアノで三時のお茶にする　扶美代
午後三時なぜかうるさい腹の虫　昌子
写経する熱い心になる三時　弥生
午前午後三時はいつも眠ってる　勝弘
山盛りのサラダサクサク口直し　瑠美子
山盛りのストレス洗う母の海　龍一
山盛りの問題かかえ知事選挙　紀雄
山盛りの薬で今朝も生きている　アヤ子
道の駅とれたて野菜山盛りだ　夏子
孫帰るせんたく物の山置いて　登志子
カラオケであっという間に三時間　雄太
誰が決めたおやつタイムは三時です　悦子
三時前まだ起きるのは早すぎる　武義
お茶の間の時間だるく三時打つ　美代子
犬好きへ犬の話をてんこ盛り　六点
三時のおやつ我慢した甲斐ありました　喜久子
午前三時角出し妻は起きていた　ヨシ枝
百歳の歳月を消す母といる　婦美枝

富柳会(大阪)　古田千華報

開き直って明日を睨むにぎりめし　伸雄
人生のあれやこれやで差が開く　よりこ
開き直ると微笑み返す鬼の顔　彦次
風も孤独で南の方を開ける　よしみ
ノック待つ扉をひとつ持っている　アキ
分度器の裾野全開して秋よ　千華
面打ちの面へ削っていく命　欣之
私を庇ってくれたサングラス　祐子
七十年付けた仮面に飽きてきた　扶美代
側面をいつも繕う母がいる　登子
声かけて今日の寂しさ消している　華
ノーサイド火種もみ消す三代目　暢夫
肩書が消えて男の顔になる　鐘造
憎しみは消えぬテロの火ある限り　深雪
哀しみが消えたら歩き出す希望　留理恵
妥協してわたしの影が消えていく　浩子
なでしこの連戦連勝みて疲れ　佳子
一連の嘘に隠した芽が育つ　廣子
連動で揺れる大地にある不安　紅紫朗
どこまでも三歩離れていて絆　恵
連結器愛の軋みを知っている　寿之
最後まで散り急ぐなと父の背　高鷲
散り散りの欠片集めて立ち直る　千恵
散華した友何思う赤とんぼ　一太
砕け散る波の雫を愛とする　未知
サクラチルああほろ苦い青春譜　淳司
散り際を考えながら正座する　正義

そこかしこ愛が溢れていた昔　和子
収まりがつかなくなった元の鞘　壽峰
溢れてはこぼして母の愛の中　奏子
ひょいと出た溢れる嘘に蓋がない　睦子
青リンゴしたたり落ちる知恵の汗　和子
溢れ出る噂楽しむ日の悪魔　淳子
背な少しゆがんで美技が溢れだす　晴美
絵筆から少年青を滴らす　森子

川柳ねやがわ(大阪)　籠島　恵子報

影のない人が突然踊り出す　博泉
準備せずぶっつけだからおもしろい　亜成
似てる人見つけておかし羅漢寺　美江
煙草税払っていると胸をはる　三郎
ICU心の準備する時計　寿子
あらぬ煙を立てて火にする人の口　鈍甲
栗ポトリ冬の仕度の土を掘る　郁夫
金掛けた花火煙が残るだけ　さち子
かたすぎずやわらかすぎぬいい握手　忠央
煙にまく煙がすぐに出てこない　修洋
私には駆け込み寺の母の胸　一風
迷わずについてくるのは影と妻　賢子
準備万端それから川を渡るだけ　朝子
断捨離の準備未練がからみつく　祥昭
紅葉の衣を羽織る金閣寺　仁清
飲兵衛につるべ落としがありがたい　麗
秋の花咲き誇ったか里の寺　薫
スーツ着て出るのはお寺か葬式や　かすみ
影武者のおかげで皆勤出来ました　弘風
お布施より入山料で稼ぐ寺　弘一
正直で嘘が吐けない影法師　尚世
寺巡り仏様より花見たさ　とし子
そんなことあったかいナーで済まされる　美智子
覚えない噂の煙あびている　恵子
準備した椅子が足りないうれしい日　蕉子

川柳塔すみよし(大阪)　岩崎　公誠報

どことなく品備わったホームレス　桃花
九十点あと十点は希望です　直子
音たてて割れたお皿はそれっきり　シマ子
嫁ぐ日へつるりと解く躾糸　和代
原発で日本の地図に汚点つき　妙子
品定めしっかり出来ず騙される　舞夢
消去法残った妻におびえてる　(奥)五月
品ものがそろっているとうれしいな　美世子
取引きに手かえ品かえ事を得る　温子
一品はチンで補う妻の技　光夫
極秘事口からつるり酒に負け　りつえ
発火点低くなったか反抗期　萌
肝心な所は墨で消してある　まつお
上品になりたく思う秋の風　芳香
ゆで卵つるり剥けるか運試し　昌紀
汚点などどこにも見えぬ茹で玉子　ばっは
百点を当り前だと言う驕り　半銭
消しゴムがまたかと謀反試みる　美籠
好きだから消去できないままの恋　篤子
品格がないからおとなしくしてる　勝弘
品定め重いキャベツを目で計る　たかこ
この想いいまだに消去出来ぬもの　吉太郎
書いてまた消したところにある本音　克博
句読点はっきりつけて歩む道　裕之
二度の職無理は言わない朝の靴　庸佑
消去して初心に戻る始発駅　のん子

食欲で自主点検をする馬齢　遠野
五十点あれば二枚で満点や　公誠
少々の脈乱れても恋と酒　一歩
点滴の向こうに秋の空映える　蕉子

いずも川柳会(島根)　佐藤　治代報

錆びついた脳はいつでも空回り　敬子
厄介になった回らぬ風車　煩悩児
生きる為欠かさず毒を飲んでいる　孝亮
妖怪に囲まれて飲む三次会　淞丘
秘め事が腹の底から覗いてる　シゲ子
明日も又腹の底から大笑い　俶子
回る時一寸ウインクする金魚　佳子
しあわせは目が回るほど忙しい　房緒
次の世は飲める男になってやる　あきら
一回転雲に挨拶奴凧　健柳
天気です野菜の顔を見て回る　嘉寿恵
過ぎた事あとは追わないことにする　弘子
腹の底行ったり来たりする思案　英子
幸せはいつもだまって通り過ぎ　祐次
どん底で教えてくれた生きる知恵　志げる
細くても飲めぬ掟の針がある　妙
仮の世の回り舞台で力んでる　きみえ
豊作のよろこび飲んでいる夕陽　左余
過ぎた日をバネにしっかり飛んでみる　蘭水
甘く見たカルテに怖い文字がある　桂子
過去は過去いまの命を輝かす　ちえ
迂回してゆっくり秋を謳歌する　治代
勢いの真ん中にいて目が回る　美千代
語らいのところところにある甘さ　美江子
いい話わたしの前を通過する　たえこ

半世紀過ぎても残る膣のキズ　夢生
一回りしたら心も凪いでくる　多喜
あのお酒まだ回ってる夜が明ける　茂美
過去みんな忘れた様な日向ぼこ　昌枝
計画が甘く袋に穴があく　玲子
出過ぎても一途な針で叩けない　寿美
底なしの沼にくっきり丸い月　喜子
目を回すことばかり起き不眠症　文子
棘のある言葉を飲んだ太い骨　歌子
他人から見れば出過ぎた杭と見え　ちかし

京都塔の会　都倉　求芽報

征爾に続けタクト奏でたVの曲　英旺
角界に久々咲いた菊一輪　満子
増税にまずは白羽の愛煙家　文代
果実みなセシウム等は知らず熟れ　美義
円高という秋色の風止みませぬ　昌乃
基地へ島へどじょうも泳がねばならぬ　牛延
執拗に追いかけてくる震度三　宏子
闇色に塗り満たされた震災地　比ろ志
白塗りのピエロの顔に見た涙　昭葉子
塗り残したあの日の色は白いまま　かずお
キレイになれぬのは塗り方のせいじゃない　万紗子
恥かかぬ程度で一色足しておく　求芽
風評に塗り込められた県境　欣之
塗っているうちに女になる女形　庸佑
あれこれと嘴入れて嫌われる　輝美
あれこれと思いが溜まる設計図　弘之
情報に溺れ行先見失う　泰夫
あれこれと未来見つめる青春期　ますお
ピーピーと洗濯一丁出来上がり　ふりこ
行き違い息が合うのでこじれない　綾子
駆けてくる犬も甘えの息遣い　義昭
ため息をつくと考え弱くなる　益子
溜息を吐いて値札を裏返す　公子
足首のレントゲンへも止める息　則彦
溜息は一人で吐くと甲斐がない　啓子
税務署へ行くと喘息が起こる　未延子

米子住吉川柳会(鳥取)　渡辺多美子報

とても一途に空箱を積んでいる　登美枝
あちこちと豪雨に会って大変だ　礼子
知らぬ間に泣き出し消える虫の声　多美子
朝顔ひとつみやげ残して夏が往く　欣子
部屋の中ラジオ体操いちにいさん　紀の治
本物のビールが飲める年金日　宏之
新顔の案山子で今年は勝負する　正二
いやなこと数数あるが自然体　公一
歴史など年表見ればわかるだろ　すみえ
ひんやりと風ふところに大山寺　正和

川柳さんだ(兵庫)　堀

声もなく袋詰めする汚染米　哲男
手かげんで母のお米はふっくらと　章子
ソムリエがささやくように注ぐワイン　忠宣
幼子と遊びほうけて電池切れ　順子
一筆啓上心地はいかがお父さん　裕美
のんびりと温泉ツアー夢の夢　婦美子
饒舌にさせる魔法のロゼワイン　美和子
残月へ女をたたむこぼれ萩　みつ子
秋のペン伏せた想いがほとばしる　弘子
秋はいいナ幼馴染と午後のお茶　りこ
庭の敷石ケンケンパして遊んだ日　光子
待ちかねた新米届く菊日和　靖鬼
肌艶がいい春ですか恋ですか　龍
あそび声ひびく街には明日がある　幸香
遊ぼうと言って二人でかくれんぼ　泰子
この先はのんびりせよと夫逝く　雪菜
だらだらと遊んでいても肩はこる　あかり
一ぱいのワインで書いたラブレター　耕治
のんびりと夕刊待ってる余生　菜々子
おかわりは止そうワインはほろ酔いで　光久
ロゼワイン女ごころに火をともす　洋一
新米の小包一つ母便り　千賀子
母ちゃんが出掛けたあとで昼寝する　茂雅
仕事終え米のエキスで締めくくる　茂山
青空に心遊ばす米寿です　一泉
冷酒に口説かれている恋もどき　淑子
マイセンの壺と幽玄ともにする　キヨミ
ワインレッドまとい女の秋暮色　ひとみ
人生の指針を母の背に習う　一子
ピカピカの新米照れているみたい　好文
母さんのおも湯一さじお食いぞめ　祐康
ワインより僕はやっぱり酎が好き　正和
七十を超えても僕は反抗期　朋月
平日はパチンコ土日は競馬場　
砂山の風と遊んでいる帽子　

岩美川柳会(鳥取)　石谷美恵子報

人生の岐路はいつでも転んでる　たぬ
高齢者転ぶとどこか骨を折る　はるお
見捨ててはおれぬ転んだお婆さん　重忠
朝シャンへ気分さっぱり家を出る　孝男

震えても覗いてみたいけもの道　一瑤
ジャンボくじ当たり思わず手が震え　圭一郎
列島が震えて税が高くなる　茶子
わなわなと借金取りに膝震え　蟹郎
勤労に感謝さっぱり汗を拭く　螢
心境の変化さっぱり髪を切る　公子
流れ矢に射られさっぱり芽が出ない　忠良
親ばなれさっぱり便り来なくなる　節子
別れたらさっぱり出来るなんて嘘　清帆
太公望さっぱり釣れず本を読む　幸安
今日生きて明日は闇夜か天仰ぐ　菖子
停電で闇に浮かんだ妻の顔　昭弘
蜂の巣が日増し拡大震え来る　和子
切らないで花は鋏に震えてる　美恵子

あかつき川柳会(大阪)　山本　柳昌報

平和賞アラブの国を立て直す　紀雄
古古米も古米も売れているらしい　哲男
置き去りにしていませんか基地と核　柳弘
原発を走らせてきた浪費癖　のぶ久
福島のお米と酒が旨いのに　生枝
船を山へ運んでないか民主主義　鈍甲
ドン尻を優雅に走る孫娘　房男
マラソンという走るキカイが進化する　たもつ
母さんへ朗報持っていく走り　太郎
千鳥足走り込んでる終電車　和雄
なでしこが走りメダルを引き寄せる　秀夫
ひたすらに走りつづけた八十年　武いさお
無印の馬が気楽によう走る　紀乃
オカリナの音が身の内を吹き抜ける　篤
兄貴風吹かせラーメンおごってる

後期高齢の俺に冷たい風が吹く　昭見
ストレスが全部吹っとぶ喋りよう　清哲
味噌汁を吹けば涼秋あふれ出す　矢
百歳へ古稀助走路で足縺れ　克己
吹きこぼれおっとり妻の慌てよう　穏夫
デジタルに吹き飛ばされている私　美弥子
大法螺を吹いて小さな嘘隠す　忠昭
お茶漬をフウフウさます犬がまつ　美世子
苦労みな吹っ飛ぶ吉報が届く　朝子
ありがとう腹の底からいう感謝　野鶴
腹立てて小さい自分に腹が立つ　宏
好敵手先ずさぐり合う腹の中　美智子
腹巻きから小遣い呉れたおじいちゃん　たかこ
腹にすえかね女でも切る啖呵　シマ子
美しい錯覚のままだ夫婦　明子
振られて判る恋の錯覚　一志
世辞なのにすべて真に受け有頂天　勝弘
錯覚に翼がついていた若さ　恵子
馴初めは錯覚自覚して別れ　敏子
マニフェスト信じた方の錯覚か　正

翠　洋　会(大阪)　佐々木満作報

王様も王妃に頭上がらない　楓楽
不況下で夜の帝王おとなしい　浩二
ブータン王夫妻日本へハネムーン　桃花
閻魔王現ナマ積んで極楽へ　富子
王家の暮いろんなロマン満ちあふれ　舞夢
王の城地下の牢獄血の歴史　紀子
コントかと思える政治情けない　げんえい
一幕のコントのように逝きたいね　すみ子
余生のコント泣き顔より笑顔　希久子

コントからヒントをもらう処世術　日の出
こんな歳になってしまってどうないしょう　義
どないしょう増税すると食べられぬ　善之
糟糠の妻ふりかざす離縁状　恭昌
連鎖して地震来るかもなどという　蕉子
さりげなく忘れた振りの思い遣り　昭
就活の道混沌と秋半ば　千歩
被災地を思い感謝で湯につかる　照子
人情が隣に座るローカル線　正雄
盃に思いの丈を吐いて秋　満作
義援金ウチは酒税で納めます　真澄
原爆を思えば東北立ち直る　知之
輪に入りおだて上手が板に付く　捷也
何事もなかった様な澄んだ空　弘子
一生懸命気力支えに生きている　志華子
蟹しゃぶるおちょぼ口こそ可愛くて　滋彦
くるくるくると我が人生も走馬燈　公平
くるくると回る年月何してた　みつ子
栗むいてくれたらごはん炊いたげる　理恵

川柳大阪　長井　善純報

国難の復興試す政治力　鉄心
健康食試しにみんな飲んでやれ　喜楽
節電で原発不要試します　彦太
逃走の台風人間を試し　柳昌
熱心な先生試験ばかりする　照月
試食してこれならよしと一つ買う　和いつふみ
迷い無く若き直球試してる　堅坊
試されているとも知らず調子づく　信酔
崖ぶちで男の器ためしてる　一風
快復の望みが握る試歩の杖

我が胸を試しているか恋の花　青道
真心が見たくて拗ねている仕草　義明
ひと言が恩師に変えた青春期　川童
世の中の気付かぬ恩に支えられ　功
両親に数えきれない恩が有る　紀雄
半年前復興誓った墓の前　珠生
震災で知った空気と水の恩　一歩
綺麗ごとだけでは恩は返せない　柳弘
被災地に恩情を見るボランティア　美花
懸命に生きてる事が恩返し　まつお
恩のある人十指でも足りません　芳香
心地良い歌聞きほれてする拍手　八重子
初舞台失敗しても親拍手　五月
室伏に拍手を送る金メダル　司
タイガース勝てば拍手の酒進む　ゆめこ
強制をする拍手には応じない　勝弘
お祝いの拍手ねたみも入れてある　朝子
幕引きは拍手の内に終りたい　万紗子
激励の母の拍手がまだ響く　善純

六甲川柳会(兵庫)　伊勢田毅報

今はみな平等に今がある　みつ子
何にもない部屋で波音ばかりする　無限
お地蔵さまと目が合い今日はいい日だな　美穂
一日中弾んだ毬が母の手に　能子
遠い日にわが子叱った手の痛さ　照子
手を握り固く誓った筈なのに　保雄
打つだけの手は尽したと茜雲　淳
ささえ合う握る両手にあるロマン　繁義
手をつくす看護も虚し通夜の席　浩司
部長の首飛んだらきっと後釜さ　光久
発想を変えて飛躍の第一歩　忠貞
飛ぶように売れていますと買うサクラ　千賀子
タイガース勝って疲れを吹き飛ばす　武臣
飛び級で上がってみたが落ちこぼれ　康子
空の旅老母と一緒に鳥になる　利子
飛ばされて単身赴任いいクスリ　寿朗
携帯が正体握る時代なり　洋一
勧誘の甘い言葉が舌を出す　和郎
正体を隠してみても色に出る　和宏
正体を知ってむなしい恋心　弘子
正体が判らぬように隠し味　登美子
君の胸で正体も無く眠りたい　夏子
サングラス取ればアジアの顔が出る　弘
正体を曝け出してる夢の中　政一
五十年妻の正体読めぬまま　武彦
ほほ笑みで我が正体を煙に巻く　和子
亡き父の自慢で生きる母白寿　盛夫
巣立つ鳥思いのままに飛ぶがいい　美恵子
どの足で頭掻こうか迷うタコ　茂
妻が病み好きな酒断つ夫婦愛　勤
思い出を追って八十路の一人旅　基輔
川柳句右脳左脳とフル稼働　妙子
貸し借りに目を光らせる土俵下　毅
臓たけた姫にも似たり萩の花　いわゑ
よく笑うきっと寂しい人だろう　楓楽

西宮北口川柳会(兵庫)　小林わこ報

ふところを見透かしている秋の風　勝弘
秋ですね君映えて竜宮寺　哲夫
むずかしい話はせずに秋夜長　わこ
あかんたれそれでも親は信じてる　盛夫
あかんでもアタックしたいいい女　忠
理数科はあかんが喧嘩なら負けぬ　哲男
びんのふた右も左も行き止まり　伯備
ごめんだけでゆるしてなんかあげない　ひとみ
親友にはお金貸したらあきまへん　美津子
諦めたらあかん亡母が囁く　玲子
もうあかんおんな神輿に負けている　章子
ラブメールあかん言うてもくれはるの　順子
スクープへ迷惑知らぬ記者の意地　茂
意地と意地譲らず引かず座が白け　浩司
意地っ張りやめたら楽になってくる　朋月
意地はって老人会はまだいかぬ　耕治
臨終に言わせてみせる「ありがとう」　千代
足先も女ですもの抜かり無く　遼子
青空が笑っているよ父の意地　千津子
じたばたをする百歳まだ先だ　毅
じたばたをするから紐がきつくなる　秋果
じたばたもこの世に在って出来ること　喜明
ジタバタを沈む夕陽がたしなめる　氷筆
一夜漬けじたばたしても間に合わず　光子
じたばたを卒業したか子が自立　弘子
感謝です亡母を選んでくれた父　りこ
立ち読みで覚えた単語役に立ち　基輔
満月を揺らして入る露天風呂　武臣
省エネも大事命もっと大事　敏夫
人の和の中で醗酵する和み　折杭
お若いの優先席は遠慮しな　宏造
長い目でみてくれたねと五十年　直
鰯雲は下世話な奴だと大漁旗　比ろ志
私の色を出してる団子鼻　光久
ひと休みしようか虹が消えるまで　無限

句会名	日時と題	会場と投句先
岸和田川柳会	17日(土) 13時30分締切 宣伝・立ち上がる・つべこべ バイキング	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代
和歌山三幸川柳会	17日(土) 12時30分から 神・笑顔・飾る	和歌山商工会議所4階　第2会議室 ニュース和歌山編集部 「読者のひろば和歌山三幸川柳会」係
川柳ふうもん吟社	**第30回鳥取県没句川柳供養大会** **18日(日)** 9時開場 正体・リハーサル・償う・尻・認知症・仰天・三度目・敗者復活吟	新日本海新聞本社ビル5F　大ホール JR鳥取駅南徒歩3分 〒680-0872 鳥取市宮長205—45　萩原美雪
川柳ねやがわ	18日(日) 14時締切 苦しむ・二次会・フリー 自由吟	寝屋川市立総合センター　4F　第1研修室 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9　高田博泉
川柳藤井寺	18日(日) 14時締切 言い分・余韻・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 髙田美代子
岬川柳会	18日(日) 14時締切 もつれる・笑う・駅	淡輪17区集会所　南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
南大阪川柳会	19日(月) 13時から 宇宙・走る・未だ・ポスト	大阪市立住まい情報センター　5F　研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
豊中もくせい川柳会	19日(月) 13時40分締切 消える・出番・嬉しい・自由吟	豊中市中央公民館　阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2—8—4　江見見清
松露川柳会	19日(月) 19時30分締切 今年の出来事・鯛・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳さんだ	20日(火) 13時から 反省・結ぶ・来年・早い 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5—2—4　堀　正和
川柳クラブわたの花	23日(金) 午前9時30分から 鴨・掃除・誇り・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1—4—8　西川義明
はびきの市民川柳会	25日(日) 14時締切 年の瀬・褒める・ムード・山	綾南の森　公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
京都塔の会	26日(月) 14時締切 数える・あくせく・針	京都ハートピア　地下鉄丸太町駅⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328—202　都倉求芽
川柳塔すみよし	**休　会**	住吉区民センター　南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

12月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 なら	1日(木) 13時開場 備える・紅・恩師	奈良市立中部公民館４Ｆ 近鉄奈良駅④番出口・徒歩５分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城北 川柳会	3日(土) 13時開場 繊細・ぞろぞろ・チラシ 自由吟	旭区老人福祉センター３Ｆ 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	3日(土) 13時開場 僅か・洗う・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 池 森子
倉吉 川柳会	3日(土) 14時締切 選ぶ・沿う・人	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 さかい	9日(金) 13時から 半端・そこそこ・すだち	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
あかつき 川柳会	9日(金) 14時締切 積む・旅・空間	大阪保育運動センター（新谷町第１ビル２階） 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳大阪	10日(土) 14時締切 ケジメ・光・我慢	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 まつえ	10日(土) 14時締切 筆・旨い・振り向く・しんしん	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
川柳塔 打吹	10日(土) 14時締切 市場・プライド・求める	倉吉市上灘町９ 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637―３ 牧野芳光
川柳塔 みちのく	10日(土) 17時締切 ネオン・変わる・めらめら	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ１階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53―１ 小寺花峯
八尾市民 川柳会	11日(日) 13時30分締切 望郷・刻・結ぶ・雑詠	八尾神社内 西郷会館３Ｆ 近鉄八尾駅西口徒歩５分 〒581-0831 八尾市山本町北5―9―3 土谷耀一
川柳塔 わかやま 吟社	11日(日) 13時40分締切 鋏・泥棒・どたどた・臓器	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2―1―2 川上大輪
西宮北口 川柳会	12日(月) 13時45分締切 一途・荒れる・まあまあ 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにしのみや 〒662-0062 西宮市木津山町３―15 亀岡哲子
ほたる 川柳 同好会	13日(火) 13時30分締切 来年・静か (折り句)し・わ・す	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール 蛍池駅駅前ビル５Ｆ 〒561-0813 豊中市小曽根2―4―1 水野黒兎
川柳 あまがさき	13日(火) 14時締切 遠慮・待つ・やんわり・自由吟	尼崎女性センター トレピエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町２-45-８ 山田耕治

柳界展望

★第35回鳥取県川柳大会は10月15日、米子コンベンションセンターで開催。参加者191名。同人成績は次の通り。

鳥取県議会議長賞

伏流を抜けて一皮剥けた　水　徳田ひろし

米子市議会議長賞

まだパワーあるぞと棒を振り回す　新家　完司

鳥取県川柳作家協会長賞

弱ってるハートに赤いバラ千本　竹信　照彦

鳥取県川柳大会実行委員長賞

熱すまで胸で休めている祈り　牧野　芳光

★第63回西日本川柳大会は10月16日、久米南町文化センターで開催。参加者302名。

第一部　事前投句の部

久米南町文化協会会長賞

小島　蘭幸

第二部　当日出句の部

久米南町教育長賞

新家　完司

課題「青空」を小島蘭幸主幹、特別席題「豊」を新家完司副主幹が選者を務めた。

★第62回西宮市民文化祭川柳大会は10月16日、西宮市民会館で開催。参加者103名。本社同人の天位の句。

いつからか夢は祈りになっていた　牧渕富喜子

一合が薬になっている寝酒　西内　朋月

黙祷を何回もして夏終わる　堀　正和

★いよやかの郷第2回川柳コンクールは10月14日に締切られ122通の応募があった。

大賞

虚と実を背負い朝ドラ流れだす　上地登美代

優秀句

城のある町でドラマが動き出す　木本　朱夏

朝ドラにカーネーションが見事咲き　三宅　保州

★第4回「ごんぎつねの郷」全国誌上川柳大会には623名の参加があり、本社同人成績は次の通り。

大会実行委員会賞

一億のなみだ濾過して咲くさくら　髙瀬　霜石

九条を吊るすオリーブのてっぺんに　木本　朱夏

★第35回寝屋川市民川柳大会は11月3日、寝屋川市民会館で開催。同人の天位。

やりがいは後姿についてくる　籠島　恵子

パレードが過ぎて一気に秋加速　西出　楓楽

★河内長野市で川柳展開催。11月3日～5日迄に延べ850人の入館者があり同市の文化祭を盛り上げた。

★小島蘭幸主幹は、10月15日、第34回神戸川柳大会に於て課題「開く」の選者を務めた。

★第26回国民文化祭・京都2011は10月16日、京都府井手町で開催。楓楽理事長、みつ子相談役、完司副主幹、大輪副主幹が出席。楓楽理事長は2次選者を務めた。

新同人紹介

初代　正彦（しょだい　まさひこ）

―楓楽・たもつ・實推薦

内藤　憲彦（ないとう　のりひこ）

―楓楽・たもつ・實推薦

富田　保子（とみた　やすこ）

―楓楽・美籠推薦

平成二十三年初歩教室年間賞

夢抱いて飛び立つ白い滑走路　関　よしみ

粒揃い集めたチームまとまらぬ　山本ふみ子

指切りをしたのに港夕陽だけ　土屋起世子

▼訃　報▲

●岩井三窓氏（番傘川柳本社）は9月22日に逝去されました。享年89歳。ご遺族、岩井伊都子様より「三窓メモリアル」のファイルを拝受しました。

●持田多輝子さん（同人・出雲市）は10月15日逝去。享年94歳。

▽御厚志御礼△

美研アート様より川柳塔まつり句箋を寄贈頂きました。

▽お詫びして訂正△

▼11月号＝P87上段4行目、横浜→神奈川。P88中段21行目、井上輝子→照子。100頁下段2行目、松本知恵子報→選。P102上段1行目、過大→課題。P115中段11行目、芳生→芳山。

▽新誌友紹介△

仙台市　広瀬ちえみ
紹介者　木本　朱夏
紀の川市　楠原　富子
紹介者　三宅　保州
岡山市
紹介者　工藤千代子
紹介者　小野真備雄
神戸市　小島　蘭幸
紹介者　大島　勝
倉吉市　山口　光久
紹介者　松本寿満子
大阪市　牧野　芳光
紹介者　川島吉太郎
池田市　三宅　保州
紹介者　多田　契子
備前市　水野　黒兎
紹介者　森　富美香
大東市　工藤千代子
紹介者　小川賀世子
紹介者　宮崎シマ子
清瀬市　大内　朝子
岸　愛三

常任理事会＝10月24日(月)
①第17回川柳塔まつり反省
②各地句会代表者・役員拡大会議③23年度業務分担について④春の川柳塔まつり誌上川柳大会⑤その他

常任理事会＝11月7日(月)
①各地句会代表者・役員拡大会議②各地川柳大会の状況、川柳塔誌新刊残数確認、新同人の承認・誌友数報告③各部報告④その他

平成23年度　業務分担表

常任理事

総務部	**水野黒兎**	久保田千代	黒田能子
企画事業部	**村上直樹**	柿花和夫	久保田千代
	佐々木満作	坊農柳弘	
編集部	**木本朱夏**	江島谷勝弘	黒田能子
	鈴木いさお		
句会部	**長浜美籠**	居谷真理子	古今堂蕉子
同人誌友部	**鶴田遠野**	河内月子	
渉外部	**坊農柳弘**	河内月子	松原寿子
会計部	**山口光久**	鈴木いさお	
発送部	**鴨谷瑠美子**	佐々木満作	松原寿子
事務部	**山岡冨美子**		

◎太字は部長（部長以外は50音順）　◎アンダーラインは新任者

平成23年11月現在

編集後記

★人生に起承転結ありにけり　薫風

★平成二十三年も残すところ三十日余。辛く苦しい一年だった。傷跡を抱えたまま年の瀬を迎える被災地を思う。掛け声ばかりで遅々として進まぬ復興。私に何ができるのかを、今も胸に問いかけている。

★十月二十四日、作家の北杜夫さんが亡くなられた。八十四歳だった。一九六〇年に『どくとるマンボウ航海記』が大ベストセラーとなり、同年、『夜と霧の隅で』で芥川賞を受賞した。

★精神的心理的に飢餓状態だった三十代の私は、北杜夫をむさぼるように読んだ。良質のユーモアと抒情にみちた著書の数々に、私はすがりついた。果てはファンレターまでせっせと書いた。

★それらの手紙のほとんどに北杜夫はお返事を下さった。今にして思えば精神科医としてのまなざしで、私の手紙を読んでくださったのであろう。私の命の恩人といっても過言ではない。

★北杜夫は、熱烈な阪神タイガースファンであった。タイガースが不調の時には「阪神ダメにつき…」と蟻のように消え入りそうな文字で、蛙が布団を被っているイラスト（冬眠中の意）入りの葉書を下さった。私にとって大切な思い出の時代を喪って、今年の秋はことのほか寂しい。

★「こんにちは　新同人です」の原稿依頼に、十七人が応えて下さった。川柳を始めたきっかけはそれぞれ異なるが、川柳塔という大きな船に乗り合わせた御縁を大切にしたいと思う。

★午後五時を過ぎると宵闇が迫る。本社句会を終えて帰路を急ぐ足元に、かさこそと落葉が舞う。蘭幸主幹は広島から、完司副主幹は鳥取から本社句会に出席される。お疲れさま御苦労さまと心で感謝している。

★「川柳と私」の原稿締切は十二月二十四日。寒中お見舞い広告は十二月二十三日。それぞれご応募お待ちしています。（朱）

◇編集の仕事をしていて一番困ることは、予定の日までに原稿が揃わないことです。とくに毎月15日締切りの「川柳塔」「水煙抄」などは、各選者さんに送る関係上、遅れて到着すると以後の作業に大いに支障を来します。15日必着でご協力下さい。（15日が土日祭日の場合は前日必着）。締切日を過ぎた分については翌月掲載になります。くれぐれもご注意下さい。

◇因みに先月は、締切日を過ぎて到着したものが14件（同人4件、誌友10件）あり、最も遅かったのは20日着でした。

◇次に「川柳塔」「水煙抄」「棒檬抄」については、必ず巻末の専用用紙を使用してください。他の用紙を使用されますと、作業がとてもしづらくなりますのでよろしく。

◇また、作品は濃い鉛筆またはボールペンで判り易く書いてくださるよう、併せてお願い致します。（い）

とことひと

惚けになりにくい人

一般に記憶力は、老化とともに低下する。いつも記憶力を使う訓練をしていれば老化を防ぎ、惚け防止につながると言われています。

芸術家や政治家、特に作家・音楽家・画家・詩人などは惚け（認知症）には極めてなりにくい。かと言って誰にでも政治家や芸術に取り組める訳ではないので、絵を描いたり、エッセイを書いたり、川柳・短歌などを詠む趣味の領域でも、比較的気楽に取り組めるアウトプット（出力）でしょう。

いずれも基本的には、常に物事に好奇心を持ち、マンネリを嫌いしかも、こまめに頭や身体を動かしながら、積極的に人生を楽しんでいれば、認知症になることは少ないでしょう。（井上桂作）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（**2月号**）地名

都道府県
市　姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

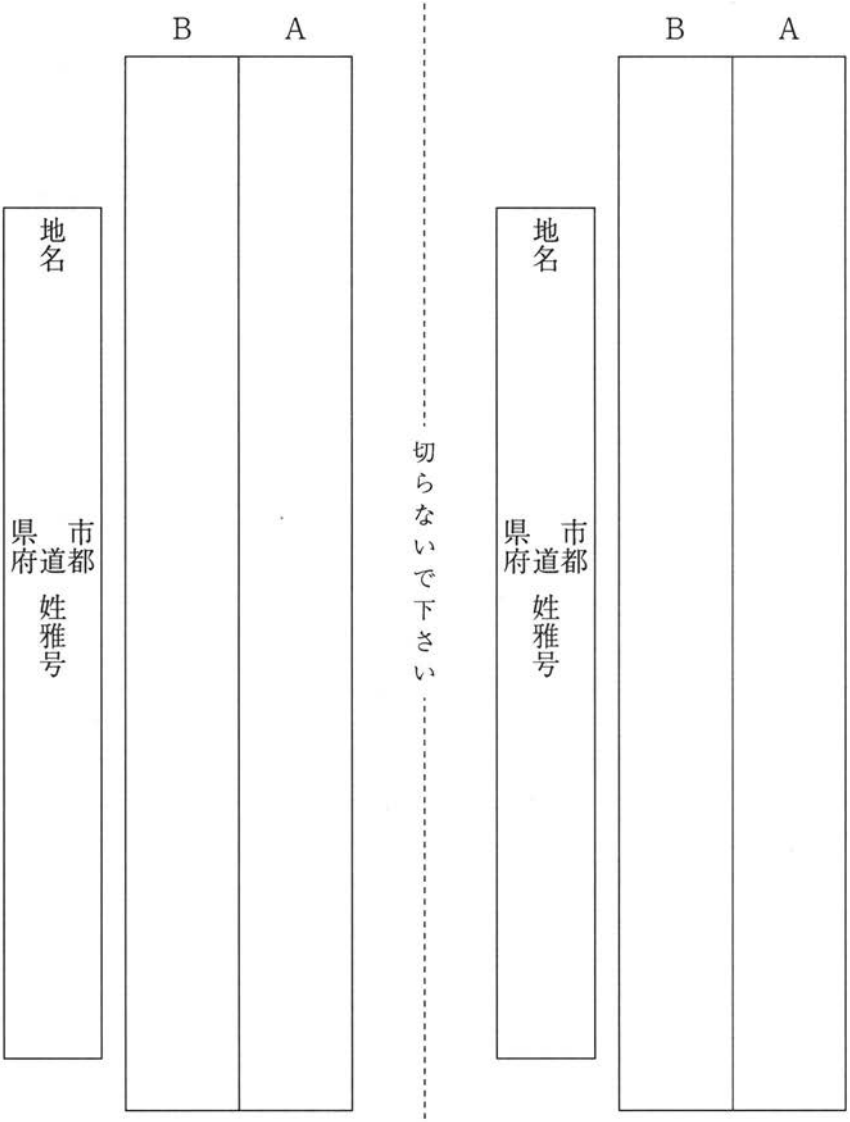
投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「ゆがむ」　(12月15日締切)

2月号発表

池　森子 選 ——共選—— 福士 慕情 選



左右に同じ句を書いて下さい

本社12月句会

とき　12月7日㈬ 13時開場・14時締切
―開場時間、締切時間を変更しています。ご注意下さい。
ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441
おはなし「川柳いろはカルタ」　三宅保州
席題「　」　山口光久選
兼題「不　足」　飛永ふりこ選
「ゼ　ロ」　加島由一選
「惜しむ」　吉村一風選
「　力　」　古今堂蕉子選
「反　省」　小島蘭幸選
（各題2句以内）
会費　1000円　投句料　500円（切手可）

本社1月句会

6日(金) 午後1時から

兼題「　駅　」「マスク」「地　図」
「祝　う」「麺　類」

作品募集

2月号発表（12月15日締切）

川柳塔（8句）　小島蘭幸選
水煙抄（8句）　川上大輪選
愛染帖（3句）　新家完司選
檸檬抄「ゆがむ」（2句）　福士慕情選
池森子共選
一路集（3句）　松本文子選
「冷たい」
「　粒　」　栗田久子選
「がたがた」　竹信照彦選
初歩教室「潔い」（3句）　鈴木公弘担当

3月号

檸檬抄　「目指す」
一路集　「個　性」「カーブ」「しっかり」
初歩教室　「カラー」

第30年度　夜市川柳募集

第7回「隠　す」　佐藤良子選
ハガキに3句　12月末日締切
投句先　〒593-8305　堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
(2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4)各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

定価　八百円（送料84円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇一一年（平成二十三年）十二月一日発行
発行人　小島和幸
編集人　木本朱夏
印刷所　美研アート
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル201号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

川柳塔のホームページアドレス　http://www.senryutou.com/

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成二十三年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一〇一五号　川柳塔　十二月号　定価　八百円（送料　八十四円）

川柳募集

「ごま」にまつわるあなたならではの一句を募集します。

・兼題　「ごま」
・応募要領　川柳塔社主幹　小島蘭幸　選
　郵便八ガキに2句、郵便番号、住所、氏名、電話番号を明記してください。
　入選20句、準特選2句、特選1句に賞品。
　本紙4月号にて発表いたします。
・発表　2012年1月31日（当日消印有効）
・締切り
・投句先　〒543-0052　大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201号室
　川柳塔社　ゴマ川柳係　宛

オニザキの
つきごま
手作りの味わいにこだわり続けて五十余年

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL 0120-30-5050

ご宿泊　10,500円～
ご宴会　15名以上からの受付
※送迎可、片道1時間迄送迎範囲あります。

『春夏秋冬溢れる自然
吟行句会に最適』

川柳に
出逢える温泉郷

牛滝温泉
いよやかの郷

ご予約・お問い合わせ
TEL 072-479-2641
〒596-0114 大阪府岸和田市大沢町1156
http://www.iyoyaka.jp/
いよやか　検索

■（土）（日）のご利用は混み合いますのでお申込みは早い目に。
■ 岸和田川柳会　井伊東吉（TEL 072-444-3227）にご連絡頂ければお取次ぎ致します。

雑誌 05703－12